第３節　遺構・遺物

１．縄文時代（第 46 図）

縄文時代の遺構は、３区南のトレンチ調査で検出した SR03 と、７区 SR04 がある。いずれも東西方向に走行し、旧番屋川の旧流路もしくは調査区南側の丘陵部より流下する開析谷に伴う流路の可能性が考えられる。

自然河川

SR03（第 47 図）

３区南の第２遺構面下で検出した、自然河川とみられる遺構である。第２面の調査後に、南北 5.6 ～ 12.4 ｍ、東西 13.4 ｍ、面積約 108.3㎡を掘り下げて検出した。隣接する調査区で、当該遺構面の調査はなされておらず、また調査範囲が限られるため、流路の規模等の詳細は不明である。幅 9.1 ｍ以上、北東方向へ流下していたとみられる。

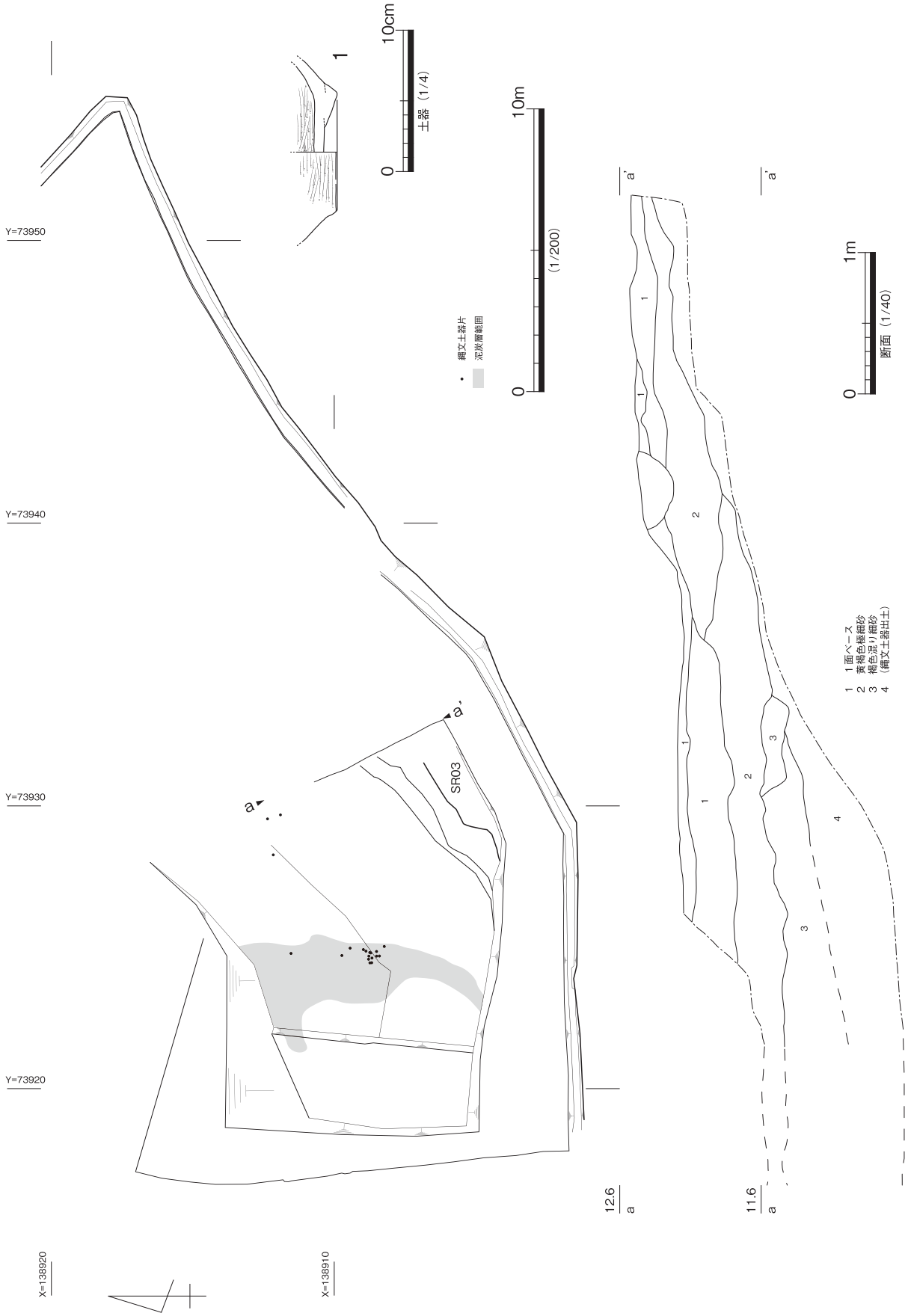
埋土は９層に細分され、４層に大別されている。１層は、第１面のベース層とのみ記載されており詳細は不明。調査箇所周辺の第２面の標高は、12.0 ～ 12.2 ｍ前後と記録されており、１層の堆積レベルより、おそらくは第２面の包含層である可能性が高い。３区東壁（第 14 図）での第２面包含層には、灰オリーブ色細砂（10 層）が記録されている。また、第２面で本流路の落ち込みが確認されていないことから、黄褐色極細砂（２層）は流路上面に堆積した包含層の可能性を考えたい。第２面のベース層として、同図にオリーブ褐色細砂（18 層）と明黄褐色シルト（19 層）が見える。したがって、３・４層が本流路の埋土と考えられ、両層の層厚約 1.0 ｍで、土層記録からは流路はさらに深くなる可能性が高い。また、調査区西側で南北方向に泥炭層の堆積が記録され、土器が出土しているが、泥炭層の詳細や土層図の４層との関係は不明である。

遺物は、縄文土器小片が 20 点余り出土した。大半は、外面に二枚貝条痕を施した粗製深鉢の体部片である。**1** は凹底の底部片。出土遺物より本遺構は、縄文時代晩期に位置付けられると考える。

なお、本流路の４層及び泥炭層から出土した自然木各１点（いずれもコナラ属アカガシ亜属）と、比較試料として隣接する４区のベース砂層出土自然木（ツバキ属）１点の計３点について、放射性炭素年代測定を実施（第４章第１節参照）した。分析の結果流路４層と４区ベース砂層出土資料が縄文時代後期後葉、泥炭層出土資料が縄文時代後期末～晩期前葉の各年代が得られた。流路４層出土資料は、辺材部が残存しておらず、「木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代である」可能性が指摘されている。したがって、３区出土の２点については、出土した土器資料の年代と大きな矛盾は認められない。一方、4 区出土資料の分析結果からは、SR03 とは異なる流路の存在が想定される。後述する古代の溝 SD093 より、縄文時代後期に位置付けられる土器資料が出土しており、当該期の流路が調査区内を流下していたことが考えられる。

SR04（第 48 図）

７区北端部で検出した東西方向の流路である。調査区内で掘り方南岸の一部を確認したのみで、全形は不詳。西端は緩やかに屈曲して調査区外へ延長し、東端は隣接する６区で延長部が検出していない。検出面幅 2.1 ｍ以上、残存深 0.4 ｍ以上を測る。また、検出範囲のうち東側約 6.5 ｍのみ、掘り下げて



第 47 図　SR03 平・断面・出土遺物実測図

調査を行なった。

遺物は、にぶい黄色細砂（２層）より縄文土器深鉢の破片１点が出土した。**２**は、縄文土器深鉢の口縁部片である。器表面の調整は、マンガン等の付着物のため不明。出土遺物が乏しいため、時期を確定することは困難ながら、出土資料より縄文時代晩期の可能性を想定する。なお、上述した SR03 との関係は不明である。

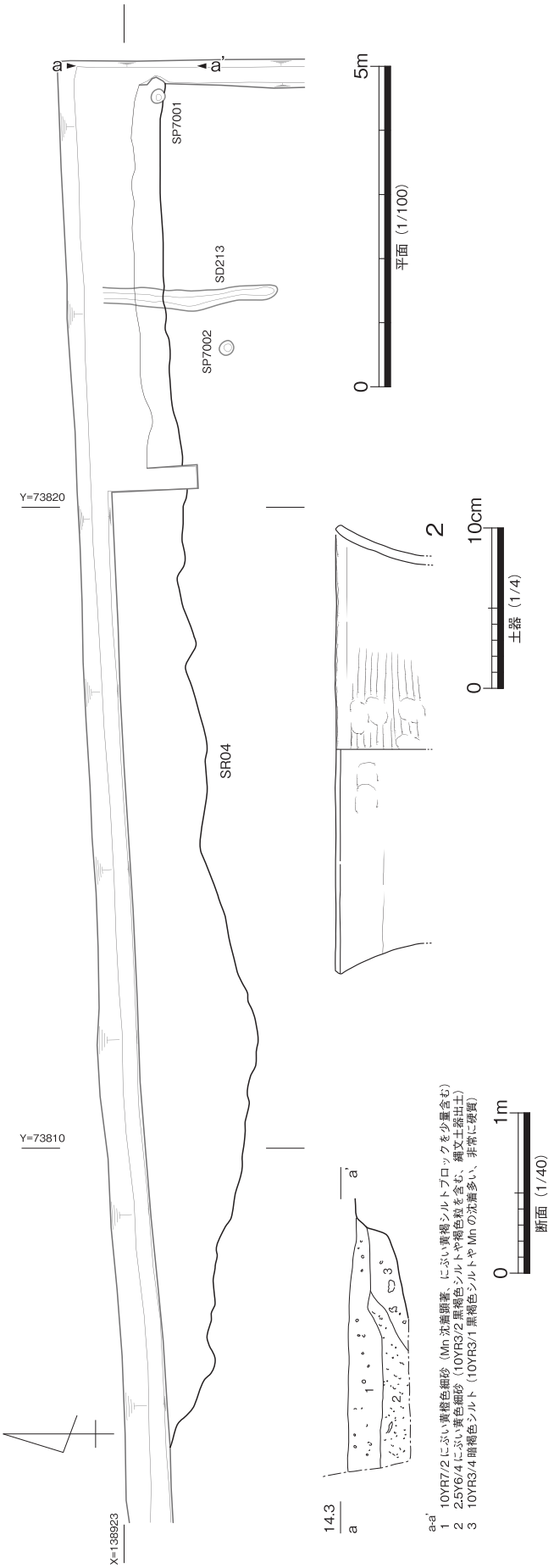
２．弥生時代（第 49 図）

弥生時代の遺構は、竪穴建物１、土坑８、土器棺墓２、溝７、性格不明遺構２、自然河川２を調査した。これらの遺構は、１区の自然河川 SR01・02 や木製品の貯蔵穴とされる SX03 を除くと、概ね６～ 13 区の範囲に集中する。特に土器棺墓群については、本地域では集落内の竪穴建物に近接して埋葬されている例が、成重遺跡（森・信里・長井 2004、森・長井 2005）や原間遺跡（片桐 2002）で確認されており、本遺跡では竪穴建物や掘立柱建物は多く確認されていないが、上述した調査区付近に集落域が展開していた可能性が高いものと考える。また、SD093 等の後出する遺構より、当該時期の土器資料等が多量に出土している点も、傍証となろう。

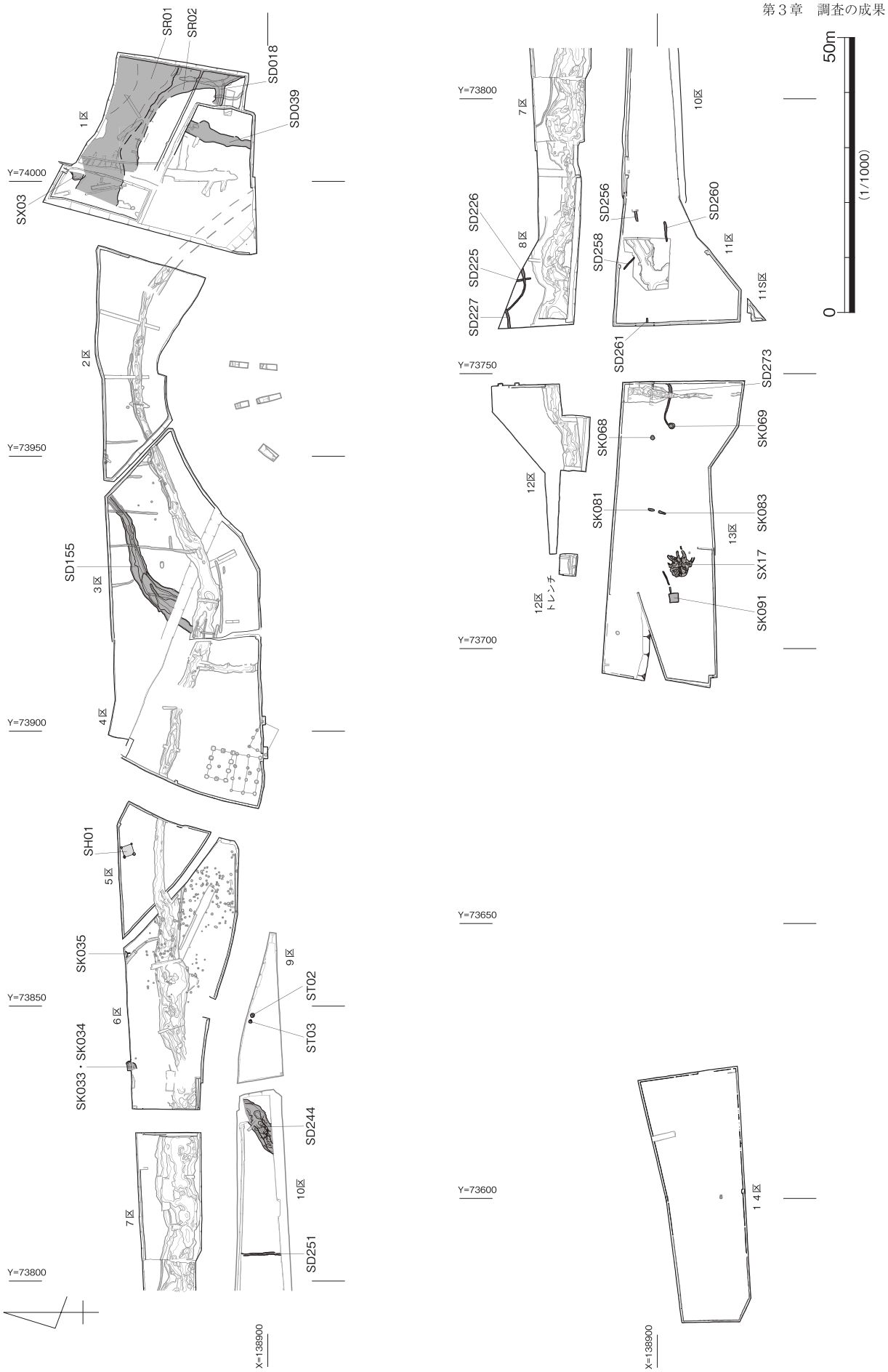
竪穴建物

SH01（第 50 図）

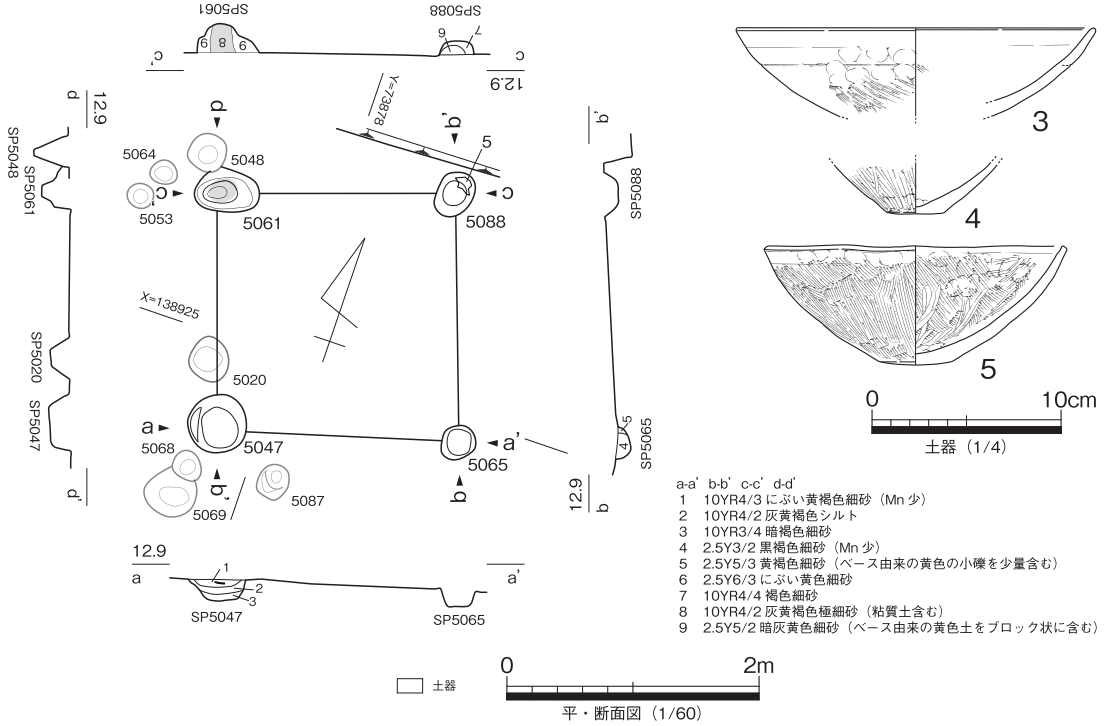
５区中央北端部付近で検出した。床面を削奪された、竪穴建物の主柱穴列として報告する。図上で復元した。SP5047 と SP5088 からは、弥生土器のみが出土し、SP5061 からは弥生土器と共に土師質土器皿や杯等の小片が数点出土しているが、土師質土器は弥生土器とは出土した日付



第 48 図　SR04 平・断面・出土遺物実測図



第 49 図　弥生時代遺構配置図



第 50 図　SH01 平・断面・出土遺物実測図

けが異なり、他の遺構との混同か重複する遺構からの出土の可能性が考えられること、各柱穴より出土した弥生土器に、顕著な時期差が認められないこと、各柱穴が本区中世の柱穴より概して平面規模が大きいこと等より、当該期の柱穴列と判断した。柱穴配置は矩形とはならないものの、概ね南北 1.92 m、東西 1.90 m、南北軸 N 19.61° E に配される。柱穴は、長径 0.25 ～ 0.50 m の不整な略円ないし長楕円形を呈し、残存深 0.12 ～ 0.23 m で、断面形は概ね逆台形状を呈し、SP5061 と SP5047 ではテラス面が付して段掘りとなる。底面の標高 12.55 ～ 12.66 m で、SP5065 がやや浅い。

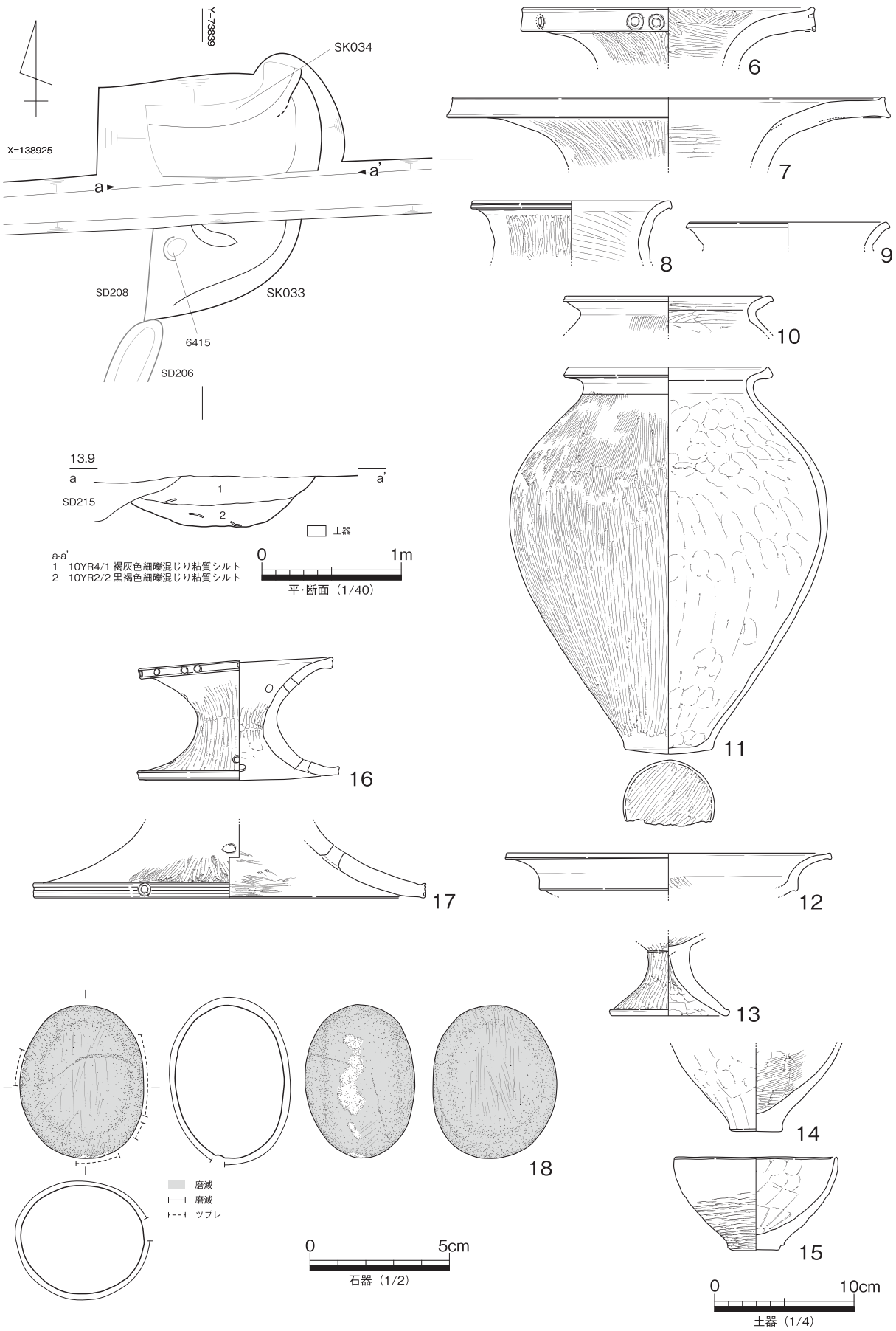
遺物は、SP5065 を除く各柱穴より、図示した以外に弥生土器甕等の小片が各々数点出土した。図示した遺物は、いずれも弥生土器鉢である。出土遺物より、本建物は弥生時代後期末～終末期前葉に位置付けられると考える。

土坑

SK033・SK034（第 51 図）

SK033 は、６区北西隅部で検出した土坑である。西半分は SD208 に切られ、北半部は調査区外へ延長するため一部調査区を北に約 0.8 m拡張したが、北端部は SK034 に切られることが判明し、全形を推測するには至らなかった。また、SP6415 が上面より掘り込まれる。検出範囲で、東西 1.04 m以上、東西 1.30 m以上を測り、東から南側の掘り方は緩やかな弧を描き、検出範囲で隅丸方形状を呈する。残存深 0.36 m で、東西断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。なお、平面記録では第２面の遺構として記録されているが、調査区北壁（第 21 図）では SD215 と同じ遺構面より掘り込まれており、第１面に帰属する遺構として報告する。埋土は２層に細分され、それぞれ褐色系の粘質シルトが水平堆積していた。

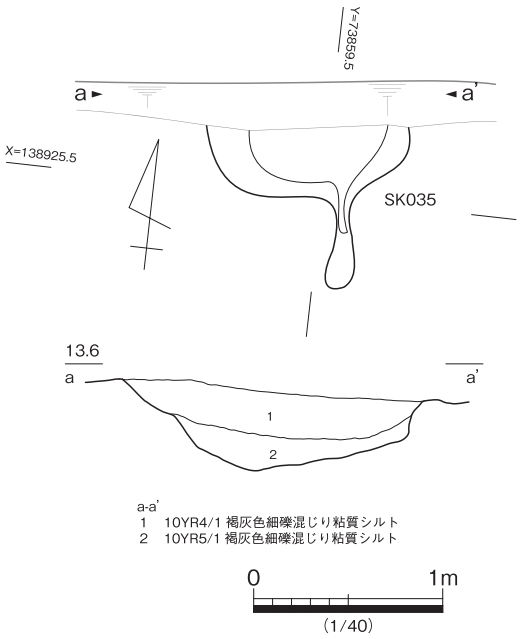
遺物は、図示した以外に弥生土器の各器種がコンテナ２箱程度出土している。土師質土器とみられる



第 51 図　SK033・SK034 平・断面・出土遺物実測図

器種不詳の小片も数点出土しているが、本来は上面から掘り込まれた他の遺構の遺物が混入したものと考える。遺構の規模からすれば、遺物量は多量で、土器を主体とした日常残滓の廃棄土坑であろう。

6 は弥生土器広口壺。口縁部は緩やかに外反して開き、端部は上下に拡張してやや内傾する端面をなす。端面には２個１対の竹管文を４～５ヶ所に配する。**7** も広口壺である。口頸部は緩やかに外反して大きく開き、口縁端部は上下に摘まみ出して拡張し、内傾する端面をなす。内外面ミガキを多用した精製品である。**8** も広口壺だが、口縁部の開きは弱く、直口壺に近い。口縁部は緩やかに外反して開き、直立する端面に沈線１条を施す。**9**・**10** は同甕の口縁部片。端部を小さく下方へ摘まみ出して拡張し、**10** は端面に１条の凹線を施す。**11** は、高松市香東川下流域産の甕。欠損部分は多いが、ほぼ全形を復元可能である。口縁端部は上方へ摘まみ上げて断面三角形状に肥厚し、底部は突出した凸面底を呈する。体部外面には薄く炭化物が付着する。**12** は高杯の杯部の小片。口縁端部は上下に小さく肥厚する。**13** は同小形高杯の脚部。脚部内面はシボリ目の後、裾部を指オサエ・ナデで消す。**14**・**15** は同小形鉢。いずれも底部は突出した平底を呈する。弥生時代後期中葉に位置付けられる。**16** は、同小形器台で、口縁部の一部を欠損する以外はほぼ完形。口縁端面には鈍い凹線を施し、1.5 ～ 3.5㎝間隔でランダムに竹管文を施す。受け部と脚台部それぞれに４孔の径８㎜前後の円形透し孔を穿ち装飾する。口縁、脚台部ともにやや焼成時の歪みが顕著である。**17** は同大型器台の脚部片。裾部に径約９㎜の円形透かし孔を穿ち、脚端部は上下に小さく肥厚して、端面に２条の浅い凹線を施し、竹管文で装飾する。**18** は細粒砂岩製の円礫を使用した磨石である。広端面を中心に擦痕を認め、周縁部には一部敲打痕も認められることから、叩き石としても使用されたと思われる。



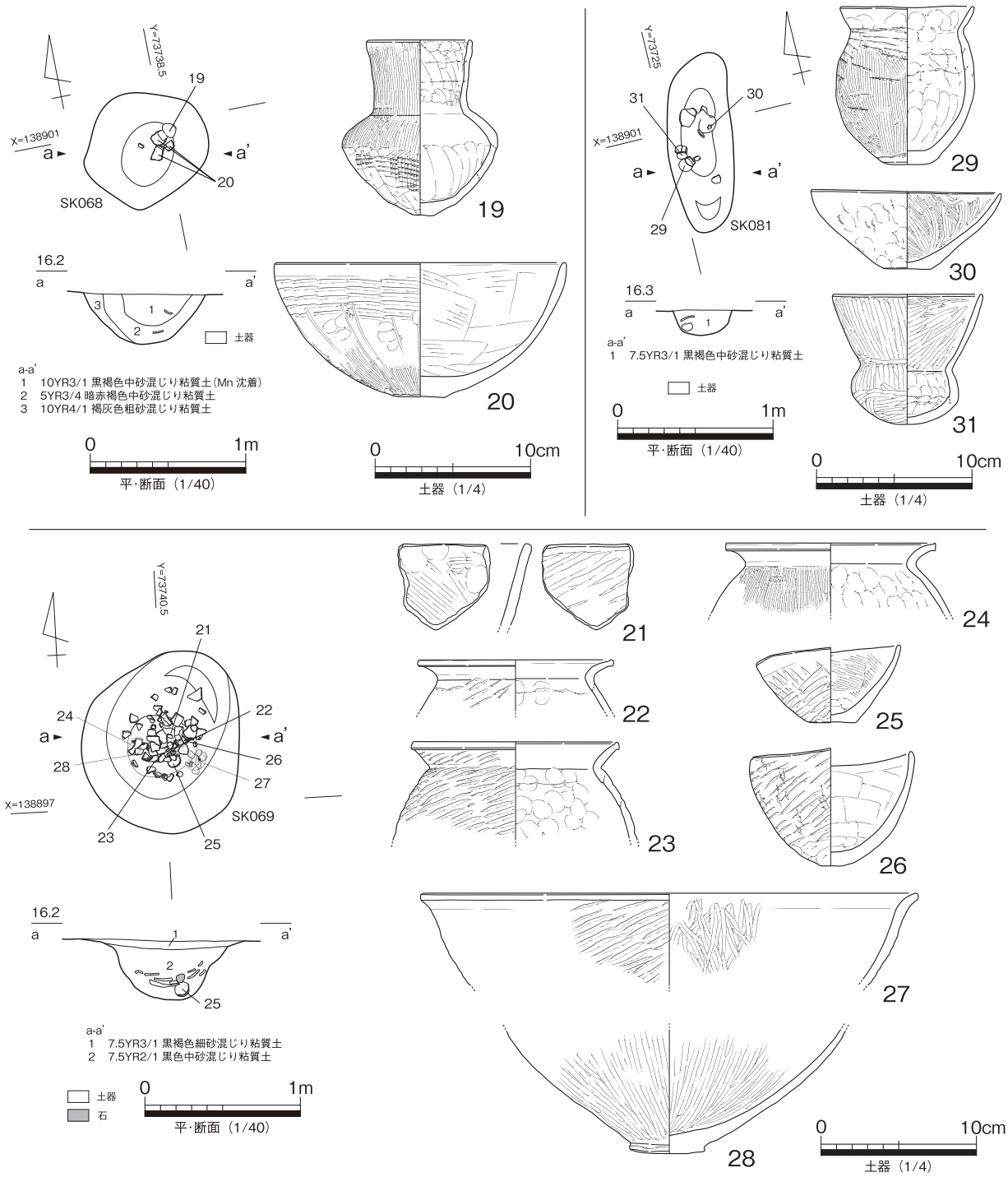
第 52 図　SK035 平・断面図

以上の出土遺物には、弥生時代後期中葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

SK034 は、上述したように SK033 上面より掘り込まれた土坑で、遺構の南端部を検出したにとどまる。規模は、東西 1.07 m以上、南北 0.47 m以上で、平面形は検出範囲で隅丸方形状を呈する。埋土に関する記録はない。遺物は弥生土器甕等の小片４点が出土したのみで、図化した遺物はない。SK033 より後出するが、詳細な時期を特定することは困難である。

SK035（第 52 図）

６区第２面北東隅部で検出した土坑である。北半部は調査区外へ延長し全形は不明。検出範囲で平面形は、東西 1.03 m以上、南北 0.37 m以上、主軸方位N 14.78° Wに配された隅丸方形状の南に、幅 0.08 m前後の溝状部が延長 0.46 m付設され、南端は調査区内で途切れる。しかし、土層断面の記録では、隅丸方形部の東西幅は 1.58 mを測り、平面記録と大きく乖離しており、上述した平面形は記録とは異なる形状であった可能性も考えられる。土坑に溝が取り付く点から、溜め井の可能性も考えられるが、複数遺構が重複している可能性も否定できず、判断は保留する。土坑部の残存深 0.49 mで、断面形は



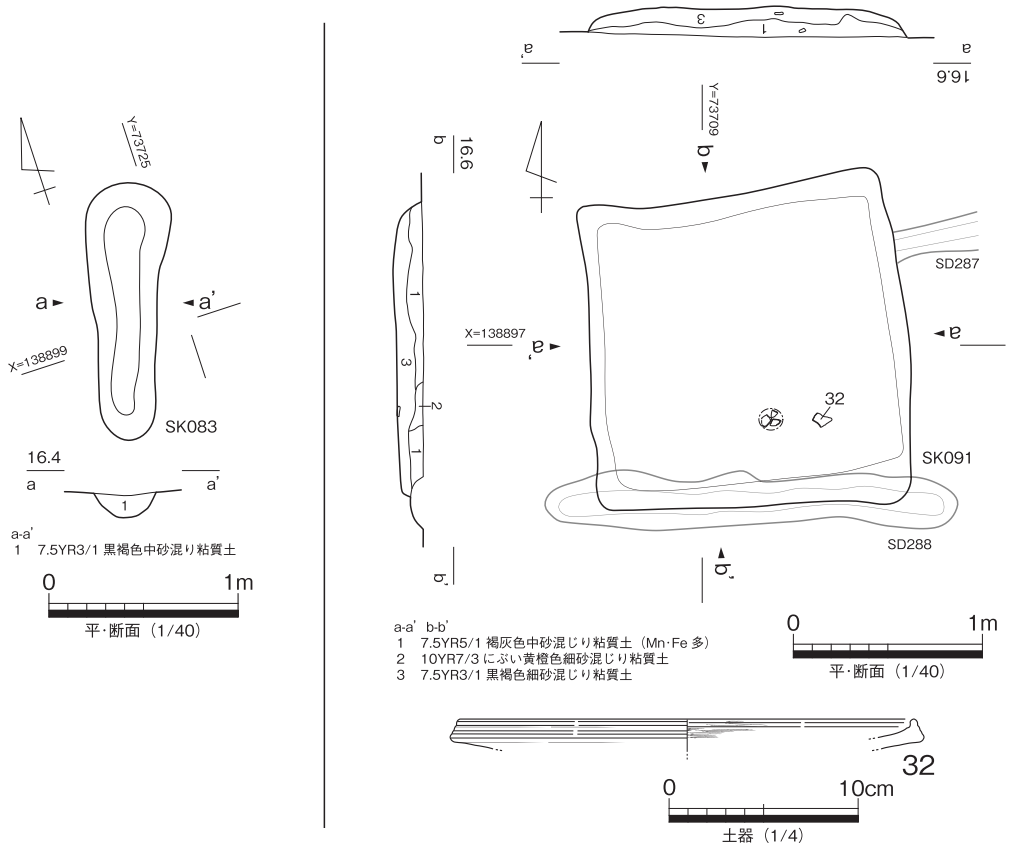
第 53 図　SK068・SK069・SK081 平・断面・出土遺物実測図

歪な逆台形状を呈する。埋土は２層に細分され、褐灰色粘質シルトがレンズ状に堆積していた。

遺物は、弥生土器鉢とみられる土器小片２点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物より、弥生時代後期後半～終末期に位置付けられると考える。

SK068（第 53 図）

13 区東部で検出した土坑である。長軸 0.78 m、短軸 0.73 m、平面形はやや東西に長い歪な隅丸方形状を呈する。残存深 0.32 m、断面形は碗底状を呈する。埋土は３層に細分され、褐色系粘質土がレン



第 54 図　SK083・SK091 平・断面・出土遺物実測図

ズ状に堆積していた。埋土の堆積状況からは、複数回の改修の可能性も考えられるが、遺物の出土状況からは

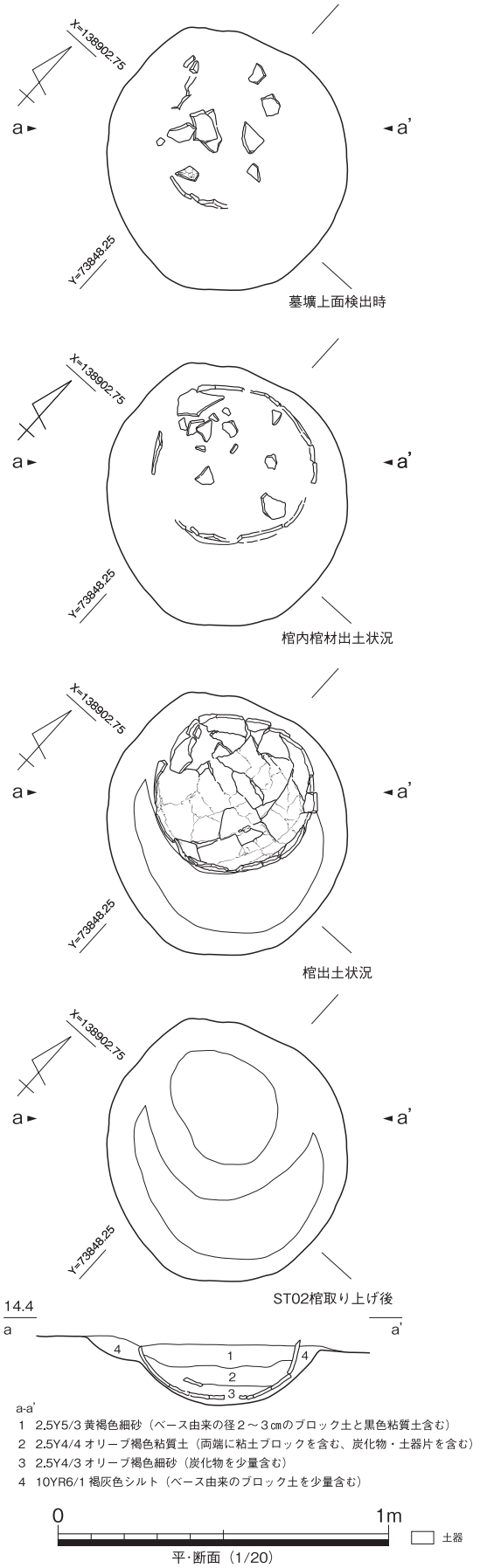
遺物は、図示した以外に弥生土器甕や鉢等の小片が 20 点程度出土した。**19** は、完形の小型直口壺である。肩部に強い張りを認め、体部下半にケズリ調整を加えて、小さな平底を成形する。**20** は、弥生土器鉢。外面は、タタキ調整の後、ハケやナデによりタタキを消し、部分的にミガキ調整を装飾的に加える。内面は、ハケ調整するが、マメツ等により不明瞭である。

出土遺物より本土坑は、弥生時代後期末～終末期古相に位置付けられると考える。

SK069（第 53 図）

13 区東部で検出した土坑である。長軸 1.15 m、短軸 1.06 m、平面形は南北に長いやや歪な楕円形状を呈する。残存深 0.37 m、断面形は上位 5 ～ 6 ㎝は緩やかに掘り込まれ、以下は碗底状を呈する。埋土は 2 層に細分され、上位の傾斜の緩やかな部分を中心に上層が堆積し、下位は黒色粘質土で埋没していた。下層中の底面よりやや上位で、一括投棄された状況で多量の土器が出土した。遺物の出土状況より、土坑開削後土器の廃棄まで、一定期間オープンな状況で放置されたか、有機質の残滓を廃棄した可能性が考えられる。

21 は、縄文時代後期の無文系深鉢の口縁部片。混入資料である。**22** は、弥生土器小形甕。口縁端部の肥厚は弱く、四角くおさめる。**23**・**24** は同甕。**23** は口縁叩き出しの甕である。**25**・**26** はほぼ完形の同小形鉢。いずれもタタキ成形で、底部は平底を呈する。**27** は同大形鉢。口縁部は叩き出しで、小



第 55 図　ST02 平・断面図

さく折り返して、端部を四角くおさめる。**28** は同大形鉢の底部片。底部は円盤状に突出した曲面底を呈し、底面には木葉痕を認める。

出土遺物より、弥生時代後期末を中心とした時期に位置付けられる。

SK081（第 53 図）

13 区中央東半部で検出した溝状を呈する土坑である。平面形は、長軸 1.13 m、短軸 0.39 m、主軸方向N 12.49° E に配された、南北に長い不整隅丸長方形を呈する。残存深は 0.16 m で、横断面形はU字状を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単層であった。

遺物は、図示した以外には、器種不詳の弥生土器の小片が 10 点程度出土した。いずれも土坑底面より、やや浮いた位置から出土している。**29** は口縁部の大半を欠く以外、体・底部は完存状態で出土した弥生土器小形甕である。底部は僅かに突出した曲面底を呈する。**30** は、ほぼ完形の弥生土器小形鉢。底部はやや小さな平底を呈する。**31** もほぼ完形で出土した小型丸底土器である。

出土遺物より、本遺構は弥生時代後期末～終末期前葉に位置付ける。

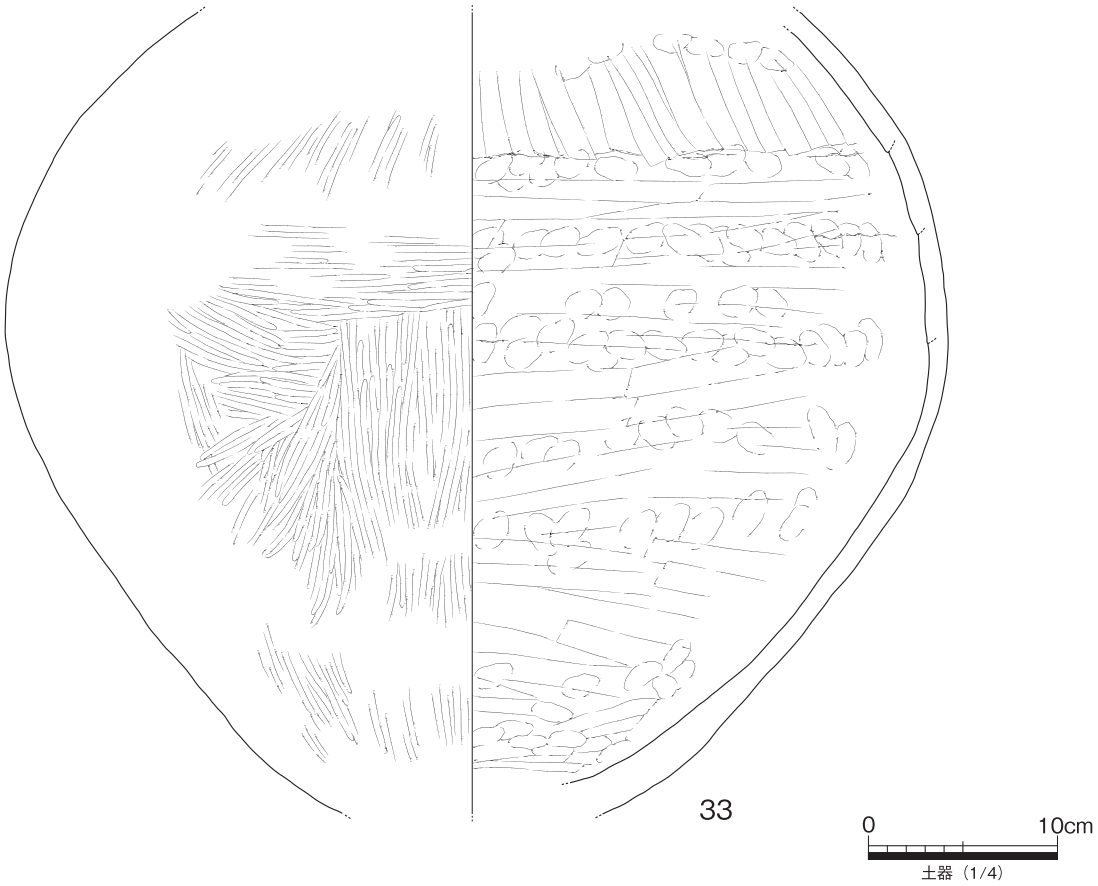
SK083（第 54 図）

13 区中央東半部で検出した溝状を呈する土坑である。平面形は、長軸 1.34 m、短軸 0.27 ～ 0.42 m、主軸方向N 17.99° E に配された、不整隅丸長方形状を呈する。残存深は 0.13 m で、横断面形はU字状を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単層であった。

遺物は出土していない。上述した SK079 の南延長上に位置し、埋土も酷似することから、同時期の遺構の可能性を想定する。

SK091（第 54 図）

13 区南西部で検出した土坑である。SD288、SD287 と重複し、SD288 より先行し、SD287 より後出する。平面形は、長軸 1.68 m、短軸 1.64 m、主軸方向N 87.6° E とほぼ正方位に配された、やや



第 56 図　ST02 出土遺物実測図

東西に長い隅丸方形を呈する。残存深は 0.14 ｍで、断面形は底面が平坦な浅い逆台形状を呈する。埋土は２～３層に細分され、主に褐色系粘質土が水平堆積していた。遺物は主に下層より出土している。

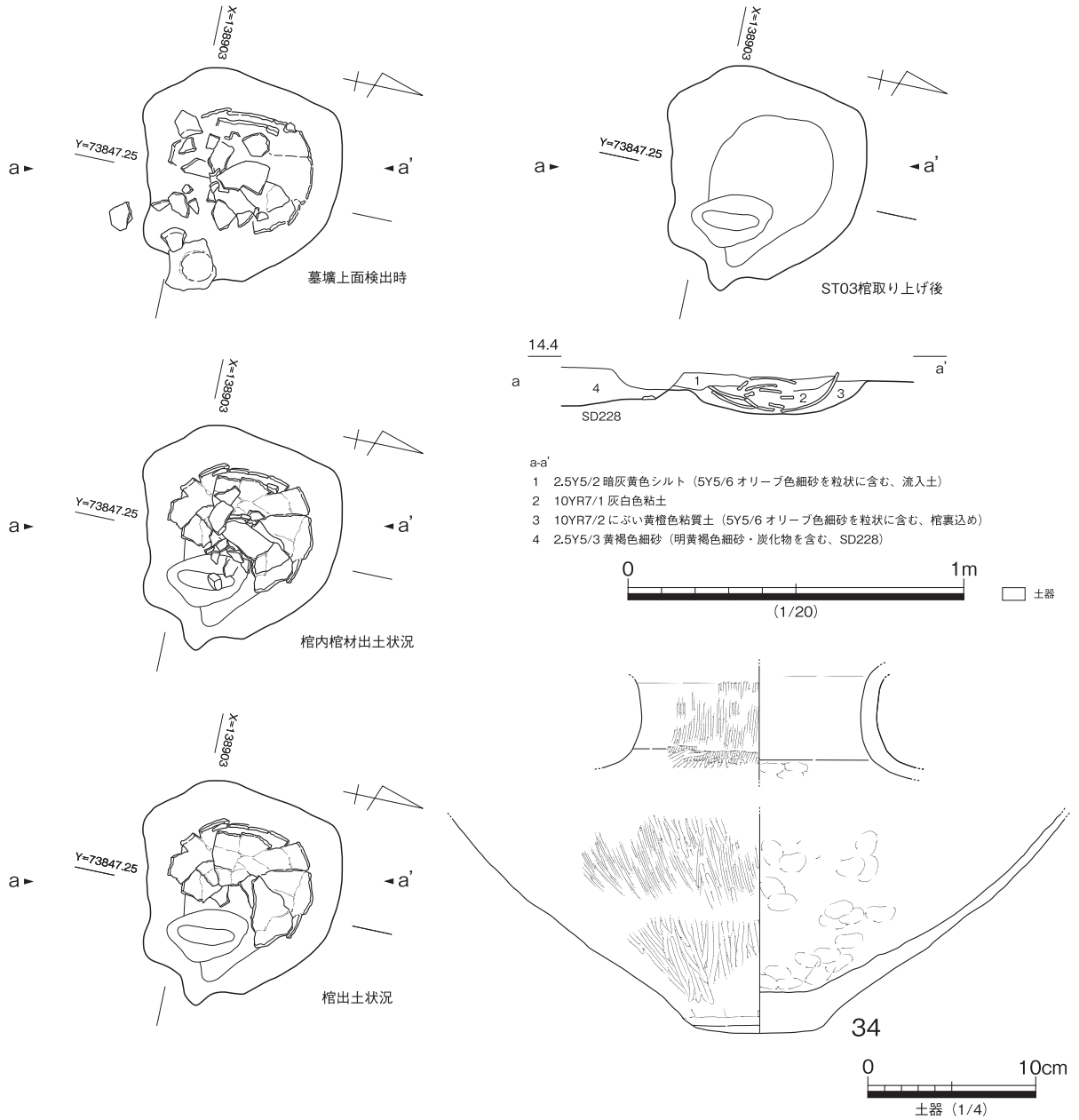
遺物は、図示した以外に、弥生土器壺・甕等の小片が 50 点程度出土している。**32** は弥生土器広口壺の口縁部小片。端部は上方へ摘まみ上げ、内傾する端面は板状工具によるナデ調整により、３～４条の擬凹線を認める。胎土中には微細な黒雲母や火山ガラス粒が少量含まれ、他地域からの搬入土器の可能性がある。

出土遺物より、本遺構は弥生時代終末期古相を中心とした時期に位置付けられる。

土器棺墓

ST02（第 55・56 図）

９区中央北部で検出した土器棺墓である。墓壙は、長軸 0.79 ｍ、短軸 0.69 ｍ、主軸方向Ｎ 61.45° Ｗに配された、東西に長いやや歪な楕円形状を呈する。底面は２段に掘り込まれ、検出面より 0.06 ｍ下位で東南部に幅約 0.2 ｍのテラス面が検出され、北西部はやや深く検出面より 0.19 ｍ掘り込まれて、断面碗底状を呈する。土器棺は深く掘り込まれた土壙北西部に据えられていた。棺は上半部を削奪され、下半部のみが残存していた。底部の位置が不明なため、棺の設置角度等の詳細は不明である。土坑埋土は４層に細分され、下層（４層）は土器棺設置時の裏込め土。上層（１～３層）は棺内埋土で褐色系の細砂や粘質土が水平堆積し、上位２層には少量のブロック土の混入が認められた。埋葬後に棺の隙間から、徐々に棺内へ流入堆積したものと考える。なお、棺内埋土は目開き 500 μの篩で水洗選別を行った



第 57 図　ST03 平・断面・出土遺物実測図

が、人骨や歯牙、副葬品類は出土しなかった。

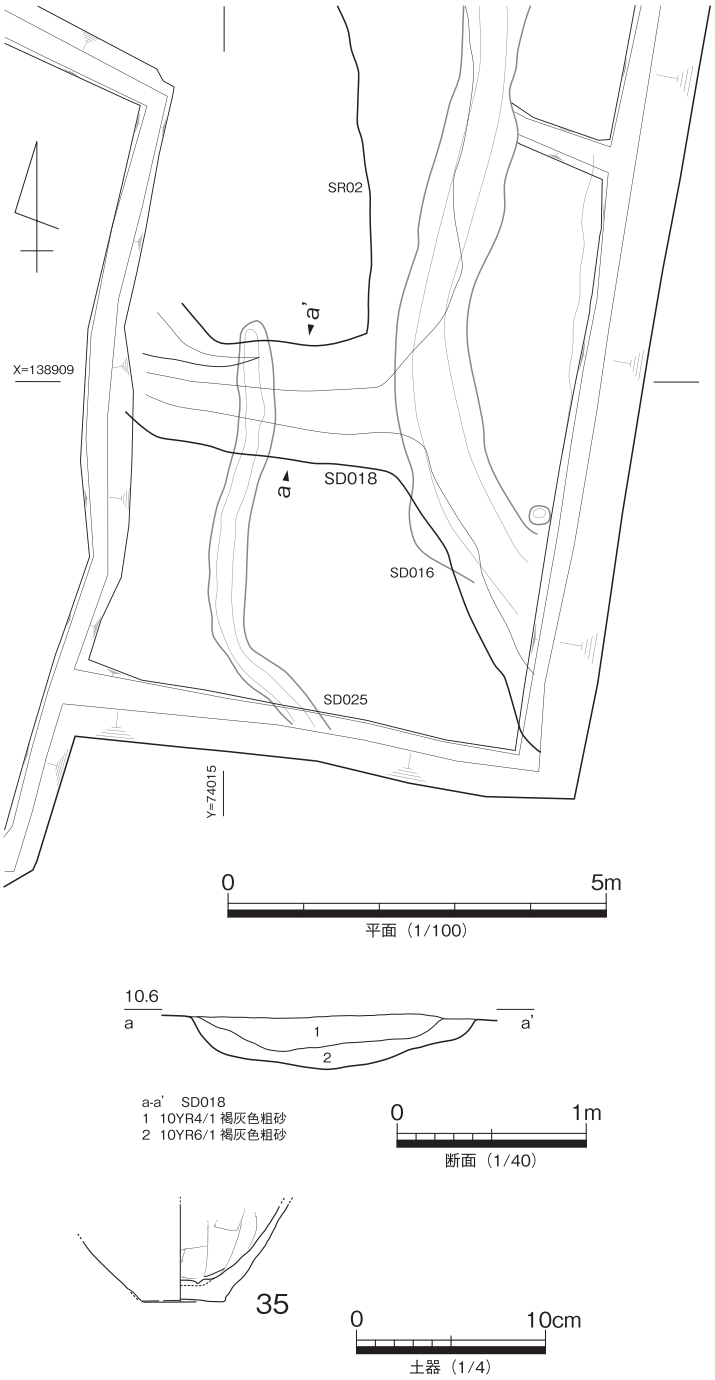
33 は弥生土器大形壺の体部片で、土器棺の棺身である。倒卵形の体部を有し、底部は丸底になるとみられる。体部外面にはミガキ調整が施された精製品である。口頸部を欠損しているため詳細な時期は不詳だが、弥生時代終末期に位置付けられると考える。

ST03（第 57 図）

９区中央北部、上述した ST02 の西に約１m離れて検出した土器棺墓である。平面図の記録では、中世溝 SD228 より後出することが記録されている。しかし、写真記録では棺南東部は削奪され、底部片が溝底付近に横転して出土していることが確認できる。こうした棺材の出土状況は、棺安置後に攪乱を被った可能性を示しており、つまり SD228 より本土器棺は先行する可能性が考えられ、SD228 の時期

とも整合する。墓壙は、長軸 0.65 m、短軸 0.62 m、平面形は歪な隅丸方形状を呈する。墓壙外に棺材が散乱した状況で墓壙を検出しており、本来はより整った隅丸方形ないしは楕円形状を呈していたとみられる。残存深は 0.12 mと浅く、断面形は皿状を呈する。墓壙中央部で土器棺を検出した。検出状況より体下半部が墓壙底に接するように、斜めに傾けて棺を据え置いていたようだが、埋葬後かなり初期の段階で土圧により棺が破砕し、墓壙埋土中より折り重なるように体部片が出土した。その後上面の削奪を被り、また棺取り上げ時に小片化したため、図示した以上に棺を復元することは困難であった。埋土は３層に細分された。１層は土器棺破砕後に墓壙内に堆積したシルト層。２層は埋葬後に棺の隙間から、徐々に棺内へ流入堆積した粘土層である。３層は、棺設置時の裏込め土。なお、ST02 同様に棺内埋土については、目開き 500 μの篩で水洗選別を行ったが、人骨や歯牙、副葬品類は出土していない。

34 は土器棺である。棺は、頸部が直立する大型広口壺とみられ、底部はやや突出した凸面底を呈する。本資料も、ST02 とほぼ同時期に位置付けられると考える。

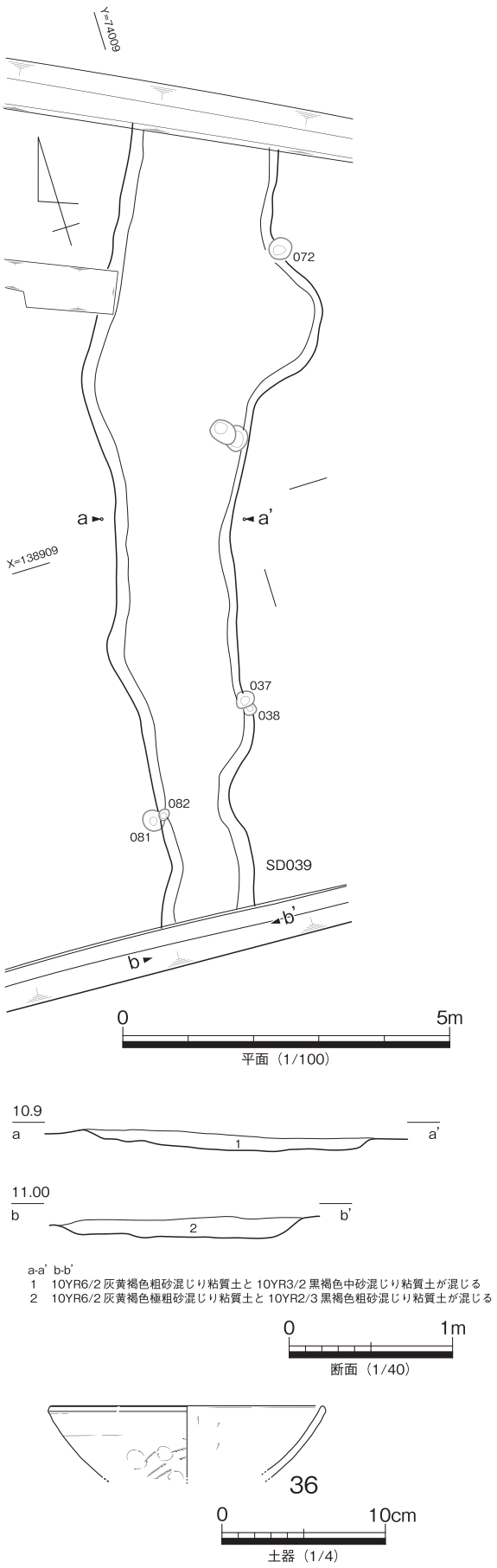


第 58 図　SD018 平・断面・出土遺物実測図

溝

SD018（第 58 図）

１区２面南東隅付近で検出した東西溝である。SD025 及び後述する SR02 との合流部付近で SD016 と重複し、そのいずれよりも先行する。SR02 より西へ約 3.2 m延び、調査区内で途切れる。検出面幅約 1.52 m、残存深 0.30 mで、断面形は椀底状を呈する。埋土は２層に細分され、褐灰色粗砂がレンズ状に堆積していた。溝機能時の堆積層と考えられる。溝底面の標高は、西端部で 10.3 m前後、SR02 との合流部付近で 10.2 m前後を測り、高低差より SR02 へ流下していた可能性が考えられる。



第 59 図　SD039 平・断面・出土遺物実測図

遺物は、図示した以外に、器種不詳の土器小片２点とサヌカイトの剥片１点が出土した。**35** は弥生土器甕の底部片。同一個体の小片が、重複する SD025 より出土した。底部は平底を呈する。体部外面は、２次的な被熱による器表面のハクリが顕著に見られる。また内面には、土器製作時の板ナデ等により器壁を削った際に生じたとみられる粘土小塊が貼り付いている。出土遺物より本遺構は、弥生時代後期後半～末を中心とした時期に位置付けられると考える。

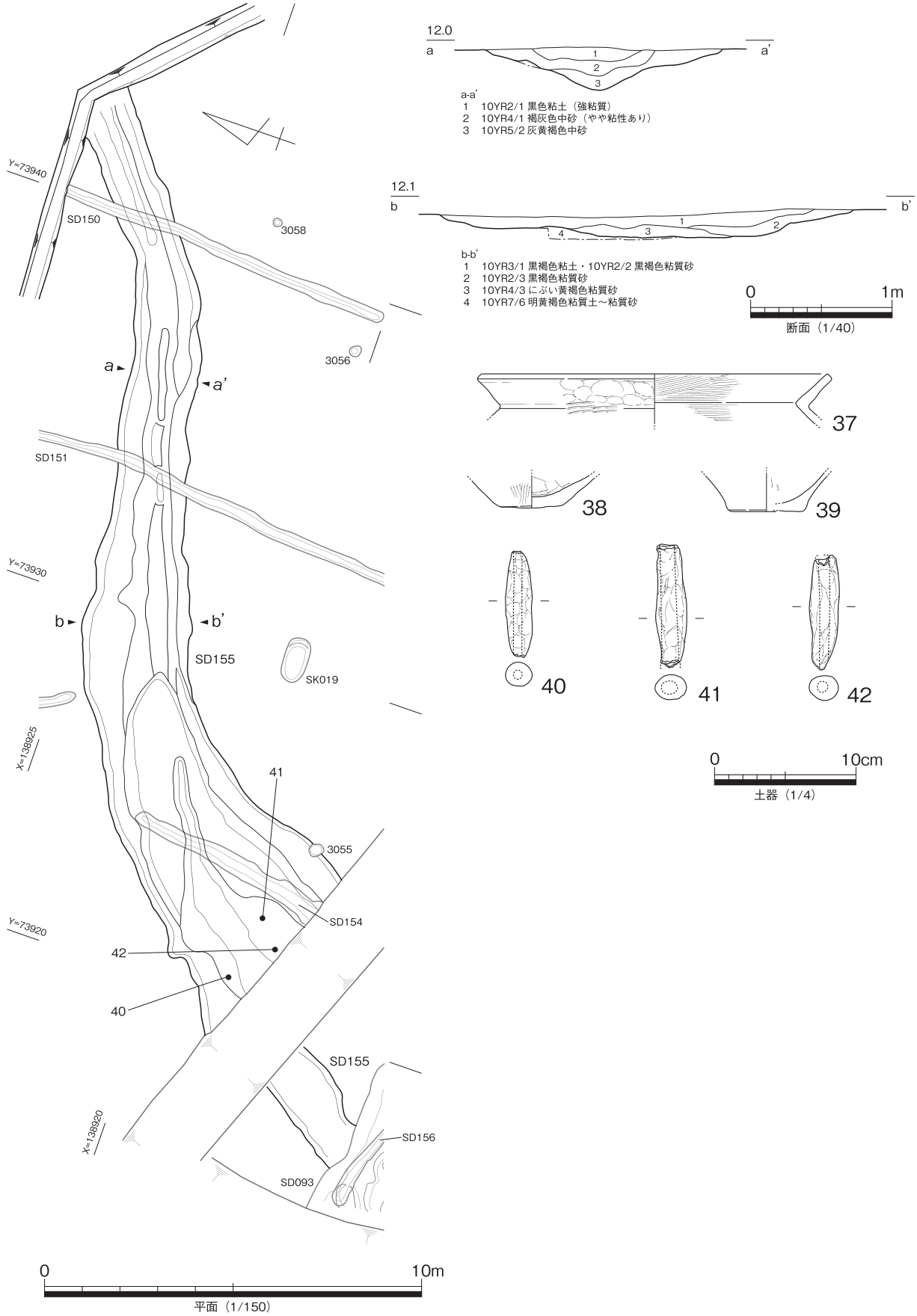
SD039（第 59 図）

１区２面中央南端付近で検出した南北溝である。南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。南北長約 11.9 m を調査した。検出面幅 1.35 ～ 2.28 m、残存深 0.15 m 前後、断面形は底面が概ね平坦な浅い皿状を呈する。掘り方両側は起伏が顕著だが、流路方向は概ね N 17.69° E に配される。埋土は灰黄褐色粘質土を主体とした単層である。流路底面の標高は概ね 10.7 m 前後で一定し、高低差より流下方向を特定することは困難であった。

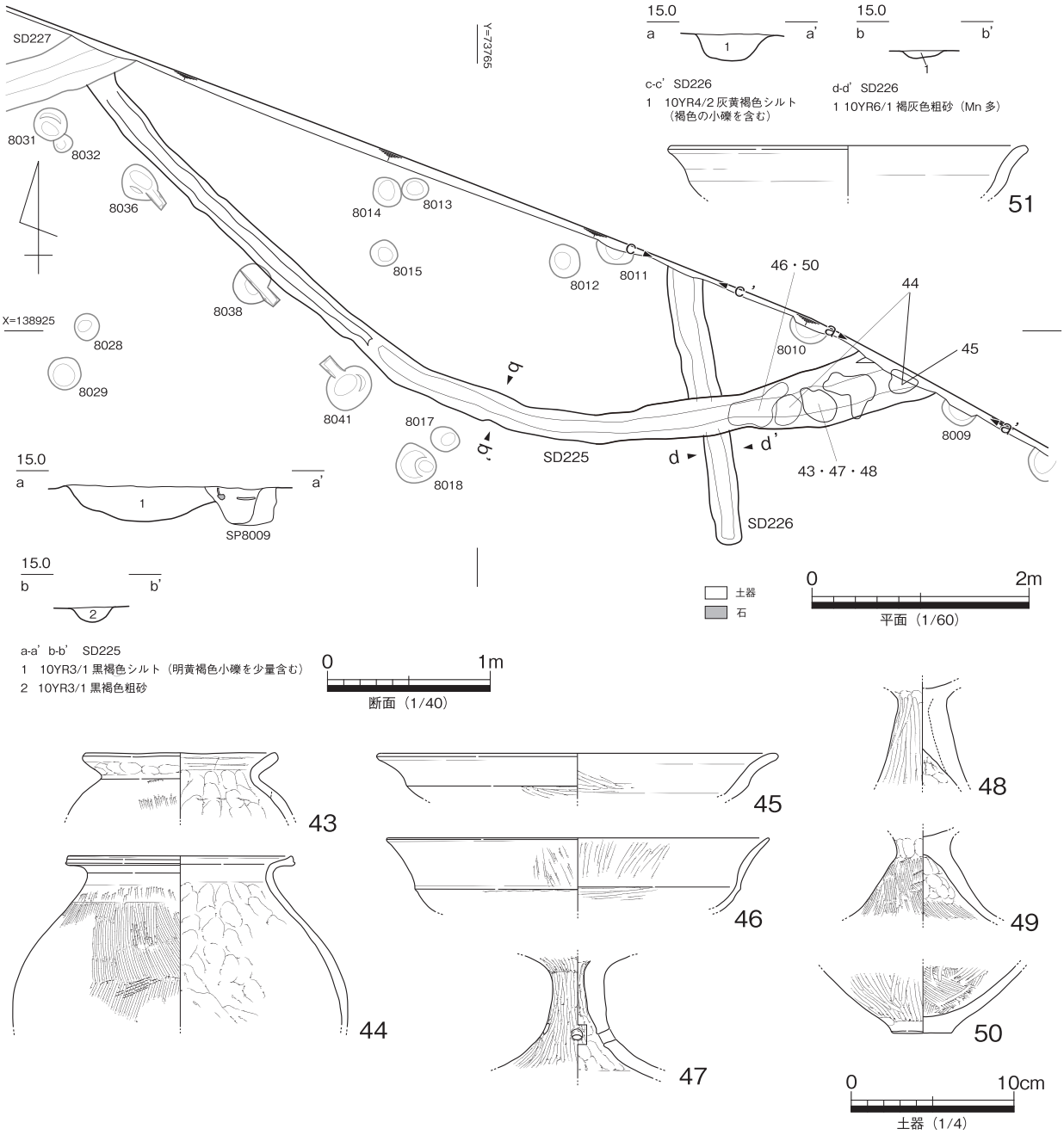
遺物は、弥生土器甕等の小片が若干量出土した。**36** は弥生土器鉢の口縁部片である。外面下半部には、２次的な被熱による煤が薄く付着する。出土遺物より本遺構は、弥生時代後期後葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD155（第 60 図）

３区２面北東部で検出した溝である。緩やかに蛇行して北東方向に配され、北端は調査区外へ延長し、南端は SD093 に切られ、SD093 の南側で延長は確認されなかった。重複関係より、SD093、SD150、SD151、SD154 より先行する。検出面幅 1.33 ～ 4.23 m、残存深 0.20 ～ 0.32 m、断面形は皿状を呈する。埋土は３層に細分され、下位２層は溝機能時の堆積物である褐色系中砂が、上位には溝廃絶後の低湿地状況下で堆積したとみられる黒色系粘土が、それぞれレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、南端



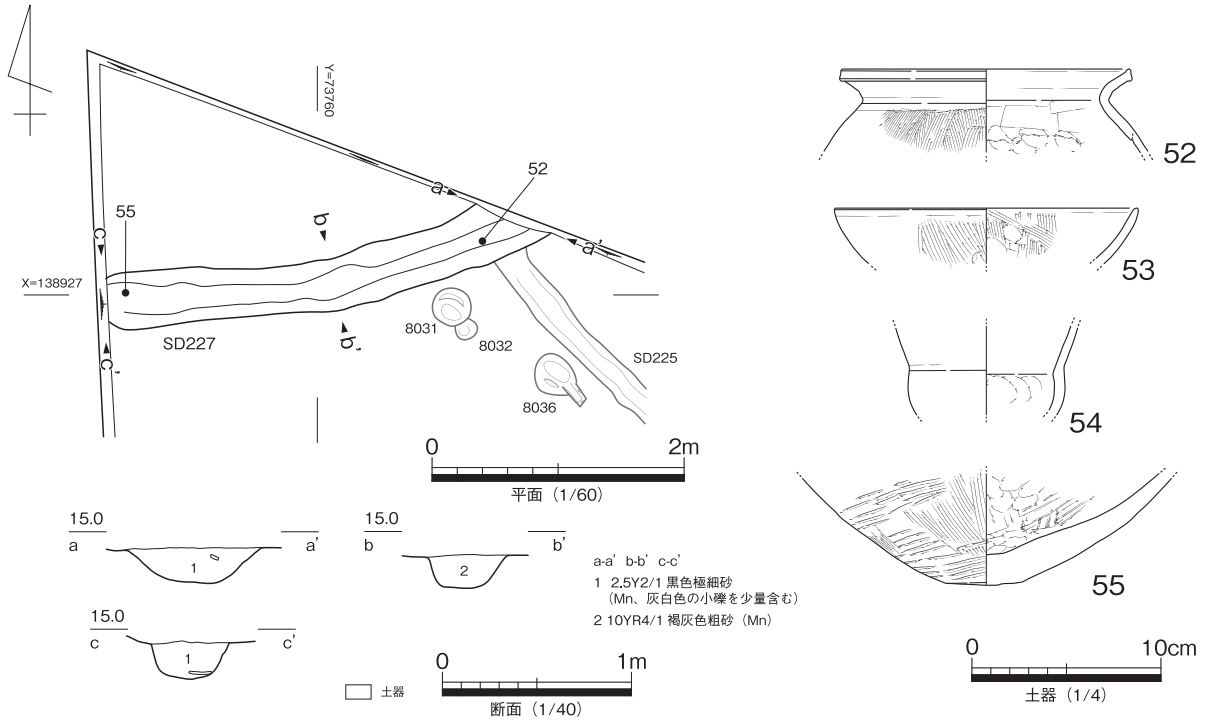
第 60 図　SD155 平・断面・出土遺物実測図



第 61 図　SD225・SD226 平・断面・出土遺物実測図

付近で 12.0 m前後、北端付近で 11.6 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が想定される。

遺物は、図示した以外に弥生土器甕や高杯等の小片が若干量出土した。**37** は、弥生土器甕の口縁部片。口縁部タタキ出しの甕で、口縁端部を四角くおさめる。**38** は同壺、**39** は同甕の底部片である。**38** は、やや凸面底状の平底を呈する。**39** は、やや突出した平底を呈する。胎土中に角閃石粒を含み、高松市香東川下流域産土器の搬入品である。**40** ～ **42** は、ほぼ完存の大型管状土錘である。横断面形は不整楕円形を呈し、器表面は指オサエ等による起伏を顕著に認める粗製品である。重さは一部を欠損するが、概ね 22 ～ 27 g を測る。３点の土錘は、溝南端付近でまとまって出土しており、一括投棄された可



第 62 図　SD227 平・断面・出土遺物実測図

能性が考えられる。

本溝は、出土遺物より弥生時代後期末を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD225（第 61 図）

８区北東隅付近で検出した弧状を呈する溝である。東西両端は調査区外へ延長し、約 8.6 m を調査した。重複関係より、SD226 より後出し、SD227 や SP8009 等の柱穴より先行する。溝は、検出面幅 0.2 ～ 0.55 m、残存深は調査区北壁で約 0.22 m を測り、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、西端部で 14.80 m 前後、東端部で 14.70 m 前後を測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は黒褐色シルトないし粗砂の単層であった。

遺物は、溝東端部よりまとまって出土した。出土状況より複数回に分けて、投棄した可能性が考えられる。図示した以外に、弥生土器甕・高杯等の小片のほか、土師質土器足釜・大甕、桟瓦片等が 100 点程度出土した。中世以降の資料は、出土点数も乏しく混入と考える。**43** は弥生土器甕。体部は球胴に近い。**44** は、胎土中に角閃石細粒を含み、高松市香東川下流域地域からの搬入品である。口縁端部は上方へ小さく摘まみ上げ、端面に 1 条の沈線を施す。**45**・**46** は高杯の杯部片、**47** ～ **49** は同脚部片である。**47** は中実の脚部片で、脚部を成形した後、脚柱部に粘土を充填しているのが破断面から観察できる。**50** は同鉢の底部片である。

出土資料より、弥生時代終末期を中心とした時期に埋没したことが考えられる。

SD226（第 61 図）

８区北東部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し、南端は調査区内で途切れる。約 2.5 m を調査した。上面より上述した SD225 が穿たれる。溝は、検出面幅 0.32 m、流路方向 N 9.75° W に配

される。残存深は北壁部分で0.16ｍ、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は褐色系シルトの単層であった。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器の小片７点が出土した。**51**は、弥生土器高杯の杯部小片。杯上半部は外反して開きつつも、下半部と比して発達しない。出土遺物より、弥生時代後期後半を中心とした時期に位置付けられ、SD225の時期とも矛盾しない。

SD227（第62図）

８区北西隅部で検出した東西溝で、両端は調査区外へ延長し、市道を挟んで西側に隣接する12区で延長溝は確認していない。重複関係より、SD225より後出する。緩やかに南に弧を描いて配され、約3.3ｍを調査した。検出面幅0.43ｍ前後、残存深0.2ｍ、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗色の極細砂ないし粗砂の単層であった。

遺物は図示した以外に、弥生土器や古式土師器の甕等の小片40点程度が出土した。**52**は弥生土器甕。口縁部は強く外反して短く開き、端部は小さく上方へ摘まみ上げる。**53**は弥生土器鉢の口縁部片。弥生時代終末期に位置付けられ、SD225からの混入の可能性がある。**54**は小型丸底土器。器表面はマメツが顕著なため、調整等は不明である。**55**は大型壺の底部片。底部は小さな凸面底を呈する。

出土遺物より、古墳時代前期前葉の埋没と考える。

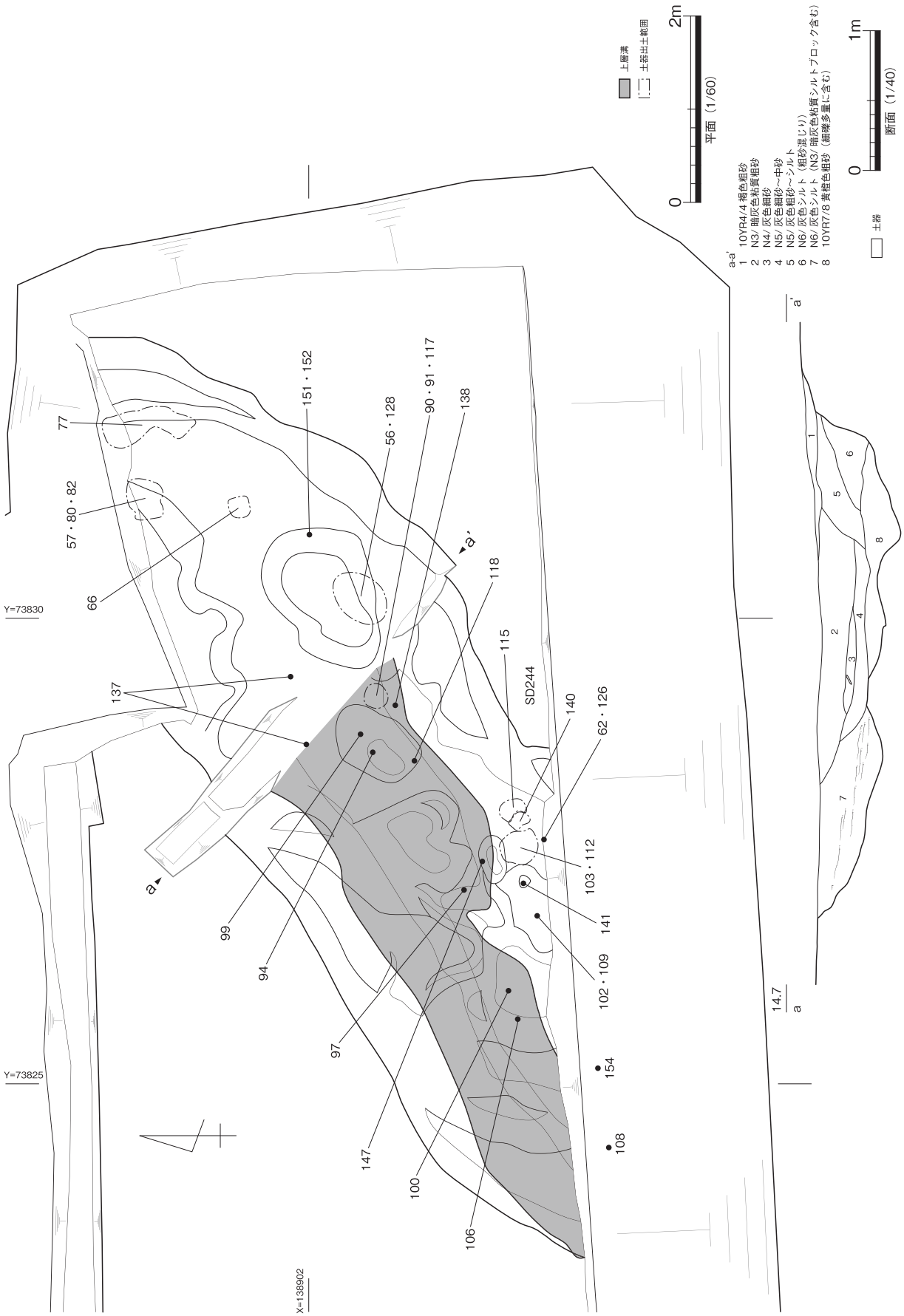
SD244（第63～68図）

10区東端で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、調査区内で南北長約8.0ｍを調査した。北側に位置する６区で延長溝は確認されず、延長部には中世にSD210等が南北に配されることから、それらにより削奪された可能性が考えられる。概ね直線状に流下し、流路方向はN 55.39° Eに配される。検出面幅3.8ｍ前後、残存深0.72～1.20ｍを測り、断面形は逆台形状ないし碗底状を呈する。なお溝底面は、激しい水流により下刻が繰り返され、小穴状の起伏が顕著に認められる。

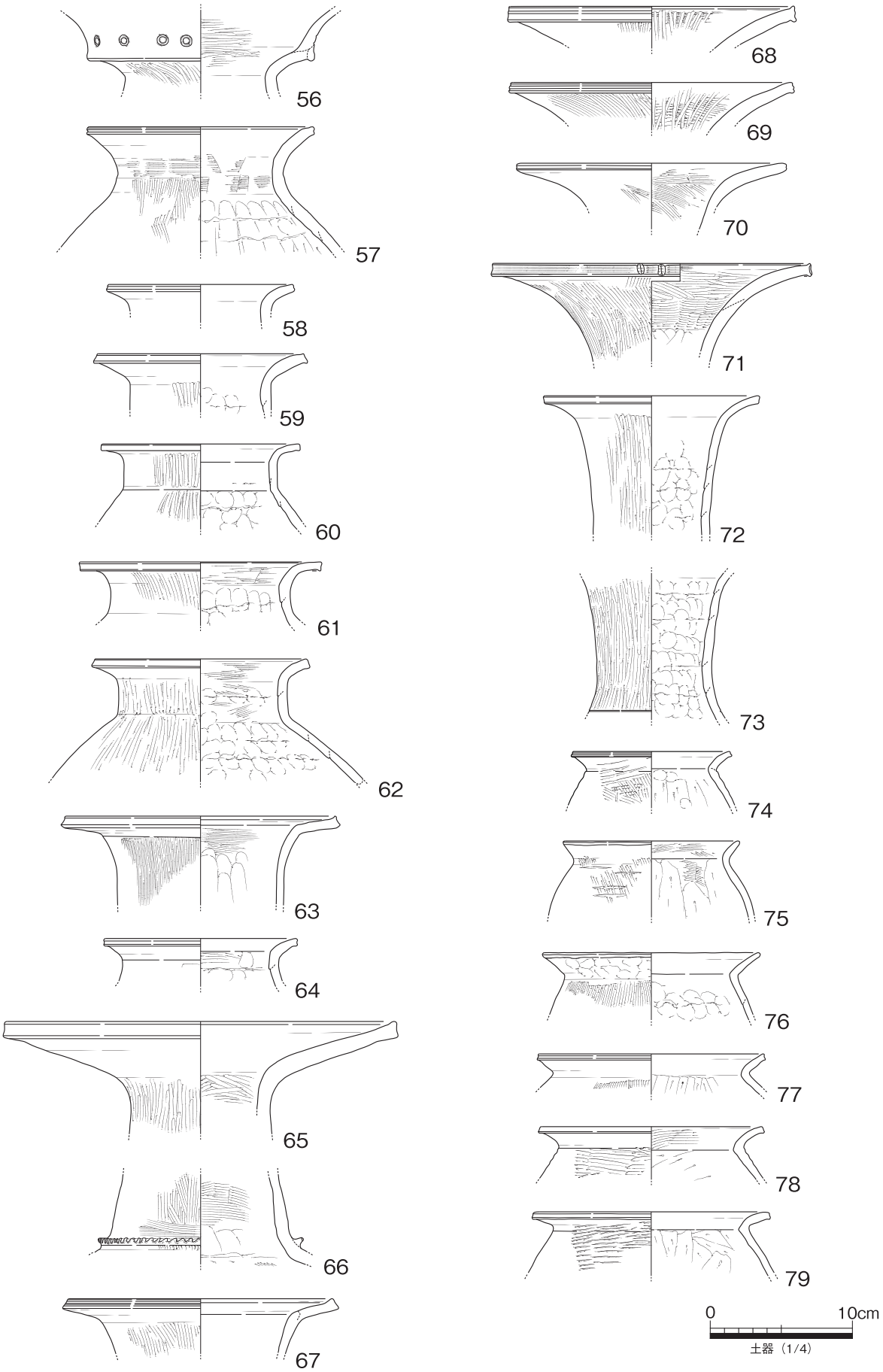
埋土は８層（第31図調査区南壁では11層）に細分され、上下２層に大別する。上層（２～４層）は、下層溝埋没後の改修溝に伴う堆積物の可能性が想定され、主に灰色系細～粗砂がレンズ状に堆積していた。いずれも改修溝機能時の堆積物と考えられる。下層（５～８層）底面には、細礫を多量に含む黄橙色粗砂が20㎝以上の層厚で堆積し、一時的な洪水堆積の可能性が考えられる。その後は主に灰色系シルトがレンズ状に堆積し、穏やかな環境下で徐々に埋没が進行したと考えられる。下層も、７層を主体とする流路と、８層を主体とする流路の２時期に細分が可能であろう。なお１層は、溝埋没後に溝上面が一定度削奪され、その後に堆積した洪水堆積とみられる堆積物と考えられる。

遺物は主に上層改修溝からの出土が主体を占め、図示した以外に下層溝を含めコンテナ６箱程度の弥生土器類が出土している。**56**・**61**～**63**・**67**・**69**～**71**・**73**～**75**・**79**・**81**・**83**～**88**・**92**・**96**・**98**・**103**～**106**・**111**～**116**・**119**・**121**・**123**～**126**・**128**・**130**・**133**・**135**・**138**・**140**・**141**・**143**・**146**・**147**・**150**～**152**が上層溝、**64**・**93**・**100**・**102**・**107**・**118**・**122**・**127**・**136**・**137**・**142**・**144**・**149**・**153**が下層溝出土資料である。

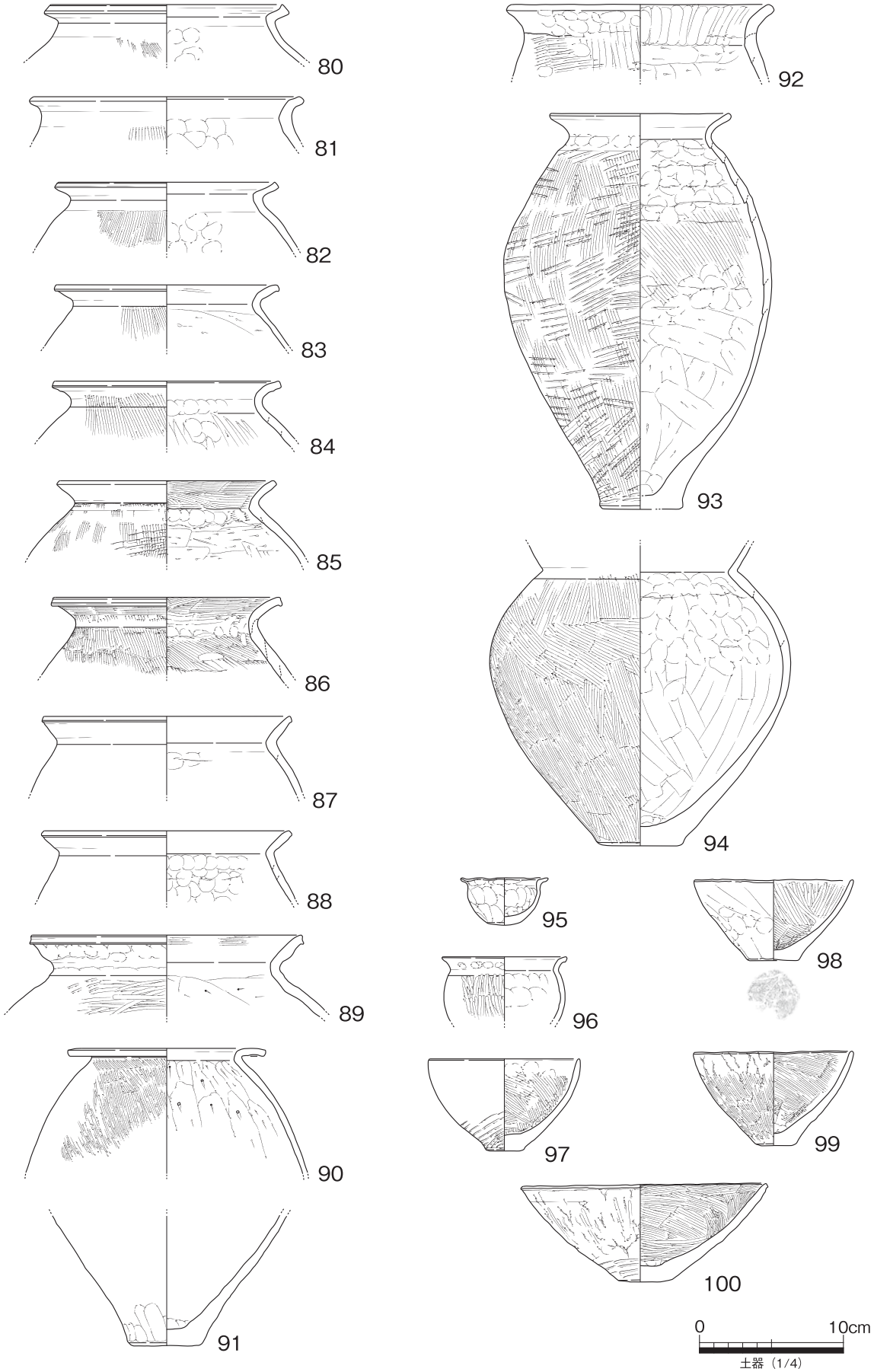
56は二重口縁壺で、口縁部外面に1.5～3.0㎝間隔に径約７㎜の竹管文を施し装飾する。**57**は短頸広口壺。口縁端部は矩形を呈し、端面に凹線１条を施す。**58**～**63**は、頸部が直立する広口壺。**63**を除いていずれも口縁端部の肥厚は乏しく、端面に沈線ないし凹線１条を加える。**63**は、高松市香東川下



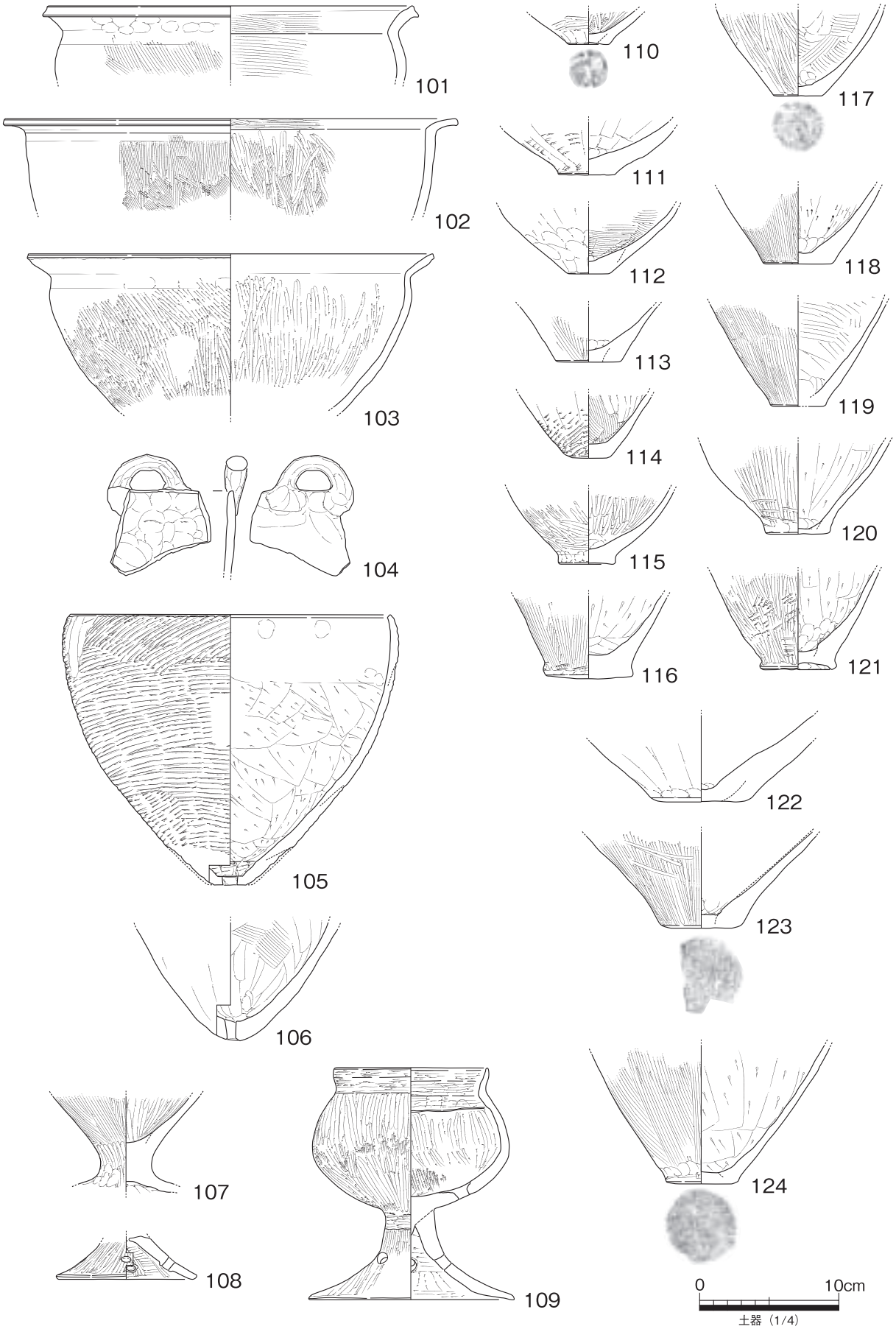
第 63 図　SD244 平・断面図



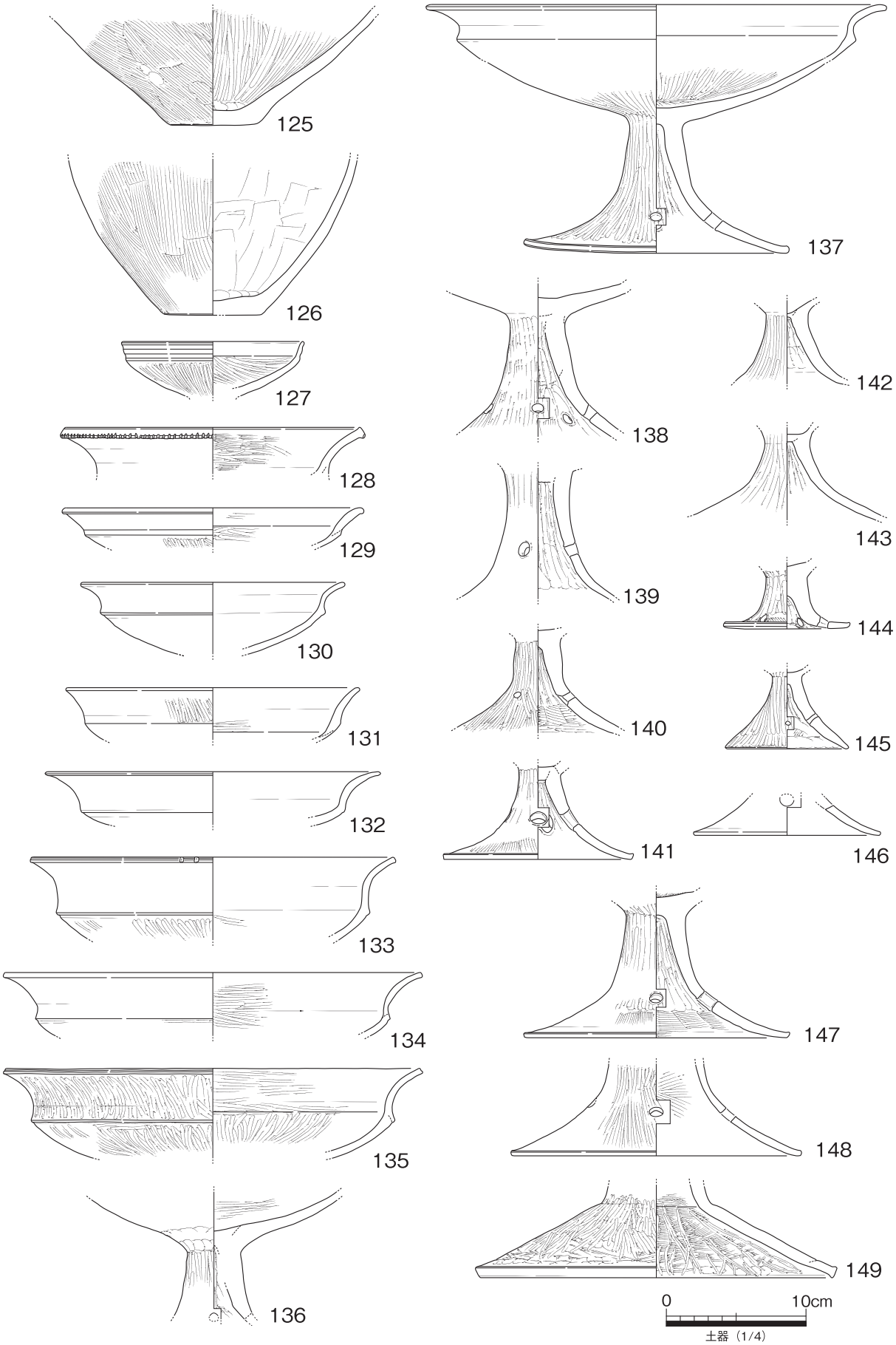
第 64 図　SD244 出土遺物実測図 1



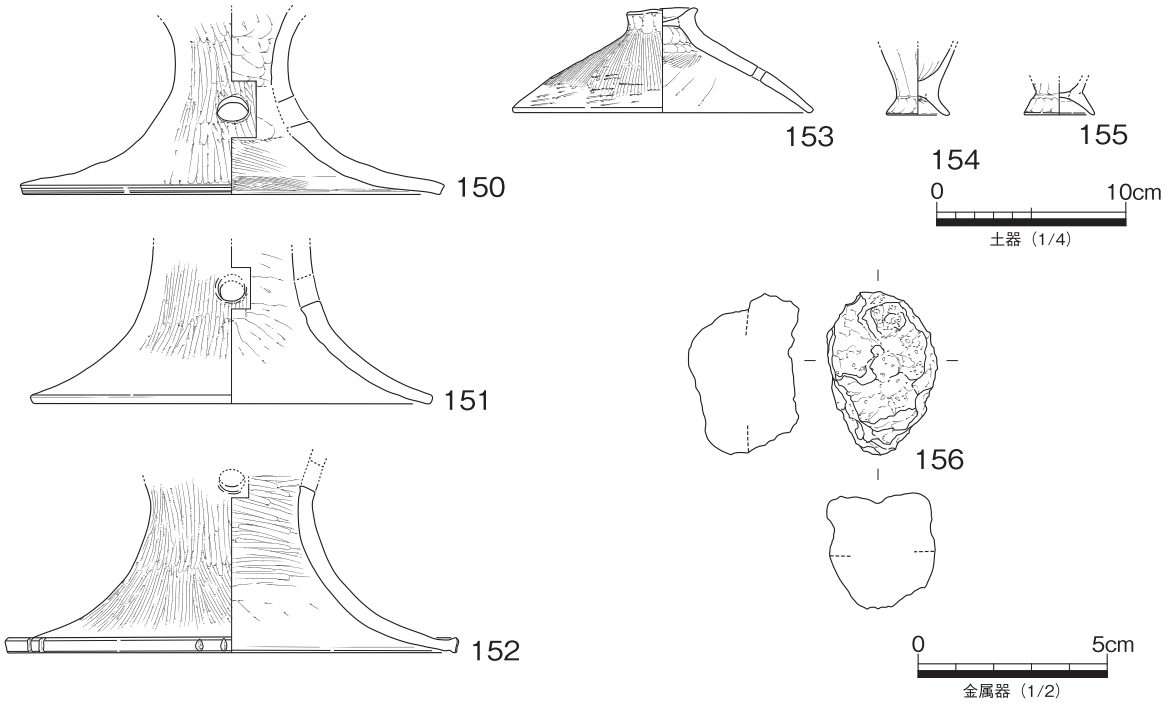
第 65 図　SD244 出土遺物実測図 2



第 66 図　SD244 出土遺物実測図３



第 67 図　SD244 出土遺物実測図 4



第 68 図　SD244 出土遺物実測図５

流域産の広口壺で、搬入品である。端部は上方へ摘まみ上げて、内傾する端面に凹線を施す。64 ～ 66 は、内傾する頸部を有する広口壺。65 は大形壺で、口縁部は頸部よりやや強く屈曲して大きく開き、端部を主に上方へ摘まみ上げて、端面に１条の凹線を施す。66 は頸部片で、基部に突帯を貼付し、ハケ原体による刺突文を加えて装飾する。67 は外傾する頸部を有する広口壺。口縁端部は上方へ摘まみ上げて、断面三角形状に肥厚し、端面に２条の凹線を施す。68 ～ 71 は、緩やかに外反して開く口縁部を有する広口壺。68 と 69 は、口縁部内面に縦方向のミガキ調整が施され、器台の口縁部となる可能性がある。71 の端部は上下に小さく拡張し、やや内傾する端面をなし、ハケ原体による刺突文を２ヶ所以上加える。72･73 は長頸広口壺。72 の口縁端部は四角くおさめ、断面に凹線１条を施す。73 は口縁部を欠き、頸基部に沈線１条を施す。

74 ～ 94 は同甕。74・75 は小形の甕で、外面はタタキ後ハケ調整を施す。76 は粗製の甕で、口縁部外面には煤が付着する。77 等の外反口縁部の甕では、口縁端部の肥厚や端面への凹線の有無、内外面の調整等に、ヴァリエーションを認める。78・79 は、口縁部タタキ出しの甕。80・82 は香東川下流域産の甕で、80 は口縁端部を上方へ摘まみ上げて、端面に１条の凹線を施す。87 は布留系の甕。全体にマメツ等が顕著なため、調整等は不明瞭である。90 の口縁部は強く折り返して水平に開き、端部を四角くおさめる。91 は、90 と近接して出土し、色調や胎土が近似していることから、同一個体の可能性が高いが、接合はしない。突出した平底を呈する。93 は完形に近い。体部は細身で、口縁端部は丸くおさめ、底部は突出した平底を呈す。94 も完形に近く復元される。倒卵形の体部に、突出気味の平底を有する。

95 はミニチュアの鉢。96 は小型鉢。外面にミガキ調整を施した精製品である。97 ～ 99 は小形鉢、100 は中形鉢である。いずれも底部はやや突出気味の平底を呈する。99 と 100 の外面には細かなクラックが無数に認められ、内型成型の可能性がある。また 100 の底部周辺には、タタキ痕を認める。101

～ 103 は大形鉢。いずれも強く折り返して外反して開く、小さな口縁部を有する。101 は、口縁端部を上下に摘まみ出して拡張し、端面に凹線１条を施す。102 は、口縁端部下端を下方に摘まみ出して拡張し、端面に１条の凹線を施す。103 は、体部内面にマメツ等により不明瞭だが、ナデもしくはハケ調整後にミガキ調整を施す。

104 ～ 106 は底部有孔鉢である。104 は口縁部の小片で、外面に粘土紐を貼付して、おそらく２対の半円環状の把手を付す。本地域での同種土器の出現期のタイプで、次段階では 105 に見られるように把手が省略される。105 は尖底状の底部より大きく開く口縁部を有し、底部中央に径約 0.8cmの円孔を焼成前に外面側より穿孔する。外面はほぼ全面タタキ調整、内面はケズリ調整後口縁部付近にヨコナデ調整を加える。106 も底部に径約 0.6cmの円孔を穿ち、内面はナデ調整後に一部ハケ調整を施す。

107 ～ 109 は台付鉢。107 は鉢部と脚部の接合部の小片である。108 は脚台部の小片である。径６㎜の円形透孔をほぼ等間隔に４孔穿つ。109 は、直立する口縁部を有する中形鉢の底部にスカート状に開く脚部を付す。脚部は高杯の転用とみられ、脚柱部と裾部の屈曲部に、円孔３孔を穿つ。

110 ～ 126 は、壺・甕・鉢の底部片。弥生時代後期前半期に多い、強く突出した平底を呈する 115・120 等が少数認められる以外は、平底を呈するものが多い。底部径の縮小化した 119・124 等は、後期末～終末期古相に位置付けられよう。117 は鉢または甕の底部片で、底面には木葉痕を認める。125 は大形鉢の底部片。内面は入念なミガキ調整を加え、底部はやや突出した平底を呈する。

127 ～ 149 は高杯。128 は装飾高杯の杯部で､上下に小さく拡張した口縁端部の下端に刻み目を施す。129 は、杯下半外面に放射状ミガキ、同内面に分割ミガキをそれぞれ施す。133 は、口縁部端面に１条の沈線を施し、その上から刻み目を加えて装飾する。端部の残存状況から、刻み目の施文頻度は不明である。134･135 は大形高杯。135 では、内外面にミガキ調整を、口縁端部には沈線１条を施す。137 は、杯部上半部と下半部は接合しないが、胎土や色調等より同一個体と判断し、図上で復元した。脚裾部に径約９㎜の円形透孔を４方向から穿つ。136 以下の脚部を中心とした資料では、脚柱部と裾部の境に、径８㎜前後の円形透孔を 136 では１孔以上、138 では５孔、139 では径７㎜前後の円形透孔を３～４孔、140 では径４㎜の円形透孔を３孔、141 では４孔、それぞれ穿ち装飾する。144 は、高杯もしくは台付鉢の脚部片。脚端部は丸くおさめ、裾部に径７㎜前後の円形透孔を５孔配する。145 は小形高杯の脚部片。裾部に径約 2.5㎜の小円形透孔を４ヶ所に穿つ。149 は、脚柱部内面にケズリ調整を施し、裾部内面には接合痕がみられる等の点から、135 等の大形高杯の脚部とした。

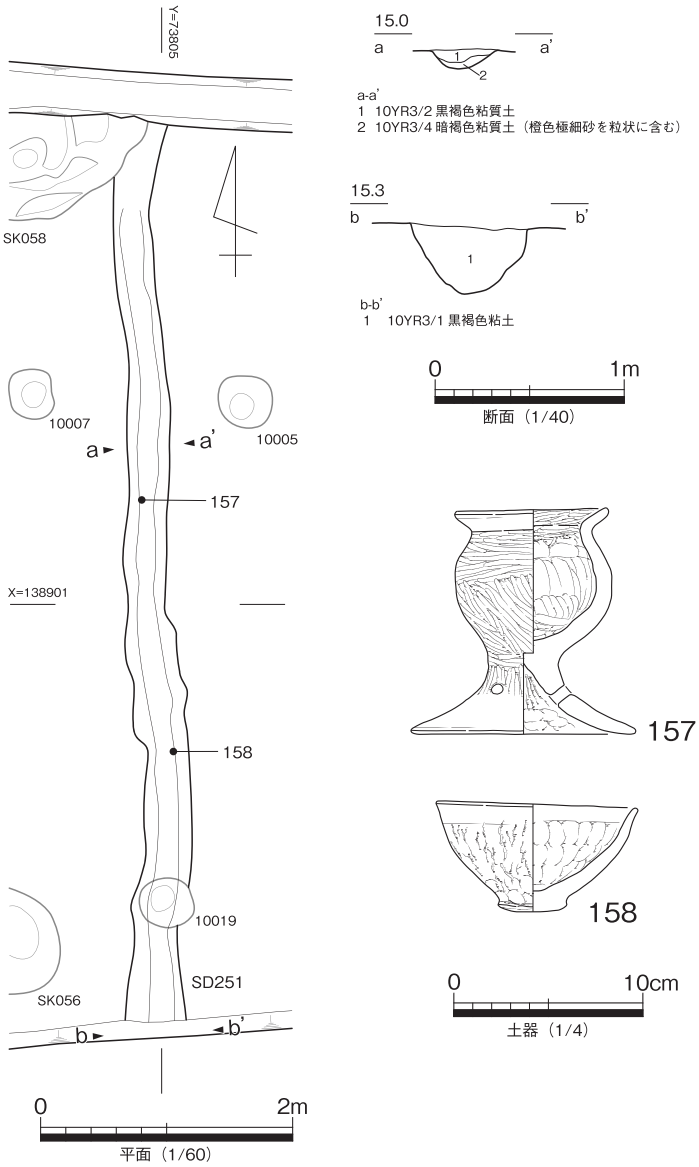
150 ～ 152 は器台の脚部片。150 は径約 1.4cmの円形透孔を１ヶ所以上、151 は径約 1.3cmの円形透孔を３ヶ所以上にそれぞれ穿つ。152 も、径約 1.3cmの円形透孔を穿ち、脚端面には２個１対の刺突文を、４ないし５方向に配し装飾する。

153 は、天井部に径 4.5㎜の円形透孔を２孔穿ち、頂部に摘みを付すことから、蓋として図示した。当該期には類例に乏しい。154・155 は製塩土器の底部片。156 は、上層出土の鉄滓だが、混入の可能性が高い。

以上、本溝出土遺物には弥生時代後期中葉～終末期までの資料を含み、複数の改修により、比較的長期に利用された可能性が考えられる。

SD251（第 69 図）

10 区中央部第２面で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、約 7.2 ｍを調査した。北



第 69 図　SD251 平・断面・出土遺物実測図

側に位置する７区で、延長溝は確認していない。重複関係より、SK058、SP10019 より先行する。僅かに蛇行して検出されたが、流路方向は概ねＮ 1.59° Ｗとほぼ正方位に配される。検出面幅 0.27 ～ 0.43 ｍ、残存深 0.11 ～ 0.38 ｍ、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。溝底面の標高は、14.8 ｍ前後で概ね一定し、流下方向は特定できない。埋土は１ないし２層に細分され、褐色系粘質土がレンズ状に堆積していた。

遺物は図示した以外に、器種不詳の土器小片６点が出土した。**157** は台付鉢で、内外面にミガキ調整を多用した精製品である。脚台部はスカート状に開く。**158** は小型鉢。底部は突出した凸面底で、体部外面にはクラックを多数認める。

出土遺物より、本遺構は弥生時代後期後葉に位置付けられると考える。

SD256（第 70 図）

11 区北東隅付近で検出した東西直線溝である。流路方向Ｎ 79.16° Ｅに配される。東端は攪乱に切られ、西端は SK062 に切られ、東西長約 1.8 ｍを調査した。攪乱東側の 10 区や SK062 の西側で、それぞれ延長溝は確認していない。溝は、検出面幅 0.4 ｍ前後、残存深 0.12 ｍ前後、断面形は皿状を呈する。埋土は、黒褐色粘土の単層であった。溝底面の標高は 15.28 ｍ前後で一定する。

遺物は、図示した以外に弥生土器甕等の土器小片 30 点が出土した。**159** は弥生土器鉢である。底部は突出した平底を呈し、口縁部は内湾して開く。出土遺物より本溝は、弥生時代後期後半を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD258（第 70 図）

11 区北端付近で検出した東西直線溝である。流路方向Ｎ 48.01° Ｗに配される。東西両端は調査区内で途切れ、東西長約 2.9 ｍを調査した。溝は、検出面幅 0.2 ｍ前後、残存深 0.06 ｍ前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色粘土の単層であった。溝底面の標高は 15.28 ｍ前後で一定する。

遺物は、弥生土器壺の底部片とみられる土器小片等が２点出土した。図化した遺物はない。出土遺物

は乏しいものの、溝の規模や埋土が上述したSD256と近似する等の点から、SD256と近接した時期に位置付けられるものと考える。

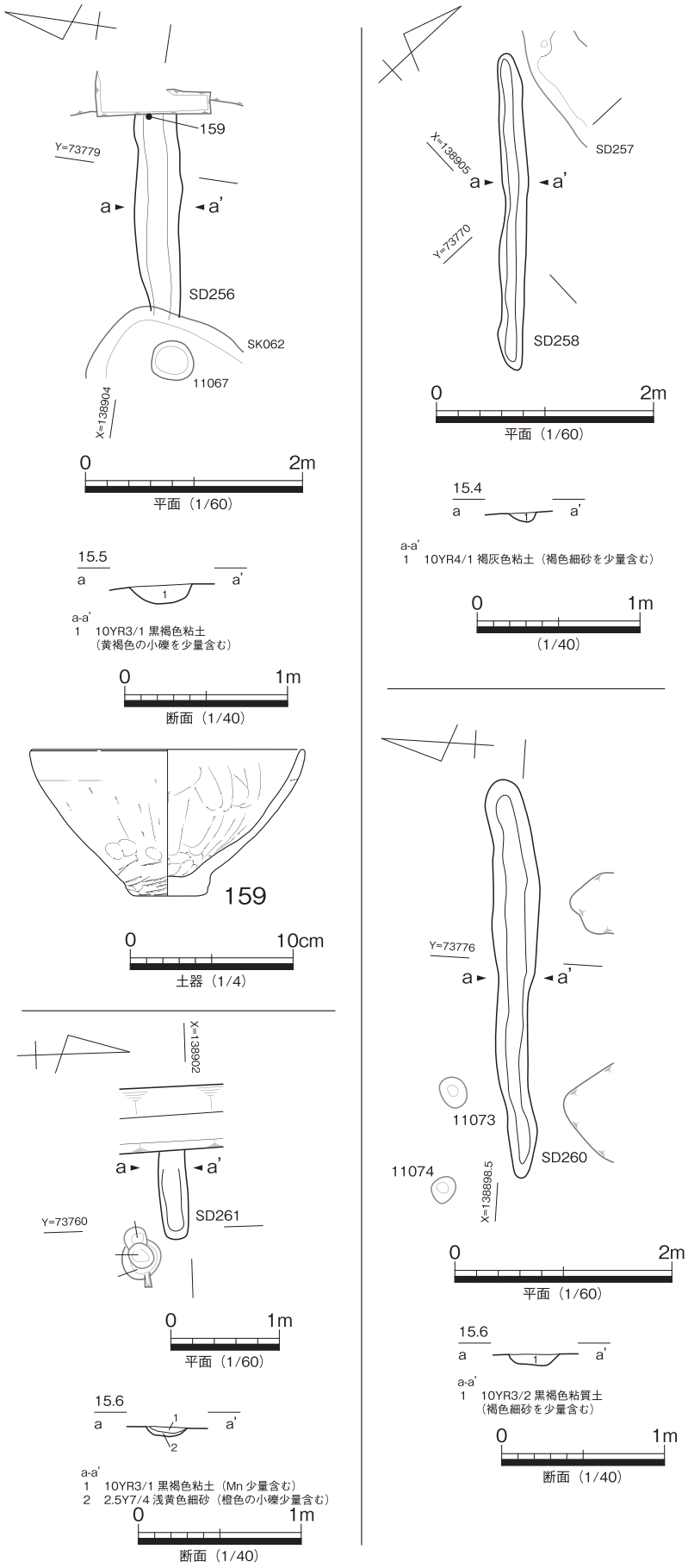
SD260（第70図）

11区南東部付近で検出した東西溝である。僅かに蛇行するが、概ね流路方向N 83.29° Eに配される。東西両端は調査区内で途切れ、延長約3.6 mを調査した。溝は、検出面幅0.27～0.41 m、残存深0.07 m前後、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単層であった。溝底面の標高は15.46 m前後で一定する。

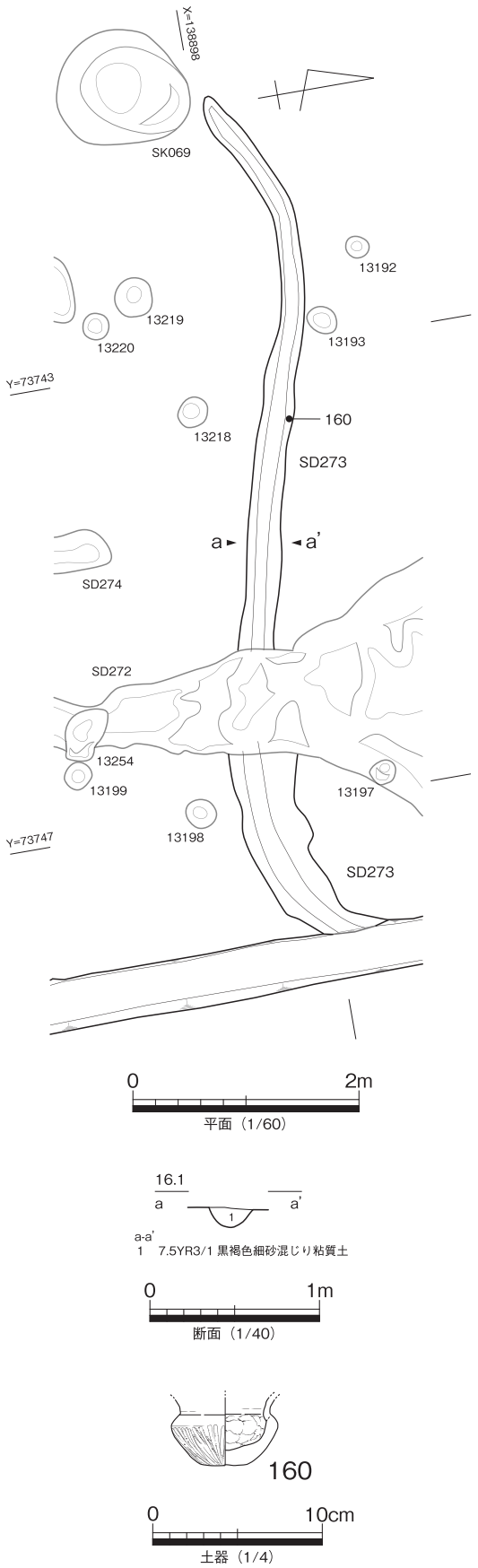
遺物は、弥生土器甕等の小片４点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物は乏しいものの、溝の規模や埋土が上述したSD256と近似する等の点から、SD256と近接した時期に位置付けられるものと考える。

SD261（第70図）

11区西端付近で検出した東西溝である。流路方向N 88.86° Eとほぼ正方位に配される。東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外へ延長し、東西長約0.8 mを調査した。溝は、検出面幅0.25 m前後、残存深0.06 m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は２層に細分され、上位に黒褐色粘土、下位に溝機能時の堆積層とみられる浅黄色細砂がレ



第70図　SD256・SD258・SD260・SD261 平・断面・出土遺物実測図



第 71 図　SD273 平・断面・出土遺物実測図

ンズ状に堆積していた。

遺物は、弥生土器の小片１点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物は乏しいものの、溝の規模や埋土が上述した SD256 と近似する等の点から、SD256 と近接した時期に位置付けられるものと考える。

SD273（第 71 図）

13 区東端部、調査区東壁第２面（第 39 図）で検出した東西溝で、SD272 より先行する。西端は調査区内で途切れ、東端は調査区外へ延長し、約 7.9 m を調査した。東に隣接する 11 区で、延長溝は確認していない。また、溝西端に接して、ほぼ同時期とみられる土坑 SK069 が配され、何らかの関係性があった可能性も考えられる。検出面幅 0.18 ～ 0.57 m、残存深 0.12 m、断面形はＵ字状を呈する。埋土は黒褐色粘質土の単層であった。溝底面の標高は、西端付近で 16.0 m 前後、東端付近で 15.8 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

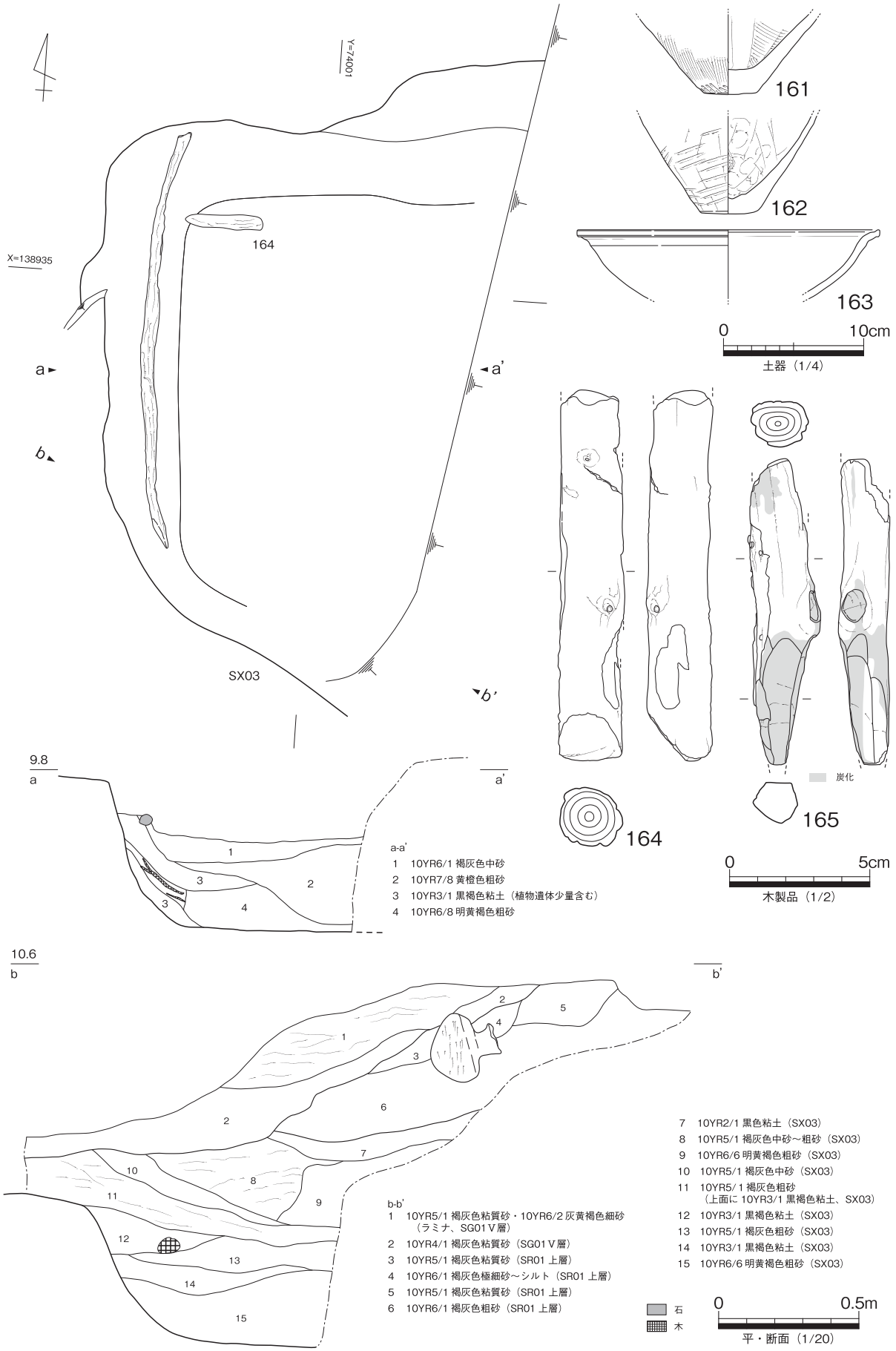
遺物は、図示した以外に、弥生土器広口壺や甕、小形鉢等の小片が若干量出土した。**160** は、弥生土器小型丸底土器である。口縁部を欠損する以外は完存する。底部は小さな平底を呈する。体部外面は、指オサエ等による凹凸がやや顕著にみられる。

本溝は、出土遺物より弥生時代後期末～終末期前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

性格不明遺構

SX03（第 72 図）

１区北東部、SR01 下面で検出した。遺構は西半部のみ調査され、全形は不明である。南北 2.41 m 以上、東西 1.34 m 以上、調査範囲で平面形は歪な隅丸方形状を呈する。残存深 1.51 m、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈し、北壁の一部は二段に掘り込まれる。なお、1a 区東壁（第 12 図）の調査記録より、第１面検出面から遺構底面までの深さは約 1.68 m であった。埋土は４～８層に細分され、灰色系細～粗砂を主体に、褐色系粘土が互層状に堆積しており、流水と滞水が断続的に繰り返されていたと考えられる。また、遺構上



第 72 図　SX03 平・断面・出土遺物実測図

面付近まで埋没した段階で、遺構西壁に沿って、長さ約 1.5 ｍのクヌギの自然木が出土した。調査時の所見では、「水を利用した木製品などの貯蔵穴の機能」が想定（香川県埋蔵文化財センター 2016）されている。

161・**162** は、弥生土器甕または鉢の底部片である。**161** の底部は僅かに凸面底を呈する。**162** は、タタキ甕の底部片で、底部は小さな平底である。**163** は皿状を呈する鉢。口縁部は小さく屈曲して開き、端部は上方へ摘まみ上げる。**164** は径約 4.5㎝の、**165** は径４㎝前後のそれぞれクヌギ（第４章第３節参照）の芯持ち材を用いた木杭である。**165** の下端は４方向から長さ８㎝以上削られ、図背面には一部に丸木部分が残る。また、加工部を含め一部炭化している。２点の木杭について、放射性炭素年代測定を実施した（第４章第７節参照）。年代測定の結果、２世紀前葉～３世紀前葉の年代値が得られ、概ね土器の年代観と大きな矛盾はないと考える。

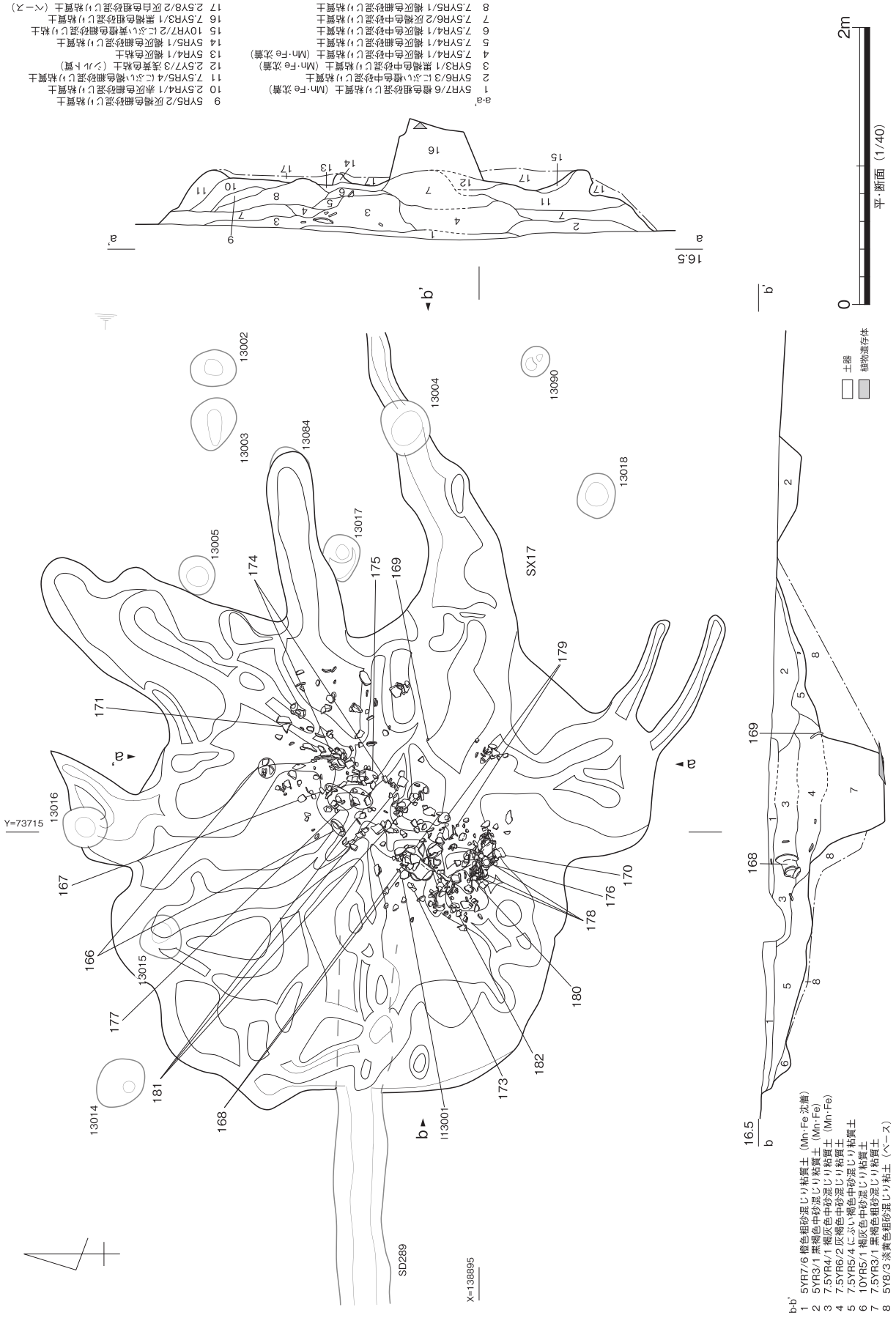
出土遺物より、本遺構は弥生時代後期中葉から後期末を中心とした時期に位置付けられる。

SX17（第 73・74 図）

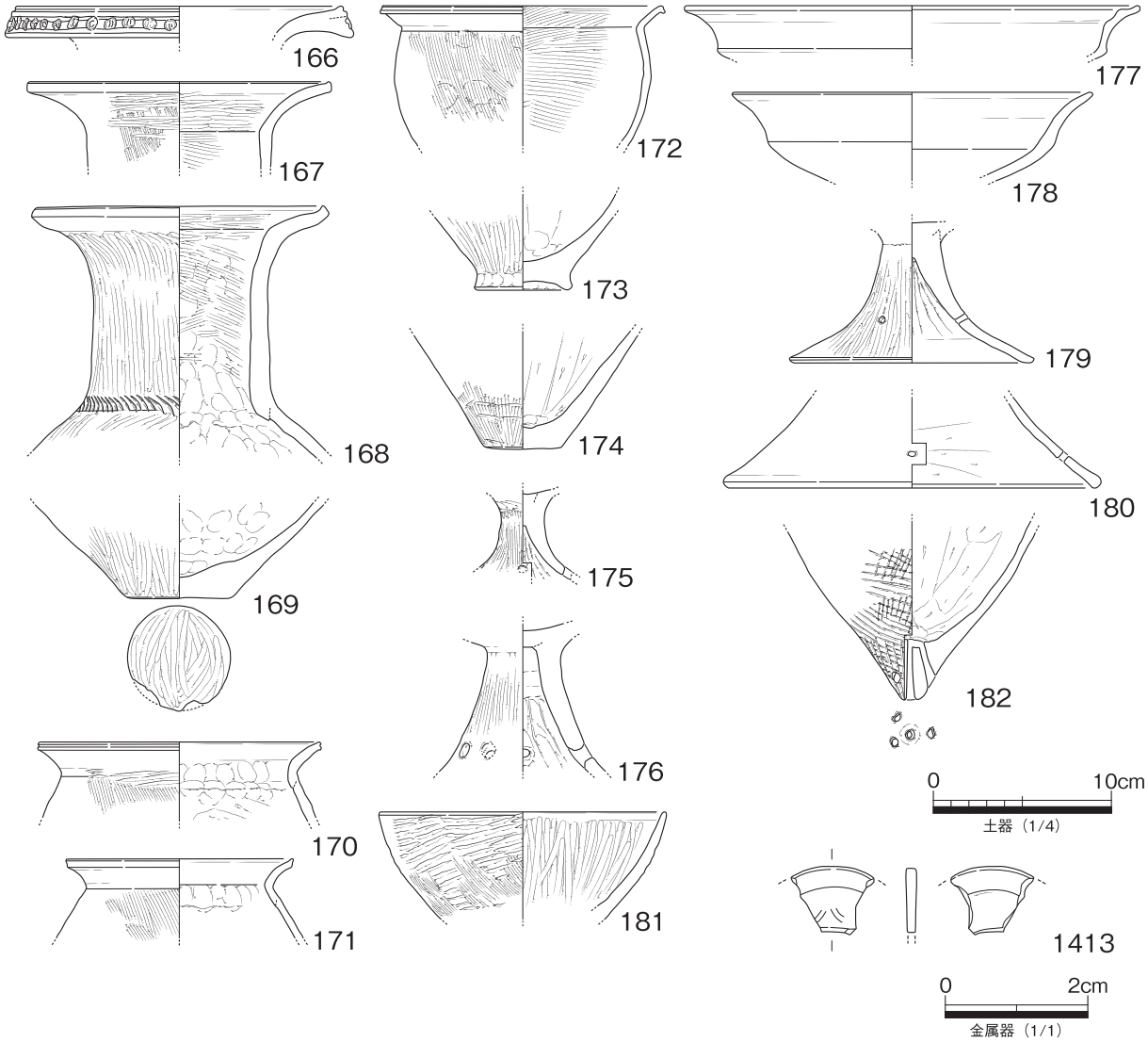
13 区中央南部で検出した落ち込みである。上面より SD289 や複数基の柱穴が穿たれる。それ以外にも、複数の小溝が重複していることが、平面記録から読み取れる。各溝の重複関係については、土層記録に溝埋土に関する記載がなく不詳である。重複する溝と考えられる掘り方範囲を除けば、平面形は、東西約 3.2 ｍ、南北約 3.1 ｍの不整隅丸方形状を呈するとみられる。平面形の歪さは、複数の遺構の重複によるものと考える。断面形は、皿状ないし逆台形状に 0.3 ～ 0.35 ｍ掘り込まれ、その底面中央部に長さ約 0.9 ｍ、幅約 0.6 ｍ、深さ 0.4 ｍ前後の東西に長い断面逆台形状の落ち込みが認められ、黒褐色粘質土のみでほぼ埋没していた。井戸や溜め井の可能性も考えられたが、断面記録から推測される限り、底面は明確な透水層まで達しておらず、性格については不詳である。

遺物は、上位の落ち込み中央部付近の中位層（b-b’　３・４層）より、各器種の弥生土器の土器片がコンテナ３箱程度、まとまって出土している。本層は、底面で検出した断面逆台形状の土坑状の落ち込み上面に堆積し、平面隅丸方形状の落ち込みの埋土（b-b’　５層）上面より掘り込まれており、底面で検出した落ち込みは、上面の落ち込み上面より開削された、異なる時期の遺構の可能性も考えられる。

土坑状の落ち込みの底面からは、自然木とみられる木片が１点出土した。そのほか、器種不詳の須恵器片や土師質土器杯、備前焼甕、方孔銭等の中世遺物の小片が数点出土しているが、これらは本来上面に穿たれた溝や柱穴に帰属する遺物が混入したものと考える。**166** は、弥生土器広口壺の口縁部片である。口縁部は強く外反して開き、拡張した端面の上位に凹線文を１条配し、下位に竹管文を施文して装飾する。**167** は同広口壺の口縁部片。口縁部は緩やかに屈曲して端部は四角くおさめ、直立する端面をなす。**168** は同長頸広口壺。頸部はミガキ調整を施し、頸基部に爪形の刺突文で装飾する。弥生時代後期後半に位置付けられる。**169** は壺の底部片。底部は平底を呈し、外底面にミガキ調整が施される。**170** ～ **174** は同甕。**173** は同甕の底部片。底部は周縁を摘まみ出して、上げ底状を呈する。**175** ～ **180** は同高杯。**175** は高杯の脚部片。脚柱部と裾部の境付近に、径約８㎜の円形透孔を２孔１対に３方向から穿孔する。脚部内面は、ケズリ調整の後ナデ調整を施すが、下半部にはシボリ目が残る。**177**･**180** は、香東川下流域産土器の高杯。**177** は杯部の小片で、全体にマメツが顕著で調整等は観察されない。**182** は同底部穿孔鉢。尖底状の底部中央に径約 0.5㎝の円孔を穿ち、周囲に同程度の円孔３孔を穿つ。なお、内１孔は貫通していない。**1413** は方孔銭の小片。銭種は不明。重複する遺構からの混入資料であろう。



第 73 図　SX17 平・断面図



第 74 図　SX17 出土遺物実測図

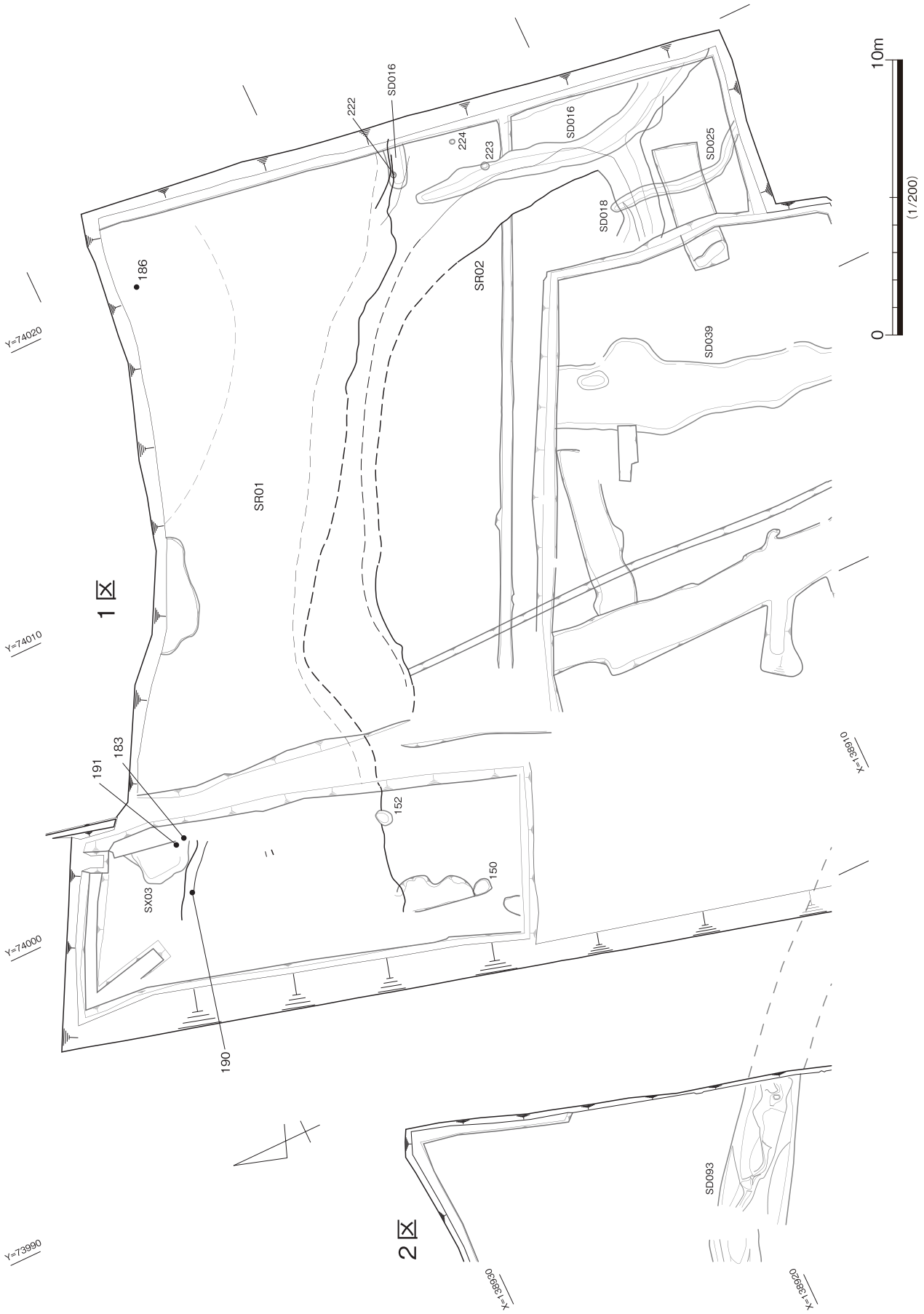
出土遺物より、本遺構は弥生時代後期後半代に位置付けられる。

自然河川

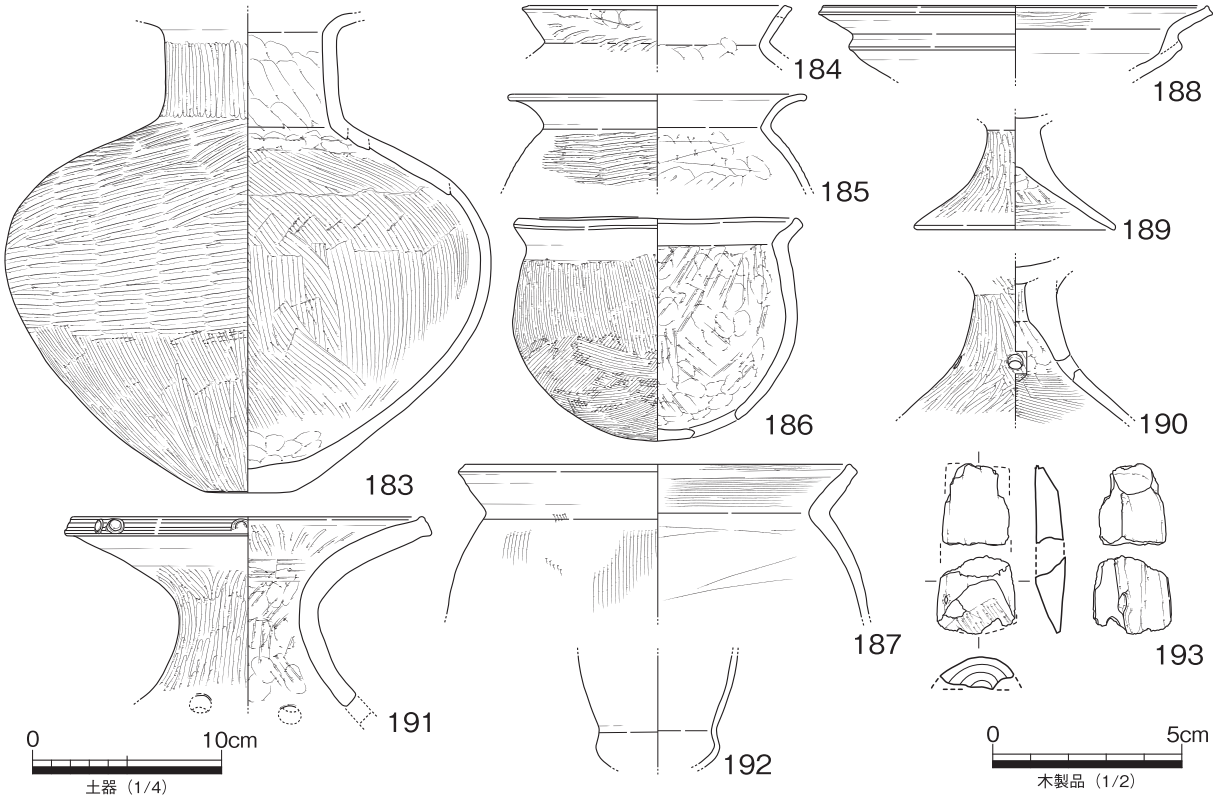
SR01・SR02（第 75・76 図）

１区北部で東西走する自然河川である。流路方向や後述する規模等より、旧番屋川の支流の一つであった可能性が考えられる。重複関係より、SR02 が先行する。いずれも流路南岸を検出したのみで、流路幅等は不詳である。東西両端は調査区外へ延長する。SR01 の検出面幅 9.2 m以上、SR02 は 11 m以上をそれぞれ測る。底面までの調査記録は残されていないが、１-a 区東壁（第 12 図）では 1.5 m以上の残存深が記録される。同図で埋土は 19 層に細分され、上下２層に大別されている。粘土やシルト、中～細砂がレンズ状に堆積しており、流水と滞水を繰り返しながら埋没したと見られる。

遺物は、図示した以外には弥生土器等の小片が若干量出土している。**183**・**185**・**186**・**187**・**190**・**191**・**193** は SR01 出土の遺物で、**186** 以外はいずれも上層出土資料である。また、**183**・**190**・**191** の３点は、既述した SX03 周辺で、まとまって出土した。**183** は弥生土器広口壺。口縁部を欠損する以外



第 75 図　SR01・SR02 平面図

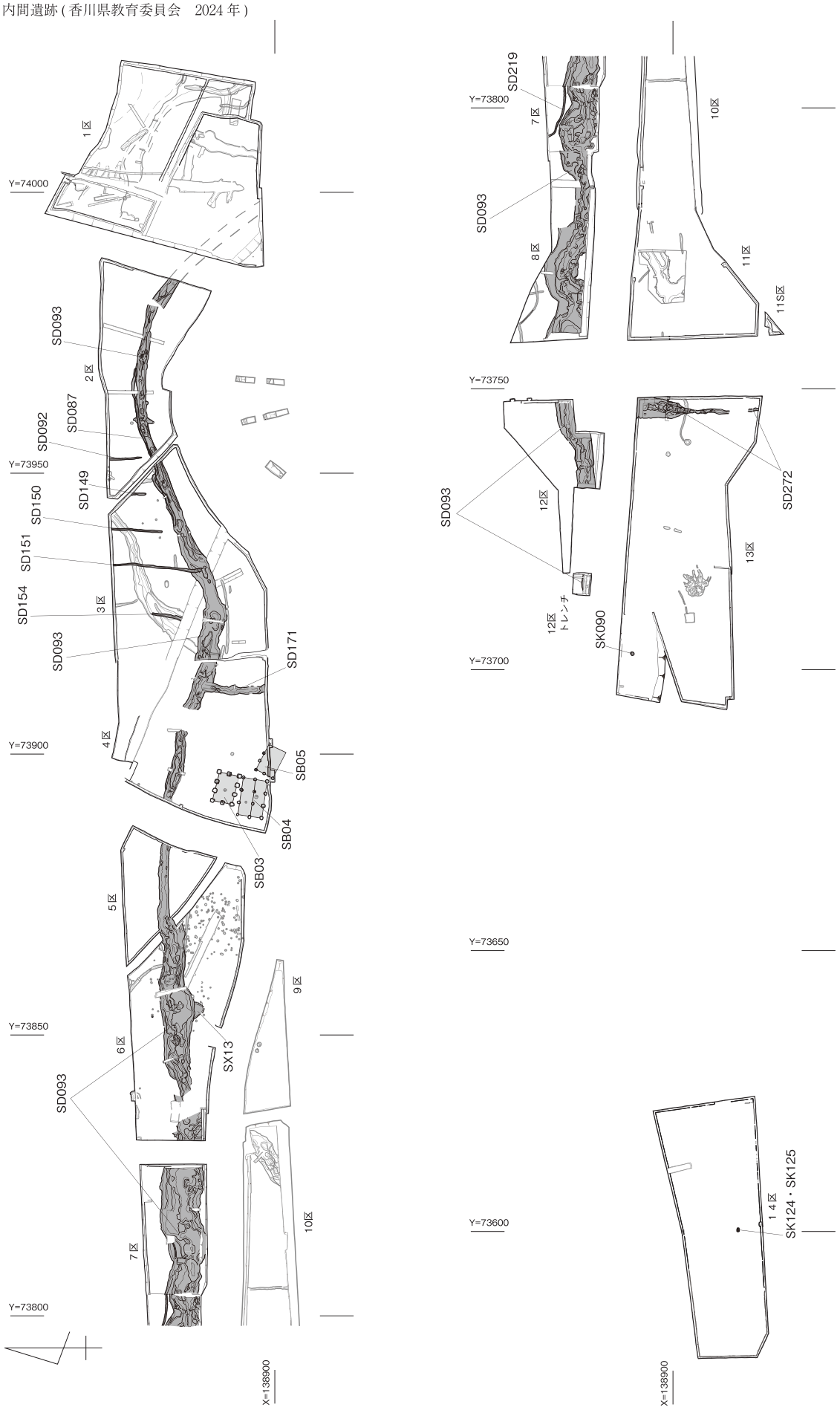


第 76 図　SR01・SR02 出土遺物実測図

は完形である。体部の張りは強く、底部は小さな平底を呈する。体部外面には螺旋状のタタキ調整を施す。**185** は同甕。口縁部は外反して強く折り返し、端部は丸くおさめる。**186** は土師器甕。SR01 最上層と SR02 最上層出土資料が接合した。体部は球胴で、口縁部は短く折り返して開き、端部を上方へ摘まみ上げる。底部付近に径約 2.3cmの円孔が焼成後に穿たれている。**187** も同甕である。長胴甕の口縁部片で、布留系甕の影響か、口縁部はやや内湾する。上記２点の土師器甕は、いずれも７世紀代に位置付けられる資料で、本流路に伴わない何らかの要因で混入した可能性を想定したい。**190** は、スカート状に開く弥生土器高杯の脚部片である。脚柱部と裾部の境に、径 0.8cmの円形透孔を４ヶ所穿つ。**191** は同器台。口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は上下に拡張して端面に２条の凹線を施し、２個１対とみられる竹管文で装飾する。胴部外面は入念にミガキ調整が施され、裾部との境に径約１cmに復元される円形透孔を６箇所穿孔する。**193** は加工痕のある破材。樹種はヤナギ属（第４章第３節参照）である。

上記以外が SR02 出土資料で、いずれも出土層位は不詳である。**184** は弥生土器甕。口縁部叩き出しの甕で、端部は矩形を呈する。**188** は同高杯の杯部小片である。杯上半はくの字状に屈曲して短く開く。**189** は同高杯の脚部片。脚柱部は中実である。**192** は同小型丸底土器。器表面はマメツが顕著なため調整等は不明。口縁部は内湾して開く。

両流路出土資料は、遺物量が乏しいものの時期に大きな隔たりは認められず、概ね弥生時代後期中葉～終末期に位置付けられる。上述した SX03 との関係を考慮すると、終末期の比較的短期間に流下していた可能性が高いと思われる。



第 77 図　古代遺構配置図

３．古代（第 77 図）

古代の遺構は、掘立柱建物３、土坑４、溝７、性格不明遺構１がある。掘立柱建物は４区南西隅で３棟の建物を検出した。その北側には、大型灌漑水路 SD093 が配されている。水路は、２区から 12 区まで東西に調査区北半部を横断し、東西両端は調査区外に延長する。調査区内で約 290 ｍを調査した。１区の東約 150 ｍ東で、番屋川が南へ大きく蛇行することから、２区より東へ流下して、番屋川に排水していた可能性は高い。取水源は不詳だが、番屋川上流域か、調査区南側丘陵の遠田池が所在する開析谷の谷川の可能性が考えられる。本水路は、調査区北側から北東域の番屋川右岸の平地上に開墾した耕地への給水を目的として開削された水路と考えられる。なお、建物群の時期は、水路の開削から埋没までの間に含まれることから、水路の維持管理や、耕地経営の拠点として設置された可能性が考えられる。

その他、土坑等が 13 ～ 14 区を中心に数基確認されている。いずれも９～ 10 世紀代に位置付けられ、幹線水路埋没後の遺構である。水路廃絶後にも継続して、遺跡周辺で何らかの土地利用がなされていた可能性が想定されるが、今回の調査からはその具体像を明らかにすることは困難であった。

掘立柱建物

SB03（第 78 図）

４区南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。鋤溝 SD181 等と重複し、切り合い関係より先行する。桁行３間（5.18 ｍ）、梁間２間（3.64 ｍ）、床面積 18.86㎡、主軸方向Ｎ 76.17° Ｗに配された側柱建物として復元する。柱穴は、１辺 0.63 ～ 0.79 ｍのやや歪な平面隅丸方形を呈し、残存深 0.26 ～ 0.46 ｍで、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。柱穴底面の標高は、14.23 ～ 14.48 ｍと一定しないが、柱通りは概ね揃っていた。なお、各柱穴底面は北にやや深く掘り込まれていた。各柱穴で、径 0.15 ～ 0.26 ｍの柱痕を確認し、柱材上部は転用のため根本近くで切断されていた。柱穴掘り方内で根石・詰石等は確認していない。埋土は暗色系の粘質土ないし細砂で充填されていた。

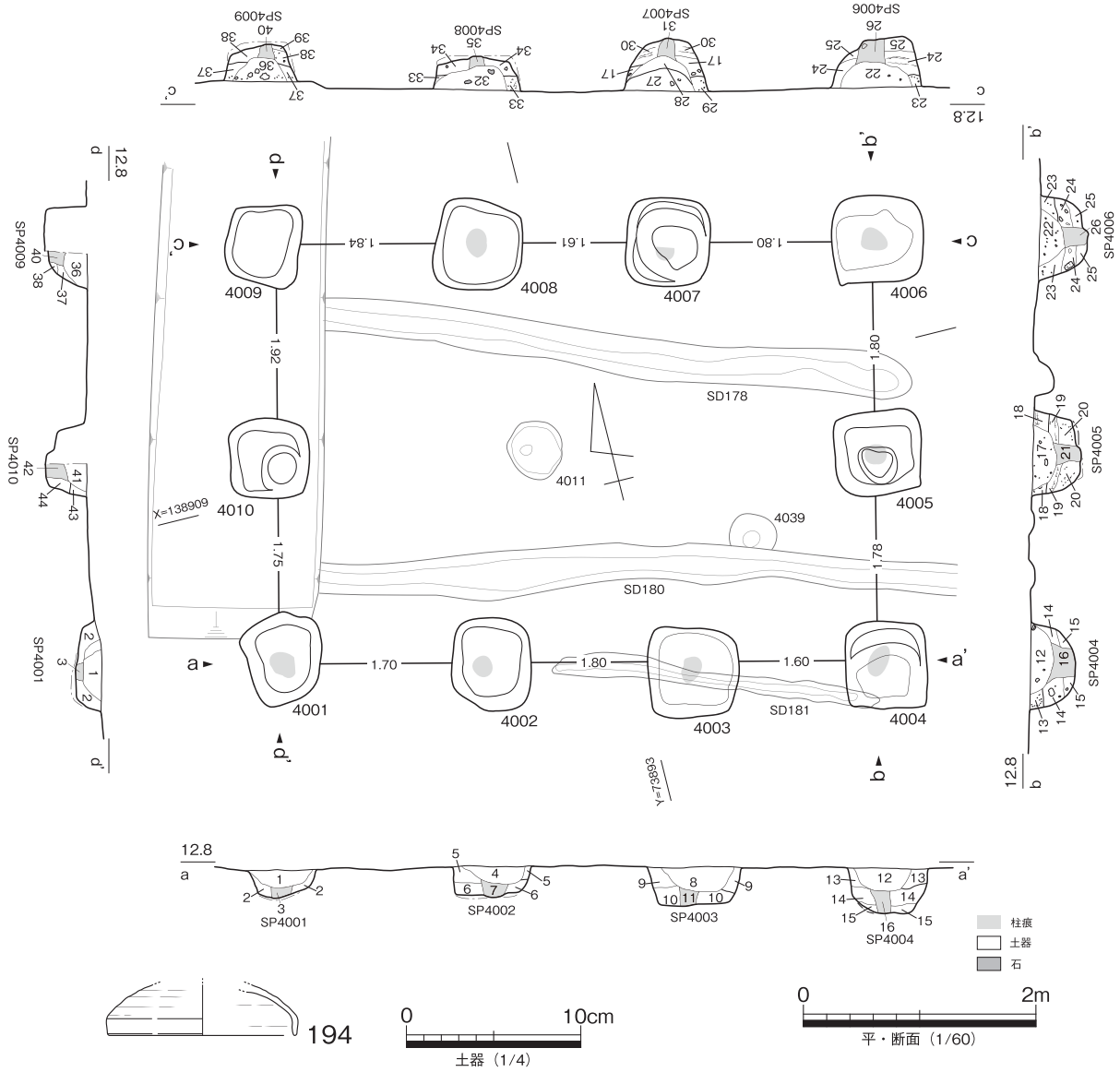
遺物は、図示した以外に、SP4002 を除く各柱穴より、器種不詳の土師器や須恵器の小片が各２～５点出土した。**194** は SP4004 の掘り方より出土した須恵器杯蓋である。

出土遺物より、本建物は７世紀中葉を上限とする時期に位置付けられると考える。

SB04（第 79 図）

４区南西隅部で検出した東西棟の掘立柱建物である。鋤溝 SD183 等と重複し、切り合い関係より先行する。桁行３間（6.66 ｍ）、梁間２間（4.30 ｍ）、床面積 28.64㎡、主軸方向Ｎ 80.93° Ｗと、ほぼ正方位に配された総柱建物として復元する。柱穴は、１辺 0.35 ～ 0.68 ｍのやや歪な隅丸方形ないし不整楕円形状を呈し、残存深 0.08 ～ 0.32 ｍで、断面形は浅い皿状ないし逆台形状を呈する。柱穴底面の標高は、12.51 ～ 12.74 ｍと一定しないが、柱通りは概ね揃っていた。SP4019 を除く各柱穴において、径 0.12 ～ 0.20 ｍの柱痕を確認し、いずれも柱材上部は再利用のため切断されていた。なお、柱穴掘り方内で根石や詰石等は確認していない。埋土は、黒褐色等の粘質土や極細砂により充填されていた。

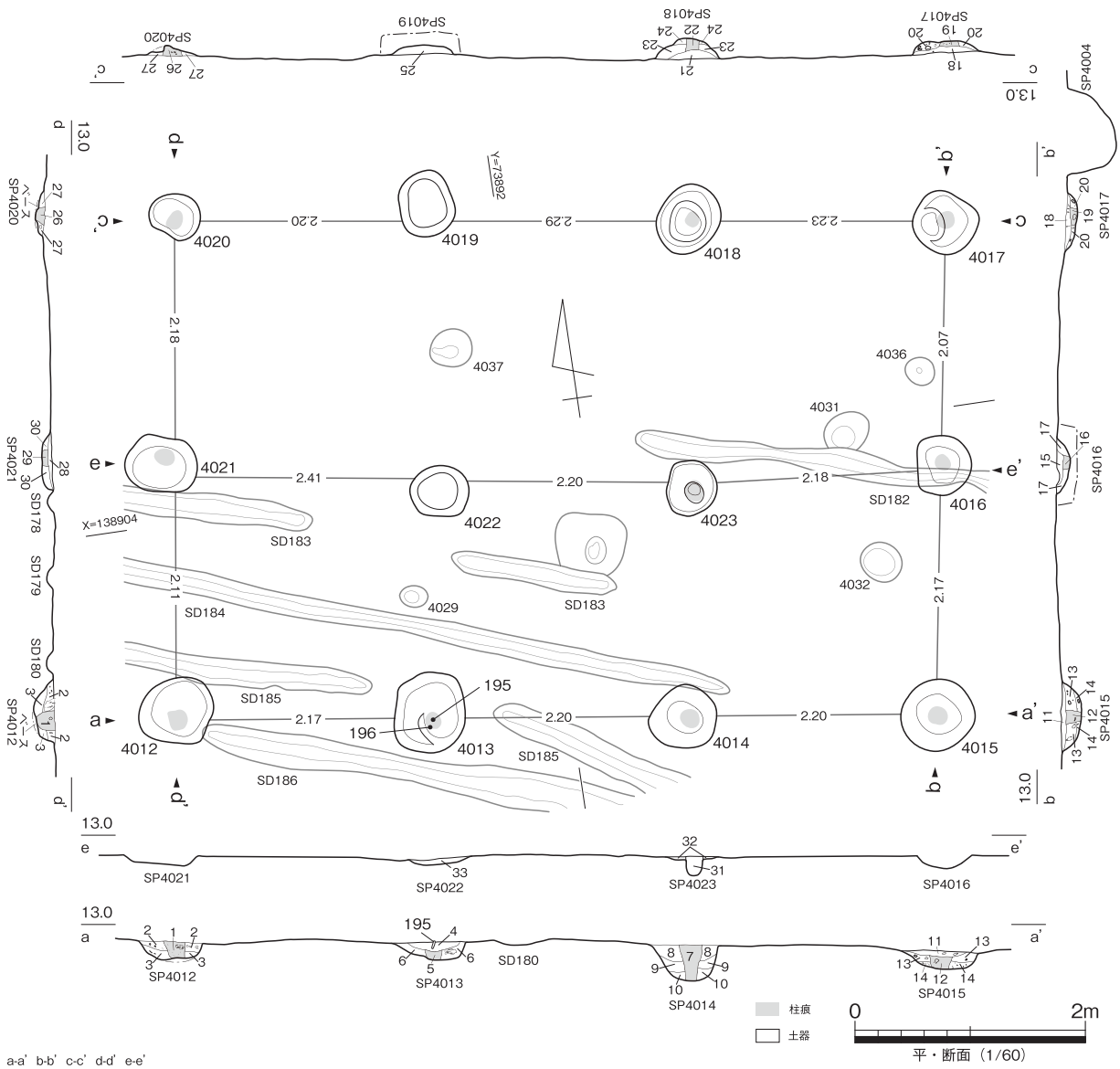
遺物は、図示した以外に、SP4012 ～ 4015、4018、4019、4025 の各柱穴より、器種不詳の土器小片１ないし４点が出土した。図示した遺物はいずれも、SP4013 の建物廃絶後の埋戻し土より出土した。**195** は須恵器杯。底部外縁付近にハの字状に踏ん張る高台を付す。**196** はほぼ完形の棒状土錘で、意図的に柱穴内に投入した可能性もある。



a-a' b-b' c-c' d-d' e-e'

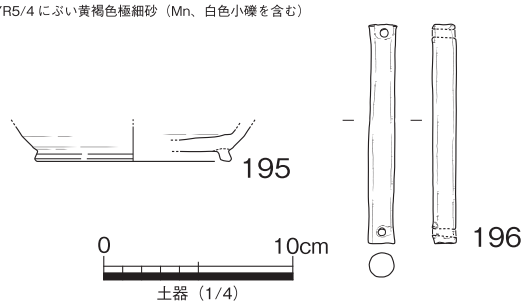
1　10YR6/1 褐灰色細砂（Mn、褐色細砂を多量に含む）
2　10YR3/1 黒褐色極細砂（ベース由来のブロックを少量含む）
3　10YR3/1 黒褐色粘質土
4　10YR5/1 褐灰色細砂（Mn、ベース由来のブロックを少量含む）
5　2.5Y4/1 黄灰色極細砂（Mn、ベース由来のブロックを含む）
6　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（褐色の小礫と粘質土を部分的に含む）
7　10YR5/1 褐灰色粘質土（混じり少ない）
8　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（Mn 沈着、ベース由来のブロックを含む）
9　2.5Y5/1 黄灰色細砂（Mn、ベース由来の大ブロックを含む）
10　10YR4/1 褐灰色粘質土（ブロック土と小礫を少量含む）
11　10YR3/1 黒褐色粘質土（混じり少）
12　5Y4/1 灰色極細砂（Mn、ベース由来のブロック土を多量に含む、抜取）
13　5Y4/1 灰色極細砂（褐色細砂を少量含む）
14　10YR3/2 黒褐色細砂（ベース由来のブロックと褐色細砂を少量含む）
15　10YR3/2 黒褐色極細砂～シルト（ベース由来の径１～２㎝の黄色ブロックを含む）
16　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（褐色細砂を少量含む）
17　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（褐色細砂、ベース由来の黄色ブロックを含む）
18　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（Mn 多、ベース由来のブロックを部分的に含む）
19　10YR5/1 褐灰色極細砂（褐色の小礫を少量含む、オリーブ褐色細砂を帯状に含む）
20　2.5Y5/2 暗灰黄色細砂（部分的に褐灰色粘土を含む）
21　2.5Y4/1 黄灰色粘質土
22　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（ベース由来の黄色ブロック、褐灰色細砂を含む）
23　10YR5/1 褐灰色細砂（オリーブ褐色粘質土を帯状に含む）
24　10YR3/1 黒褐色極細砂（黒色粘質土、ベース由来のブロックを含む）
25　10YR3/1 黒褐色粘質土（ベース由来のブロックを少量含む）
26　10YR2/1 黒色粘質土（その他の含有物をあまり含まない、粘度高）
27　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（褐色細砂、ベース由来のブロックを少量含む）
28　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（褐色細砂を少量含む）
29　2.5Y3/1 黒褐色極細砂（Mn 沈着多）
30　2.5Y5/1 黄灰色極細砂（黒色粘質土を含む）
31　10YR3/1 黒褐色粘質土（ベース由来の小ブロックを少量含む）
32　2.5Y3/1 黒褐色極細砂（上方 Mn 沈着、ベース由来のブロックを含む）
33　2.5Y3/1 黒褐色極細砂（Mn）
34　2.5Y5/1 黄灰色細砂（褐色細砂とベース由来のブロックを少量含む）
35　10YR4/1 褐灰色粘質土（褐色細砂を少量含む、ベースブロック無）
36　10YR5/1 褐灰色極細砂（Mn、ベース由来のブロック、褐色細砂を少量含む）
37　10YR4/1 褐灰色極細砂（Mn 多、褐色粗砂を少量含む）
38　10YR5/2 灰黄褐色細砂（ベース由来の黄ブロックを少量含む）
39　10YR4/1 褐灰色極細砂～粘土
40　10YR5/1 褐灰色粘土（含有物は少ない）
41　10YR3/2 黒褐色細砂（ベース由来の黄色ブロックや灰白砂を含む、抜取）
42　10YR3/1 黒褐色細砂（黒色粘質土、褐色の小礫を含む）
43　10YR3/1 黒褐色シルト（Mn、ベース由来の黄色ブロックを含む）
44　10YR2/1 黒褐色粘土（黒色細砂を少量含む）

第 78 図　SB03 平・断面・出土遺物実測図

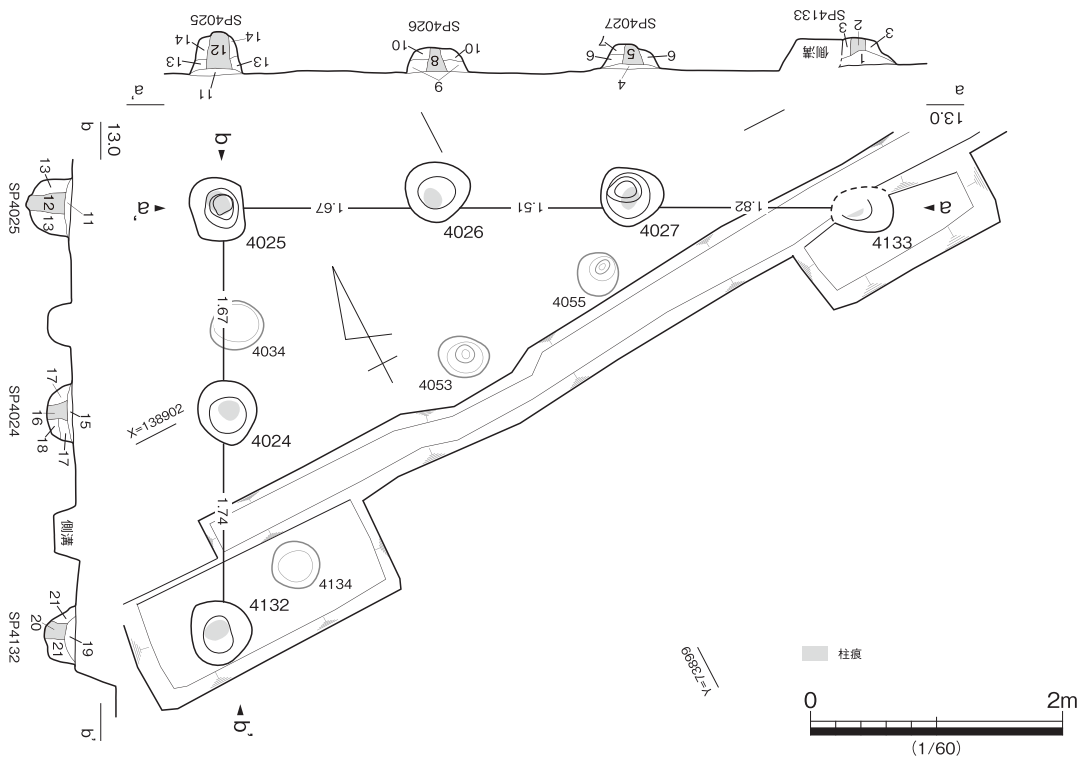


a-a’ b-b’ c-c’ d-d’ e-e’

1　10YR3/1 黒褐色粘質土
2　5Y4/1 灰色極細砂（黄褐色小礫を少量含む）
3　2.5Y2/1 黒色粘質土（ベース由来のブロックを少量含む）
4　10YR4/2 灰黄褐色極細砂（明褐色細砂を粒状に含む、抜取）
5　10YR3/2 黒褐色シルト
6　2.5Y3/1 黒褐色シルト（ベース由来のブロック・明褐色小礫を含む）
7　10YR6/1 褐灰色シルト（明褐色細砂・ベース由来の小ブロックを少量含む、柱痕）
8　10YR6/1 褐灰色極細砂（Mn 沈着）
9　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（ベース由来の黄色ブロックを少量含む）
10　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
11　10YR4/1 褐灰色極細砂（径１～２㎝のシルト含む）
12　10YR3/2 黒褐色粘質土
13　2.5Y3/2 黒褐色極細砂（明褐色極細砂を粒状に含む）
14　10YR3/1 黒褐色粘質土（黄褐色小礫を少量含む）
15　10YR4/1 褐灰色極細砂（Mn、抜取か？）
16　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
17　2.5Y3/1 黒褐色極細砂～シルト（ベース由来のブロック土を少量含む）
18　10YR3/2 黒褐色極細砂（明褐色細砂を少量含む）
19　10YR2/1 黒色シルト（混じり無、色やや淡い）
20　10YR2/1 黒色シルト（明褐細砂を少量含む）
21　10YR4/1 褐灰色極細砂（明褐色細砂を粒状に含む、抜取）
22　10YR3/2 黒褐色土？
23　無記載
24　無記載
25　2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂（Mn，明褐色細砂を含む）
26　10YR3/2 黒褐色極細砂
27　10YR3/2 黒褐色シルト（ベース由来の黄色ブロックを少量含む）
28　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂（長石，Mn 少）
29　10YR5/1 褐灰色細砂（明褐色細砂を少量含む）
30　10YR6/1 褐灰色細砂（ベース由来の黄色ブロックを少量含む、明褐色粒子を含む）
31　10YR7/1 灰白色極細砂（明褐色細砂を含む）
32　10YR6/2 灰黄褐色極細砂（ベースよりきめ細か）
33　10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂（Mn、白色小礫を含む）



第 79 図　SB04 平・断面・出土遺物実測図



a-a' b-b'

1　10YR4/1 褐灰色粗砂（ベース土・10YR7/3 にぶい黄橙色粗砂をブロック状に含む）
2　10YR4/1 褐灰色粗砂（ベース土ブロックを多量に含む）
3　10YR7/1 灰白色粗砂
4　10YR5/1 褐灰色極細砂（Mn 少）
5　10YR3/2 黒褐色シルト（褐灰色砂を少量含む）
6　10YR3/3 暗褐色シルト
7　10YR4/2 灰黄褐色　（黄褐色の小礫を少量含む）
8　10YR3/1 黒褐色粘質土
9　2.5Y4/1 黄灰色極細砂（ベース由来のブロック含む）
10　10YR2/1 黒色粘質土（褐色の小礫を少量含む）
11　10YR5/1 褐灰色極細砂（Mn、小礫を含む）
12　10YR3/3 暗褐色粘質土（混じり少ない）
13　10YR3/3 暗褐色極細砂（ベース由来の黄色ブロックを少量含む）
14　2.5Y3/1 黒褐色極細砂～シルト
15　10YR5/1 褐灰色極細砂（Mn）
16　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（明褐色シルトを少量含む）
17　10YR3/1 黒褐色粘質土（黄褐色の小礫を少量含む）
18　10YR3/1 黒褐色細砂（混じり少ない）
19　10YR5/1 褐灰色粗砂（粘性有、小礫を部分的に含む）
20　10YR3/1 黒褐色粘質中砂（ベース土、10YR5/4 にぶい黄褐色細砂ブロックを少量含む）
21　10YR4/1 褐灰色中砂

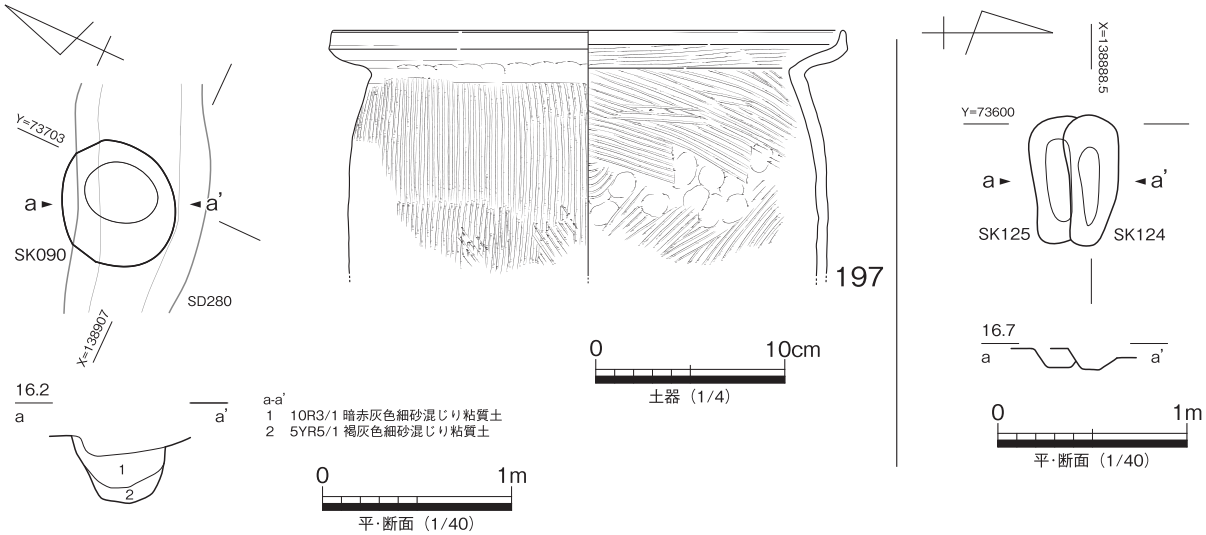
第 80 図　SB05 平・断面図

出土遺物より本建物は、８世紀中葉を中心とした時期に廃絶した可能性が考えられる。

SB05（第 80 図）

４区中央南端で検出した掘立柱建物で、建物南東半部は調査区外へ延長するため、本来の建物規模は確定できない。桁行３間（5.06 m）以上、梁間２間（3.41 m）以上、床面積 17.25㎡以上、主軸方位 N 62.81° W に配された側柱建物として復元する。柱穴は、１辺 0.40 ～ 0.49 m のやや歪な隅丸方形ないし不整楕円形状を呈し、残存深 0.20 ～ 0.36 m で、断面形は概ね逆台形状を呈する。柱穴底面の標高は、12.42 ～ 12.58 m と一定しないが、柱通りは概ね揃っていた。側溝により削奪してしまった SP4133 を除く各柱穴で、径 0.12 ～ 0.18 m の柱痕を確認し、本建物でも転用のため柱材を切断し抜き取った痕跡を確認した。柱穴掘り方内で根石・詰石等は確認していない。埋土は主に褐色系粘質土や細砂等で充填されていた。

遺物は、SP4025 と SP4026 より器種不詳の土師器小片各１点が出土した。出土遺物より建物の詳細な時期を特定することは困難であるが、柱穴規模は上述した SB04 と近似し、柱材を転用する点も、SB04 と共通することから、８世紀代の可能性を想定する。



第 81 図　SK090・SK124・SK125 平・断面・出土遺物実測図

土坑

SK090（第 81 図）

13 区北西部で検出した土坑である。SD280 や鋤溝と重複し、いずれよりも先行する。平面形は、長軸 0.64 m、短軸 0.58 m、主軸方向 N 61.22° E に配された、東西にやや長い略円形状を呈する。残存深は約 0.35 m で、断面形は箱形を呈する。埋土は２層に細分され、灰色系粘質土がレンズ状に堆積していた。

遺物は図示した以外に、器種不詳の土師器片５点が出土した。**197** は土師器甕の口縁部から体部の破片。口縁部は強く屈曲して開き、端部を上方へ摘まみ上げ、受け口状をなす。内外面にはやや粗いハケが施される。内面には使用時のものとみられる炭化物が僅かに付着する。

出土遺物は乏しいが、本遺構の時期は９世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SK124（第 81 図）

14 区中央南半付近で検出した土坑である。SK125 より後出する。平面形は、長軸 0.67 m、短軸 0.17 ～ 0.27 m、主軸方向 N 86.5° W とほぼ正方位に配された、東西に長い隅丸長方形状を呈する。残存深は 0.15 m で、断面形は逆台形状を呈する。埋土に関する記録は残されていない。

遺物は、須恵器小片１点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、重複する SK125 と規模や主軸方向が酷似することから、SK125 に後続する土坑の可能性を想定する。

SK125（第 81 図）

14 区中央南半付近で検出した土坑である。重複関係より、SK124 より先行する。平面形は、長軸 0.65 m、短軸 0.21 ～ 0.28 m、主軸方向 N 86.89° E とほぼ正方位に配された、東西に長い隅丸長方形状を呈する。残存深 0.14 m で、断面形は逆台形状を呈する。埋土に関する記録は残されていない。

遺物は、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師器羽釜等の小片が７点程度出土した。図化した遺物はない。出土遺物より、本遺構は９世紀後葉～ 10 世紀代に位置付けられると考える。

溝

SD087（第 82 図）

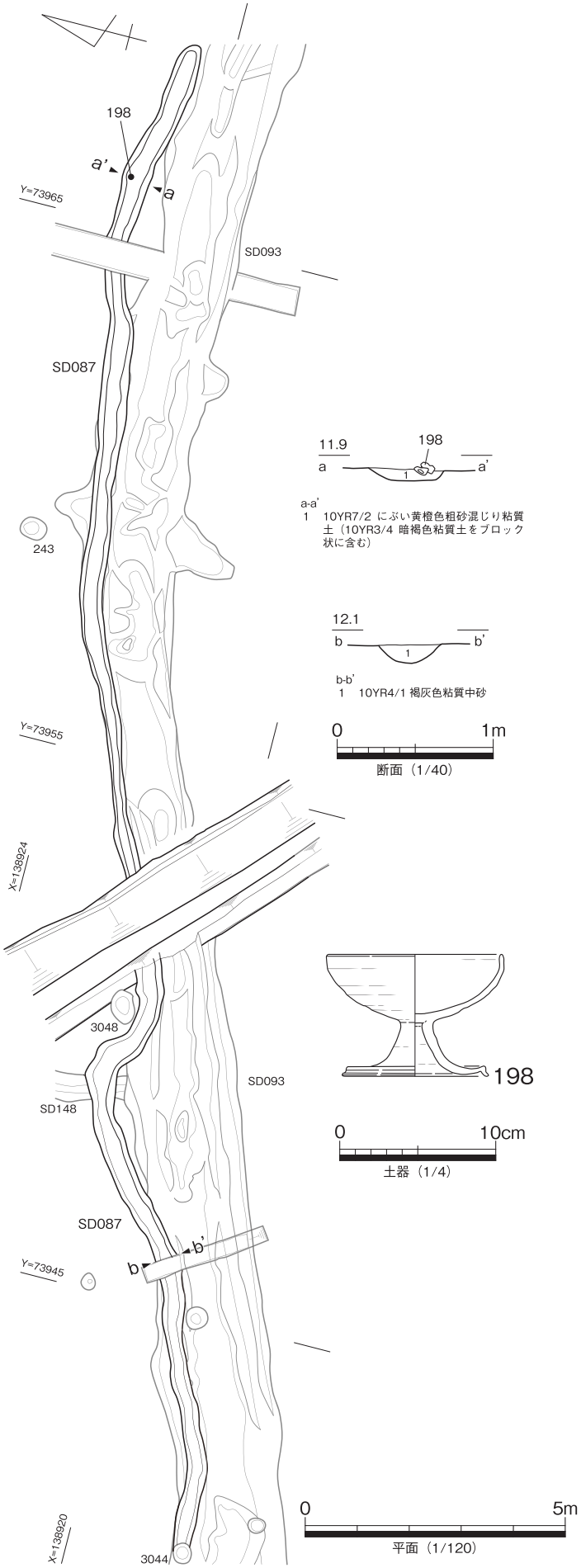
２区及び３区２面南端付近で検出した東西溝で、SD093 と SD148 より後出する。２区と３区で埋土はやや異なるが、位置関係や規模等より一連の溝と判断した。東西両端は調査区内で途切れ、延長約 29.9 m を調査した。西半部で大きくクランクし、全体としてやや北に浅く弧を描いて配される。検出面幅 0.22 ～ 0.48 m、残存深 0.08 ～ 0.11 m、断面形は皿状を呈する。埋土はにぶい黄橙色粘質土等の単層であった。溝底面の標高は、東端部付近で 11.67 m前後、西端付近で 12.02 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下する可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、弥生土器や土師器、土師質土器皿等の小片 30 点程度が出土した。土師質土器皿等の中世に位置付けられる資料は、本溝と重複する遺構からの混入の可能性が高い。**198** は須恵器無蓋高杯。杯部の約半分と脚端部の一部を欠損する。焼成はやや不良で、調整等は判断しがたい。本来は、SD093 に帰属する資料であろう。

出土遺物や SD093 より後出すること等より、本遺構は９～ 10 世紀代に位置付けられると考える。

SD093（第 83 ～ 101 図）

SD093 は、２区から 12 区の調査区北半部を東西に横断して検出した大型幹線水路である。３区と６区では第２面で検出した。４区で SD171 が南より、７区で SDSD219 が北よりそれぞれ合流し、13 区 SD272 も本溝に合流する支溝である可能性が高い。また、SD087、SD151、SD165、SD167、SD217 等の遺



第 82 図　SD087 平・断面・出土遺物実測図

構と重複し、そのいずれよりも先行する。

12 区から５区にかけて、やや蛇行しつつも概ねＮ 88.6° Ｅとほぼ正方位に開削され、４区で南東方向Ｎ 75.5° Ｗに屈曲して約 36 ｍ東進し、３区から２区にかけての丘陵の張り出し部では、丘陵裾に沿って北に緩やかに弧を描いて配される。西端は調査区外へ延長し、東端は１区に延長するものと考えられるが、調査で延長部分は確認できなかった。12 区から２区までで、約 274.8 ｍを調査した。

西側延長部が不明なため、取水源については不詳である。12 区と 14 区の間には、調査地南側丘陵の開析谷に築池された町田新池より北へ流下する自然河川が想定され（第２章）ており、この自然河川もしくは、町田新池周辺に小規模な谷池を築池して水源としたか、あるいはさらに西へ延びて番屋川上流域で取水したかの可能性が想像される。いずれにせよ番屋川右岸の「町田」周辺の谷底平野部に拓かれた耕作地を灌漑域とする水路であることは確実であろう。

溝は、検出面幅 1.1 ～　7.1 ｍ、残存深 0.3 ～ 1.1 ｍ、断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は、記録位置により大きく異なるものの、調査時に概ね上・中・下層の３層に大別されている。下層は、溝機能時の堆積物とみられる砂層がレンズ状に認められ、上・中層は、シルトや粘質土の堆積が主体となるようである。また、４・６・７区では、中層の一部にブロック土の混入が顕著に見られ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。上述した流路幅が場所により大きく異なるのは、開削後の溝肩部の浸食や遺構上面の削奪の深浅といった要因以外にも、例えばｇ - ｇ’やｍ - ｍ’断面図に記録されているように、複数度の改修の可能性が堆積状況から読み取れ、その改修溝の開削位置のズレにより、遺構検出段階での溝幅の広狭が生じた可能性も考えられる。なお、上述した埋土の大別層位は、必ずしも改修の単位とは合致していない。溝底面の標高は、水流の下刻による起伏がやや顕著に認められるものの、概ね 12 区西半付近で 14.3 ｍ前後、７区東半部で 12.7 ｍ前後、２区東端部付近で 11.1 ｍ前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたことが想定され、それは現地表面の傾斜の方向と合致する。

３区西部の南岸と、８区西半部のそれぞれ溝底付近で、打設された木杭が出土（第 86 図）した。木杭は、それぞれ 0.4 ～ 1.0 ｍ前後の間隔で疎らに打設され、横木等の構造物は認められず、構築時の状態が保存されたものかは不詳ながら、護岸やシガラミといった用途は想定し難い。

６区中央では、井堰の残欠とみられる木群を検出した（第 87 図）。木群は、本溝を東西に横断する形で集中する。断面図作成ラインのように、斜め支保材のように直線状に並ぶものや横木状のものもある。乱れた検出状況を呈し、樹皮・細枝等の構造材や置土（盛土）はみられないが、流出や廃絶時の転用などを考慮する必要がある。なお、材は持ち帰っていないため、個々の材の加工度を判断できない。

６区西端の中層において、木樋 **1513** を検出した。設置位置から遊離した状態であるが、用途として３区 SD171 のような南側からの枝溝をパスして北側に通水させる機能が想定できる。

遺物は、コンテナ 17 箱程度出土した。図示したように、混入とみられる弥生時代の資料が一定数を占める。

199 ～ **415** は、土器、土製品類である。各出土遺物の出土層位等は、巻末の観察表を参照されたい。**199** ～ **201** は縄文土器沈線文系深鉢の口縁部片。縄文時代後期前葉前後に位置付けられ、ベース砂層からの混入資料の可能性が高い。**202** は晩期前葉の浅鉢。マメツ等のため器表面の調整は不明瞭である。

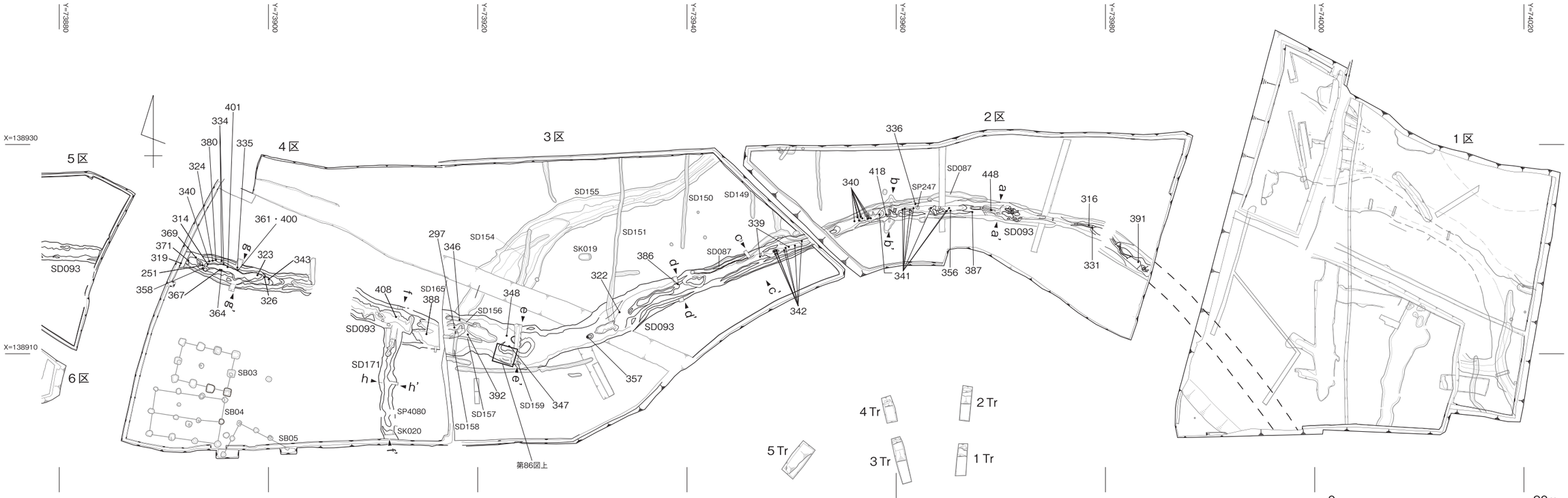
203 ～ **313** は、弥生時代後期～古墳時代前期前葉の土器である。**203** は小型の直口壺。ほぼ完形で出土した。底部は小さな平底を呈し、正立する。口縁端部に１条の凹線状の段を認める。なお、口縁端部内面には、約 0.8㎝の幅で煤が全周に付着する。**204** ～ **212** は広口壺。**206** の口縁部は緩やかに外反し

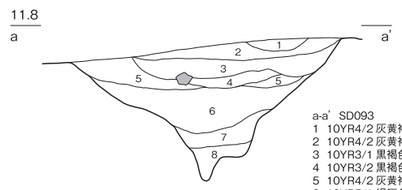
て開き、端部は上下に小さく拡張してほぼ直立する端面をなし、凹線で装飾する。210 は古式土師器広口壺。直立する頸部より強く折り返して口縁部は水平に近く開き、端部を上方へ摘み上げる。211 は長頸広口壺。頸基部に刺突文を施すが、全周はしない。213・214 は二重口縁壺。213 は、口縁端部に擬凹線１条を施し、屈曲部に刺突文を巡らせ装飾する。214 は広口壺の口縁端部上面に、くの字状に屈曲して開く口縁部を貼付して二重口縁とする。215・216 は壺頸部の破片。215 はやや内傾して立ち上がる頚基部に、刻み目突帯を貼付する。216 は直立する頸基部に、ハケ状工具による刻み目を巡らせる。230 は広口壺。

217 ～ 229・231 ～ 241 は甕。218・219 は小形の甕。219 はハケ甕で、体部内面はケズリ調整後にハケ調整を施し、最後にランダムなミガキ調整を加える。底部は小さな凸面底で、外底面にもハケ調整を施す。223 の体部には、格子状（矢羽状）のタタキ調整を施す。同種のタタキ調整は、263 や 265 の鉢にも見られる。220・227・228・236・239・240 は、胎土中に角閃石粒を多量に含み、形態からも高松市香東川下流域産甕の搬入資料である。236 の体部外面と 240 の内外面には、使用時の煤が付着する。235 も、胎土中に角閃石粒を多量に含むが、形態から丸亀平野北西部産甕（蔵本 2009）の搬入資料と見られる。本資料は、70 m程離れた６区と 12 区の本溝から出土した破片が接合した。242 の底部片は、235 と近接した位置より出土し、胎土も近似することから、接合はしないものの同一個体である可能性が考えられる。221 は口縁部叩き出しの甕。229 もタタキ甕で、口縁部は内湾して開き、布留甕の影響が見られる。231 もタタキ甕で、外反して開く口縁部の端部を上方へ摘み上げる。庄内甕の影響が見られる模倣品であろう。また 234 や 238 のように、体部内面を上端までケズリを施すものは、本地域の土器成形技法からは逸脱したものである。

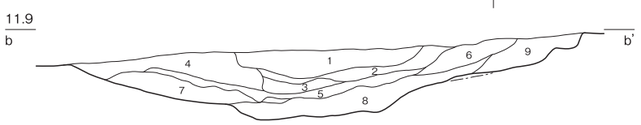
242 ～ 252 は高杯。242 は胎土中に角閃石粒を多量に含み、形態からも香東川下流域産土器の搬入資料である。243 は形態的には香東川下流域産の高杯に近似するが、胎土中には角閃石粒は顕著に含まれず、模倣品の可能性が高い。245・247 は中実の脚柱部を有する高杯の脚部片。245 は裾部との屈曲部に径約 1.2cmの円形透孔を３孔配する。247 は内面上端にシボリ目が僅かに残り、裾部にかけてナデ調整を施す。248 の裾部はスカート状に開き、端部は上方へ摘み上げる。裾部に径 0.6cmの円形透孔を穿つ。252 は高杯脚裾部の小片として図示した。端部は肥厚しつつ上下に摘まみ出して拡張し、端面に凹線２条を加える。

253 ～ 279 は鉢。253 ～ 265 は小形の鉢である。253 は手づくねの鉢である。254 は小形の鉢もしくは台付鉢で、ミガキを多用した精製品。口縁部に２条の凹線文を加え装飾する。255 は外反する口縁部を有する鉢で、内外面にミガキ調整を施す。256 は皿状の鉢として図示したが、口縁部や調整等の残存が悪く、別の器種となる可能性がある。257 は平面長楕円形を呈する浅鉢で、底部は丸底。上図左半の口縁端部付近、網掛け部分に煤が付着する。258 の内面は、ハケ調整後に体下半部を中心に放射状のミガキ調整を施す。260 の底部は小さな円盤状の平底を呈し、内型成型の可能性が考えられる。261 は底部にケズリ調整を施し、丸底状に仕上げる。263 は砲弾形の体部を呈する深鉢で、外面には矢羽状のタタキを施す。265 は深鉢形態の底部穿孔鉢である。平底の底部中央に、径約 0.5cmの円孔を焼成前に穿孔する。266 ～ 274 は中形の鉢。266 は突出した小さな平底を呈する。269 は、口縁部に粘土紐を継ぎ足して、外反して開く口縁部を成形する。271 はやや器壁の厚いボール状を呈し、底部は小さな平底である。274 はボール状を呈し、内外面には煤が付着し、煮沸具として利用した可能性が考えられる。275 ～ 279 は大形鉢である。278 の体部外面には、螺旋状のタタキ調整が施される。

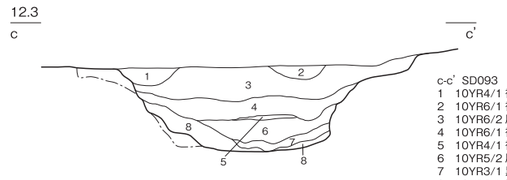




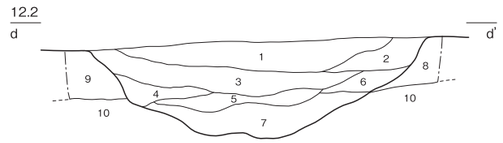
a-a' SD093
1 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じり粘質土（10YR3/4 暗褐色粘質土含む、SD089）
2 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土（Mn、10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂含む）
3 10YR3/1 黒褐色極細砂混じり粘質土（Mn、10YR6/1 褐灰色極細砂混じり粘質土含む）
4 10YR3/2 黒褐色粘質土
5 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じり粘質土（10YR3/4 暗褐色細砂含む）
6 10YR5/1 褐灰色細砂～砂礫ラミナ
7 10YR4/2 灰黄褐色細砂
8 10YR4/2 灰黄褐色砂礫



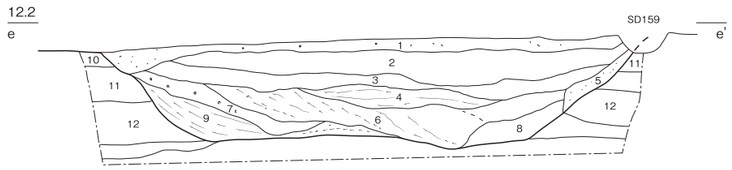
b-b' SD093
1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土（10YR7/6 明黄褐色粘質土（ベース層）ブロックを多量に含む、上層）
2 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（中層）
3 10YR4/1 褐灰色細砂（中層）
4 10YR4/1 褐灰色粘質土（中層）
5 10YR3/1 黒褐色粘土（下層）
6 10YR4/2 灰黄褐色粘質土～中砂（下層）
7 10YR6/2 灰黄褐色細砂（下層）
8 10YR5/1 褐灰色中砂～粗砂（下位に 10YR2/1 黒色粘質土ブロックを含む、下層）
9 10YR8/3 浅黄橙色粘質土（下層）



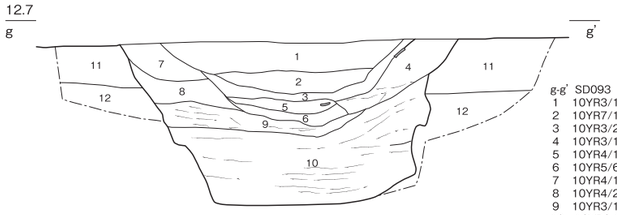
c-c' SD093
1 10YR4/1 褐灰色粘質中砂（SD087）
2 10YR6/1 褐灰色中砂（SD094）
3 10YR6/2 灰黄褐色中砂（上層）
4 10YR6/1 褐灰色中砂（10YR6/6 明黄褐色粘土ブロックを多量に含む、中層）
5 10YR4/1 褐灰色粘土（中層）
6 10YR5/2 灰黄褐色粗砂（下層）
7 10YR3/1 黒褐色粘土（下層）
8 10YR5/1 褐灰色中砂（下層）



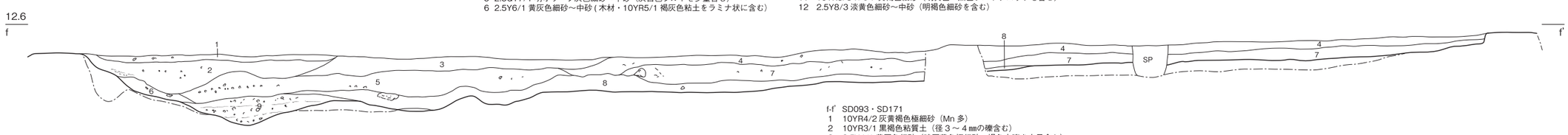
d-d' SD093
1 10YR4/2 灰黄褐色粗砂（Mn、上層）
2 10YR5/1 褐灰色粗砂（Mn、上層）
3 10YR4/1 褐灰色粘質粗砂（中層）
4 10YR5/2 灰黄褐色粗砂（中層）
5 10YR7/3 にぶい黄橙色粗砂（下層）
6 10YR6/2 灰黄褐灰色粗砂（中層）
7 10YR7/3 にぶい黄橙色粗砂・10YR5/1 褐灰色粘質砂ラミナ（下層）
8 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂（Mn）
9 10YR6/3 にぶい黄橙色粗砂
10 10YR7/6 明黄褐色粘質砂



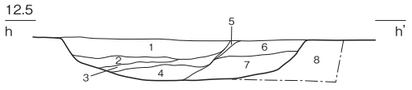
e-e' SD093
1 10YR3/3 暗褐色細砂（褐灰シルト・褐色小礫を少量含む、上層）
2 10YR2/1 黒色粘土（細砂～中砂を含む）
3 10YR1.7/1 黒色粘土（褐色小礫を少量含む、2 層より強粘質）
4 2.5Y7/1 灰白色細砂～中砂（10YR2/1 黒色粘土をラミナ状に含む）
5 2.5GY7/1 明オリーブ灰色細砂～中砂（灰白色シルトを少量含む）
6 2.5Y6/1 黄灰色細砂～中砂 (木材・10YR5/1 褐灰色粘土をラミナ状に含む）
7 N1.5/ 黒色粘土（褐色小礫を少量含む）
8 10YR2/1 黒色粘土（N8/ 灰白色細砂を含む）
9 10YR4/1 褐灰色細砂（10YR5/3 にぶい黄褐色細砂をラミナ状に含む）
10 10YR4/1 褐灰色細砂（黄褐色細砂・褐色小礫を含む、ベース）
11 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂（明黄色～黒色シルトブロックを含む）
12 2.5Y8/3 淡黄色細砂～中砂（明褐色細砂を含む）



g-g' SD093
1 10YR3/1 黒褐色粗砂（粘性あり）
2 10YR7/1 灰白色細礫
3 10YR3/2 黒褐色粘土
4 10YR3/1 黒褐色粗砂（10YR2/1 黒色粘土含む）
5 10YR4/1 褐灰色粗砂（粘性あり）
6 10YR5/6 黄褐色粗砂（粘性あり）
7 10YR4/1 褐灰色中砂（粘質あり）
8 10YR4/2 灰黄褐色中砂（粘性あり）
9 10YR3/1 黒褐色粘土（10YR4/6 褐色粗砂ラミナ状に含む）
10 10YR6/2 灰黄褐色粗砂・10YR5/1 褐灰色粗砂
11 10YR6/2 灰黄褐色細砂（Mn）
12 10YR6/6 明黄褐色～ 10YR6/1 褐灰色粘質粗砂（下位グライ化）



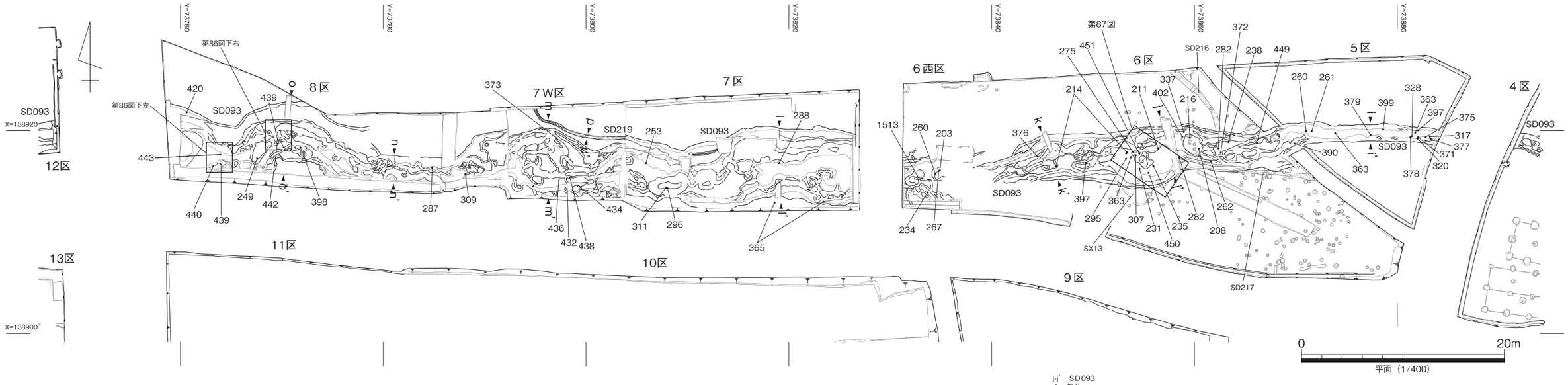
f-f' SD093・SD171
1 10YR4/2 灰黄褐色極細砂（Mn 多）
2 10YR3/1 黒褐色粘質土（径 3 ～ 4 mmの礫含む）
3 2.5Y4/1 黄灰色細砂（暗灰黄色極細砂、褐色小礫を少量含む）
4 10YR3/1 黒褐色？
5 10YR5/1 褐灰色中～粗砂（粘質土ブロックを少量含む）
6 10YR5/1 褐灰色中～粗砂（ベース由来の黄色ブロック含む）
7 10YR5/1 褐灰色シルト（細砂～中砂含む）
8 2.5Y6/1 黄灰色細砂～中砂（褐灰色粘土ブロックを含む）
9 10YR6/6 明黄褐色粗砂（褐灰色粗砂を互層状に含む）

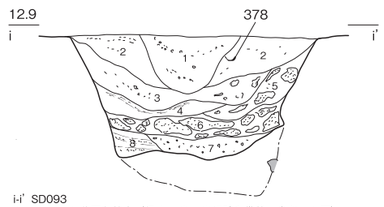


h-h' SD171
1 10YR3/1 黒褐色粗砂（粘性あり）
2 無記載
3 10YR8/4 浅黄橙色細砂
4 10YR6/1 褐灰色中砂～細砂
5 10YR7/4 にぶい黄橙色中砂
6 10YR4/1 褐灰色粗砂（粘性あり）
7 10YR5/1 褐灰色細砂
8 10YR5/1 褐灰色中砂（10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロックを含む）

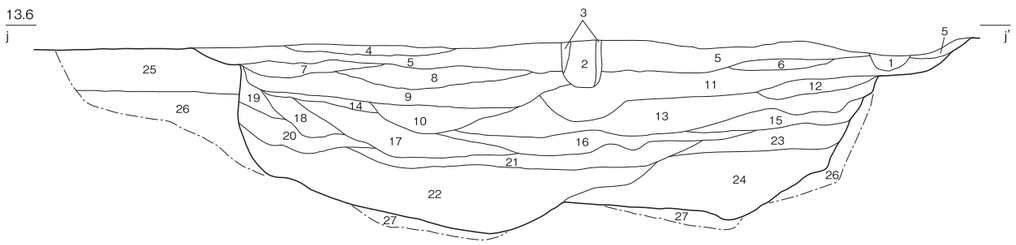
石
0
1m
断面（1/40）

第 83 図　SD093・SD219 平・断面図

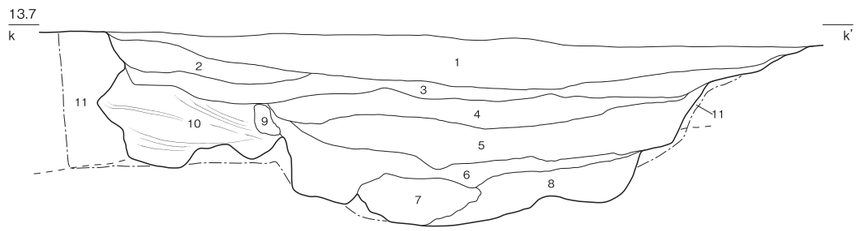




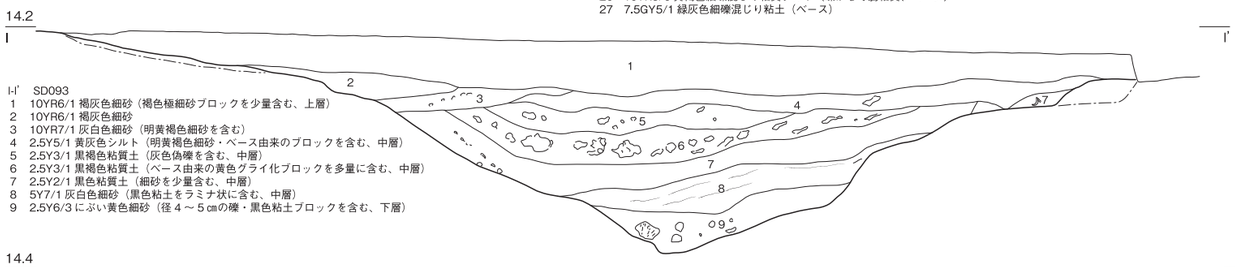
i-i' SD093
1　2.5Y4/1 黄灰色粘土（径２～３㎜の細砂を帯状に含む、上層）
2　10YR5/1 褐灰色細砂（褐色の小礫を少量含む、中層）
3　10YR5/1 褐灰色細砂（10YR3/1 黒褐色シルトを少量含む、中層）
4　10YR4/1 褐灰色極細砂（褐色の小礫とベース由来の黄色ブロックを少量含む、中層）
5　2.5Y6/1 黄灰色？（径４～５㎝のベース由来の黄色～灰白色ブロックを多量に含む、下層）
6　7.5YR5/8 明褐色細砂（ベース由来のブロックに黒色粘質土が少量混じる、下層）
7　7.5Y6/1 灰色中砂～粗砂（下層）
8　10YR6/1 褐灰色中砂～粗砂（明褐色中砂と黄色細砂をラミナ状に含む）



j-j' SD093
1　撹乱
2　10YR4/2 灰黄褐色細砂混じり粘質シルト（SP6164 ?）
3　10YR4/2 灰黄褐色と 10YR4/3 にぶい黄褐色の中間色細礫混じり粘質シルト（SP6164 ?）
4　10YR2/2 黒褐色細礫混じり粘土（上層）
5　7.5Y3/2 オリーブ黒色細礫混じり粘質シルト（上層）
6　10YR4/6 褐色細礫混じり粘質シルト（上層）
7　10YR2/3 黒褐色中砂混じり粘質シルト（上層）
8　10YR2/3 黒褐色細礫混じり粘質シルト（10YR4/4 褐色細礫混粘質シルトブロックを多量に含む、ベース層ブロック土を―定量含む、上層）
9　10YR2/3 黒褐色細礫混じり粘土（やや砂質を帯びる、上層）
10　10YR2/2 黒褐色細礫混じり粘土（10YR3/2 黒褐色粗砂混じり細砂をラミナ状に含む、上層）
11　10YR2/2 黒褐色細礫混じり粘土（上層）
12　10YR5/6 黄褐色細砂混じり粘質シルト（壁面の岸崩落土？、上層）
13　10YR3/2 黒褐色中砂混じり粘質シルト（上層）
14　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり細砂（上層）
15　10YR3/2 黒褐色と 10YR4/2 灰黄褐色の中間色中砂混じり粘質シルト（上層）
16　10YR3/3 暗褐色中砂混じり粘土（砂質土をラミナ状に含む、中層）
17　10YR3/1 黒褐色と 10YR3/2 黒褐色の中間色細礫混じり粘質シルト（10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり細砂をラミナ状に含む、中層）
18　10YR3/1 黒褐色細礫混じり粘質シルト（中層）
19　10YR4/3 にぶい黄褐色中砂混じり粘質シルト（中層）
20　10YR4/4 褐色細礫混じり粘質シルト（強粘質、中層）
21　10YR1.7/1 黒色粘土（中層）
22　2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じり細砂（下底部に礫混じり粗砂を含む、下層）
23　2.5Y3/1 黒褐色と 2.5Y2/1 黒色の中間色中砂混じり粘質シルト（中層）
24　2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じり粘質シルト（下層）
25　7.5YR4/6 褐色細礫混じり粘質シルト（ベース）
26　10YR5/6 黄褐色細礫混じり粘質シルト（礫がちで弱粘質、ベース）
27　7.5GY5/1 緑灰色細礫混じり粘土（ベース）

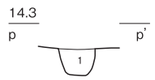


k-k' SD093
1　10YR3/3 暗褐色細礫混じり粘質シルト（下端に径７㎝の 10YR2/3 黒褐色細礫混じり粘土が堆積）
2　10YR2/2 黒褐色細礫混じり細砂（やや粘質シルトを多量に含む）
3　10YR2/2 黒褐色と 10YR2/1 黒色の中間色粗砂混じり粘質シルト
4　10YR3/1 黒褐色粗砂混じり粘質シルト（2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂混じり粘土を少量含む）
5　10YR2/1 黒色細礫混じり粘質シルト（7.5Y5/2 灰オリーブ色細礫混じり粘土をブロック状に含む、下端に径 10 ㎝程度の 10YR1.7/1 黒色粘土を層状に含む）
6　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混じり細砂（2.5Y7/2 灰黄色極細砂等をラミナ状に含む、10YR2/1 黒色粘土小ブロックを若干量含む）
7　10YR1.7/1 黒色中砂混じり粘土（有機物を若干量含む）
8　2.5Y4/2 暗灰黄色角礫混じり粗砂
9　7.5Y5/2 灰オリーブ色細礫混じり粘土
10　10YR4/4 褐色中砂混じり細砂（下端に Fe 沈着、ラミナ堆積）
11　10YR6/6 明黄褐色細礫混じり粘土（破線下でグライ化し 7.5GY に変色する）

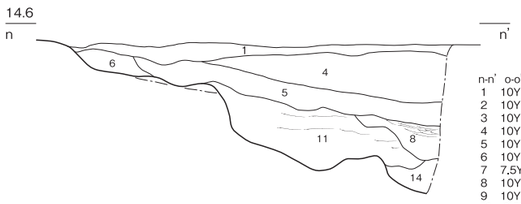


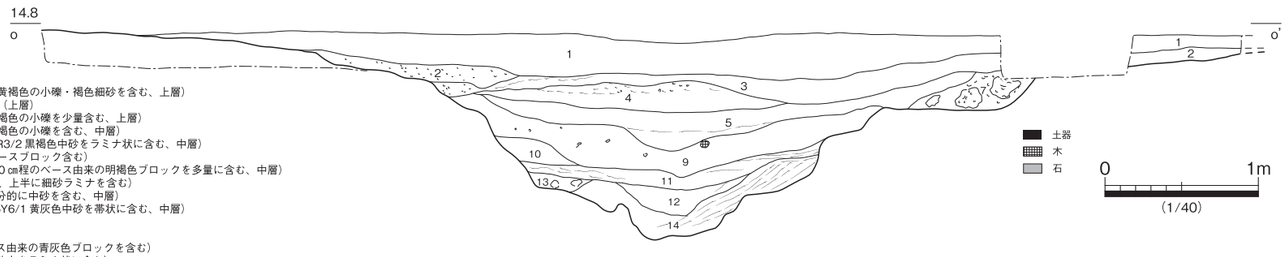
l-l' SD093
1　10YR6/1 褐灰色細砂（褐色極細砂ブロックを少量含む、上層）
2　10YR6/1 褐灰色細砂
3　10YR7/1 灰白色細砂（明黄褐色細砂を含む）
4　2.5Y5/1 黄灰色シルト（明黄褐色細砂・ベース由来のブロックを含む、中層）
5　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（灰色偽礫を含む、中層）
6　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（ベース由来の黄色グライ化ブロックを多量に含む、中層）
7　2.5Y2/1 黒色粘質土（細砂を少量含む、中層）
8　5Y7/1 灰白色細砂（黒色粘土をラミナ状に含む、中層）
9　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂（径４～５㎝の礫・黒色粘土ブロックを含む、下層）

m-m' SD093
1　（上層）　8　（中層）
2　（中層）　9　（中層）
3　（中層）　10　（下層）
4　（中層）　11　（下層）
5　（中層）　12　（下層）
6　（中層）　13　（下層）
7　（中層）　14　10YR6/1 褐灰色粗砂（SD219）



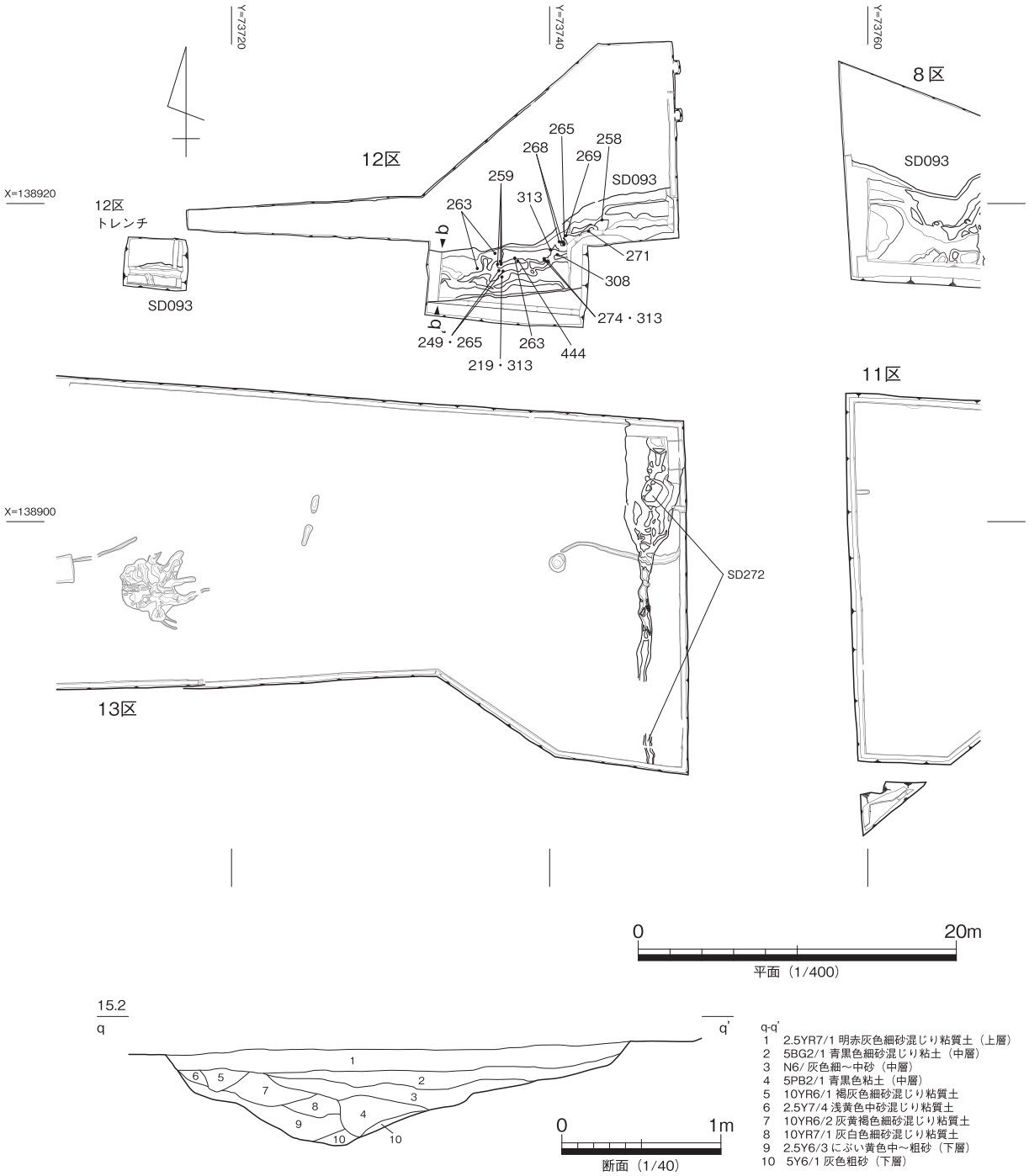
p-p' SD219
1　10YR7/1 灰白色細砂
（明黄褐色の小礫を少量含む、
部分的に灰黄褐色シルト含む）





n-n' o-o' SD093
1　10YR6/1 褐灰色極細砂（明黄褐色の小礫・褐色細砂を含む、上層）
2　10YR3/2 黒褐色細砂～中砂（上層）
3　10YR2/2 黒褐色中砂（明黄褐色の小礫を少量含む、上層）
4　10YR2/1 黒色粘質土（明黄褐色の小礫を含む、中層）
5　10YR2/1 黒色粘質土（10YR3/2 黒褐色中砂をラミナ状に含む、中層）
6　10YR6/6 明黄褐色粘土（ベースブロック含む）
7　7.5YR4/1 褐灰色中砂（径 10 ㎝程のベース由来の明褐色ブロックを多量に含む、中層）
8　10YR2/1 黒色粘土（強粘質、上半に細砂ラミナを含む）
9　10YR1.7/1 黒色粘質土（部分的に中砂を含む、中層）
10　2.5Y4/1 黄灰色粘質土（2.5Y6/1 黄灰色中砂を帯状に含む、中層）
11　5Y5/1 灰色細砂（ラミナ有）
12　5Y3/1 オリーブ黒色中砂
13　2.5Y3/1 黒褐色粘土（ベース由来の青灰色ブロックを含む）
14　2.5Y7/1 灰白色細砂（黒色粘土をラミナ状に含む）

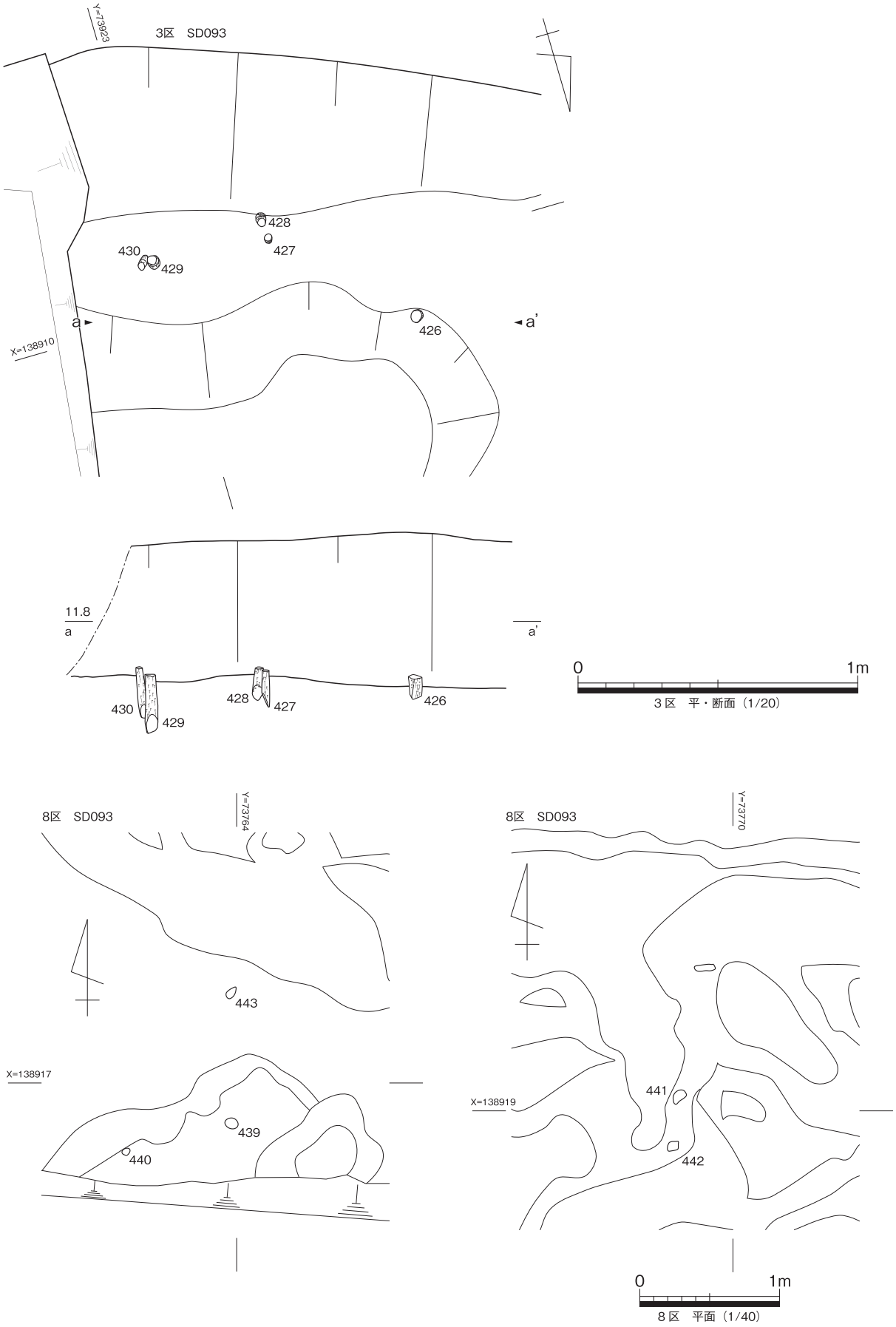
第 84 図　SD093 平・断面図２



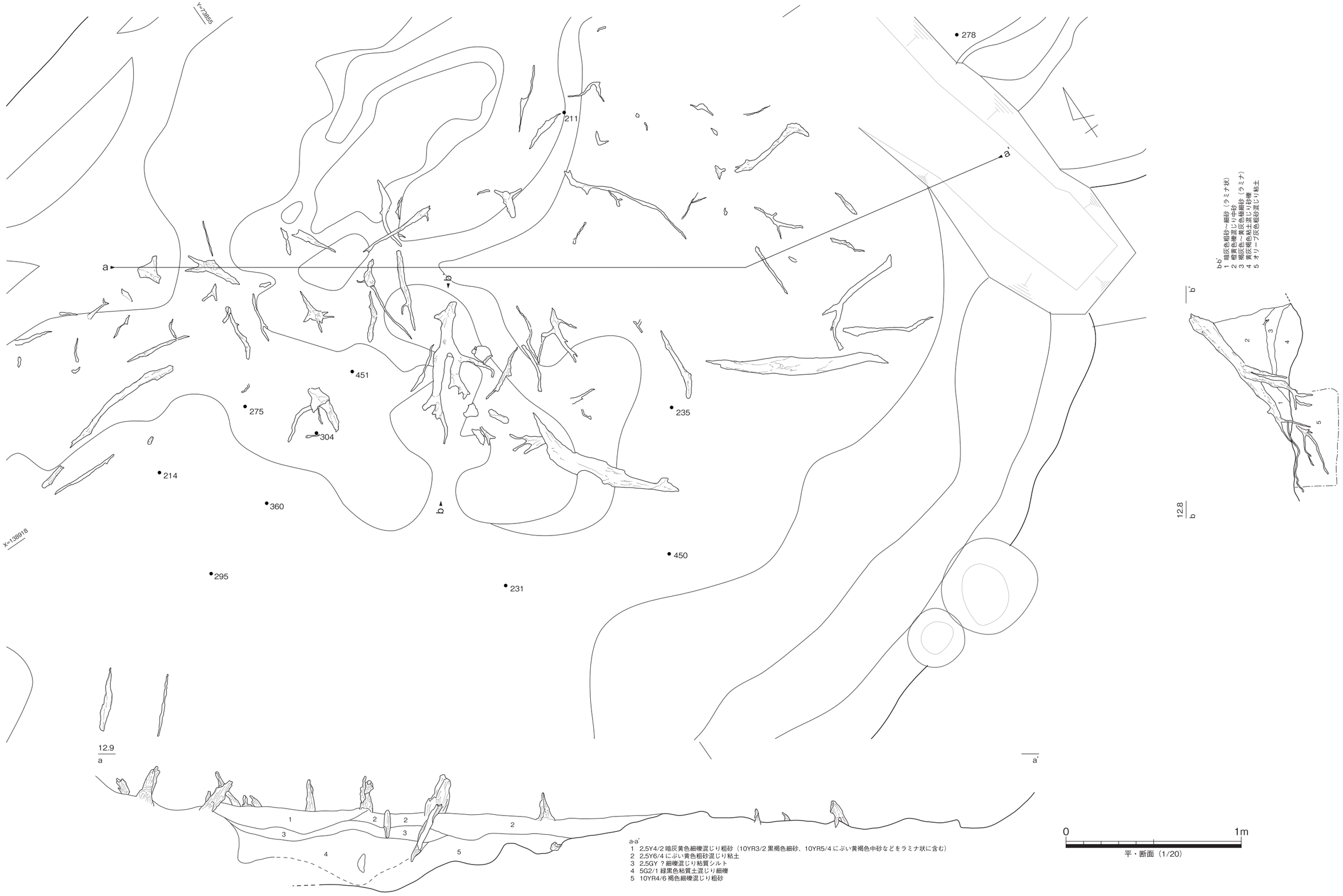
第 85 図　SD093 平・断面図３

280 ～ **282** は底部穿孔鉢の底部片である。**280** は尖底状の底部に、径約 0.9㎝の円孔を焼成前に穿つ。**283**・**284** は器台の脚部片。いずれも裾部に径 1.2㎝の円形透孔を穿つ。脚端部は上下に摘まみ出して拡張し、端面に **283** は２条の凹線と竹管文、**284** は竹管文で加飾する。**285** ～ **287** は小形台付鉢。**285** は、内外面にミガキ調整を施した精製品。**286** は、外面ケズリ調整のみの粗製品だが、内面は入念なミガキ調整で仕上げる。

288 ～ **313** は、壺や甕、鉢等の底部片である。**312** は大形壺の底部片として図示した。底部は突出した平底を呈し、外面には種実圧痕とみられる窪みを認めるが、マメツのため詳細は不明である。



第 86 図　SD093 杭列検出状況



第 87 図　SD093 木群出土状況